

Z32-B8

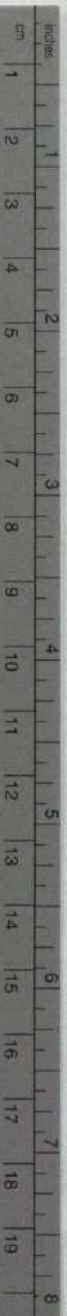
金の星

十二月号

第八卷
第十二号



国立国
8. 3.
図書館



Kodak Color Control Patches

Blue 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 Cyan 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 Green 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 Yellow 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 Red 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 Magenta 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 White 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 3/Color 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19
 Black 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

C
Y
M

© Kodak, 2007 TM: Kodak

オハナシ

巖谷小波関・鹿島鳴秋著
橋本邦助・太田三郎
細木原静枝・岡野榮
杉浦非水 齋

童話も
童話も
昔のこと
今のこともある
面白くて
爲めになる
オハナシ

四六倍假裝全五册
紙数各册八十餘頁
定價各 壹圓
送料各 八 錢

日本一の畫

巖谷小波 著
岡野榮・小林 健吉
杉浦非水 齋

繪が一頁に
お噺が一頁
繪が踊れば
お噺も踊り出す
これこそ本統の
日本一の畫噺

袖珍假裝全三十五册
紙数各册三十餘頁
定價各 貳拾五錢
送料各 金 四 錢

オトウキタ

巖谷小波 著
太田三郎・岡野榮
細木原静枝 齋

歌と繪と
次々に續いてゆく
印象の濃い本
牛若丸は？
舌切雀は？
運動會の賞品は！

四六倍假裝全三册
紙数各册三十餘頁
定價各 八 拾 錢
送料各 六 錢

東京日本橋通
丸善株式會社

札幌
仙台
瀋陽
大連
天津
北京
漢口
上海
香港

大板
神戶
京都
名古屋
東京

丸善株式會社

カピル

強飲料

秋だ

うんと讀まう
うんと飲まう

智慧を肥やす爲に
體力を肥やす爲に



酒店・食料品店・藥店にあり

世界少年少女名著大系(30) 金の星社編・挿畫岩岡こも枝畫伯

みふし兒

この本は有名な英國の作家デッケンスの作として、世界に知られたつてゐる名作「デビッド・カッパーフヒールド」を譯述したものです。

あはれな、みなし兒デビッドの出生を書いたものから、恐らく涙なしにこの本を讀み終ることは出来ないでせう。お父さんに早く死に別れ、繼父の手にかゝつて殘酷な目にあはされ、家を出て流れ流れて乞食の子のやうなあはれな有様になり、最後にあたゝかい伯母の手によつて救はれるまでの長い物語ですが、作者デッケンスが、自分の悲しい生立ちをもとにして書いたものだけに眞に迫つてゐます。

フランスの有名な「家なき子」と並び稱せられてゐる名作です。お讀みになつた方は、必ず「お、こんないゝ作があつたのか」と驚かれることとせう。編者は三井信衛先生で挿畫は岩岡こも枝女史ですから、申分ないものです。

四六判箱入頗美本
内容一九〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京 本郷 勤坂 町
金の星社
振替 東京 五九五六 番

世界少年少女偉人傳大系(8) 二島霜川先生著・裝幀・挿畫 羽鳥古山畫伯

大楠公

皆さんが知つてゐなければならぬ偉人はすゝめふん澤山にありませう。しかし、この大楠公「楠正成」などは日本人としては是非知つてゐなければならぬ人です。

丸の内の宮城前に銅像にまでなつて立つてゐる大忠臣楠正成のくはしい傳記を書いたのが、この三島先生の「大楠公」です。課外讀本として是非皆さんがお讀みにならなければならぬ本です。

正成のお話は「太平記」といふやうな本にも出てありますが、世間に傳へられてゐるものには随分間違が多いのです。三島霜川先生は、深い歴史の研究家です。正成の一生をあらゆる方面から研究して、それを皆さんのために面白く書いたのですから、本當にいい本です。この本を讀んだ方は、正成といふ人がどんなに偉い人であつたか、解ると同時に、陛下に忠義を盡す爲めに正成がどんなに苦心をしたかといふこともわかつて、思はず感涙にむせぶでせう。

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外八枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京 本郷 勤坂 町
金の星社
振替 東京 五九五六 番

世界少年少女偉人傳大系(9) 大戸喜一郎先生著・裝幀・挿畫 平澤文吉畫伯

ロシア。英雄ピーター大帝

ロシアの英雄ピーター大帝のお話は、國語讀本にも出てありますし、また活動寫真にもなつてゐて随分有名なものです。しかし、これ程有名であり、偉い人でありながら、その生ひ立ちから最後までを少年少女の爲めに書いた本がないといふのは實に残念なことです。ピーター大帝ほど變化の多い一生を送つた人はめづらしいでせう。小説や物語の主人公には、それは随分變つた一生を送つた人もありますが、作り話でなく本當にさういふ一生を送つたピーター大帝は送つたのです。野蠻國だつたロシアを一足とびに文明國ロシアにした偉人ですから、あらゆる艱難に出遇つてゐます。少年の時から既に幾度か死ぬやうな目に遇ひ、青年となつては王の身でありながら造船職工となつて諸列國を見學しました。それでも尙、最後には自分の妃や子供までも殺さねばならない悲しい運命を持つた人でありました。是非御一讀下さい。

四六判箱入頗美本
内容二〇〇頁
挿畫三色版外十枚
定價金九拾錢
送料六錢

東京本郷動坂町
金の星社
東京東替番九五六

小久保陽三編 池上浩裝幀

少年少女文藝 荒木又右衛門 講義叢書第一編

劍聖、荒木又右衛門が丑之助と云つた少年時代から華々しい其一生を終へるまでを、詳しく細大漏さず、小久保先生の明快な筆で描いたものです。日本三大仇討の一つとして有名な伊賀上野の仇討に大立物となつて、或時は疾風の如くに現はれ、又煙のやうに消え去つて縦横に活躍する又右衛門の勇姿は、鬼神の飛躍する姿とも武神が奮闘する有様とも云ひ得ませう。柳生流の極意を傳へる爲の柳生飛騨守と又右衛門の奉書仕合は、芝居などにも脚色まれて盛んに上演されてゐる程有名な物語です。これ等の事件を詳細に面白く誌した本書は眞の人格者、荒木又右衛門を知るに絶好の本と云へます。少年少女文藝講義叢書の第一編として荒木又右衛門を選ぶ事の出来たのは、發行所一人の喜びではありません。活動寫真を見るよりも面白くて爲になる荒木又右衛門！是非御一讀下さい。

愈々發行

東京市外巢鴨上駒込二八
金の蘭社
東京東替番一〇七一

四六判總クロース
原色版カヴァ附
挿繪三色版外十頁
本文二〇〇頁
定價金壹圓
送料十二錢



目次

サンタのお爺さん (表紙・石版)……………岡本歸一
 クリスマスの前夜 (口繪・三色版)……………寺内萬治郎
 子供は風の子 (童話)……………野口雨情
 同作 曲……………藤井清水
 童話の旅 (紀行文)……………沖野岩三郎
 愛犬物語 語長篇……………小島政二郎
 漫畫芝居 コドモ座……………河盛久夫
 河童大王 (童話)……………犬田卯
 子捕の名人 (童話)……………野口雨情選
 卵捕の名人 (童話)……………鳴海要吉
 御先祖の自慢話 (童話)……………立石美和
 フランダーズの少年 (長篇)……………天三宅房子
 稲田の稲 (童話)……………宮杜 仙之介

さんちんかんポチ小僧 (童話)……………西川 勉
 乗合馬車 (童話)……………伊藤 昌星
 かなしい玩具 (童話)……………吉田初太郎
 をりケ 時 (童話)……………川口平一郎
 河原の石 (童話)……………野口雨情選
 畫物語五郎正宗……………保積稻天
 怪 彗 星 (長篇)……………三井信衛
 燈 (童話)……………古村徹三
 鈍馬のヤーン (童話)……………菅 忠 雄
 沖へ (童話)……………日高直爾
 月こアンテナ (童話)……………達崎 龍
 六助さんと狐 (童話)……………河野 青雨
 猫をすてる夕方 (童話)……………齋藤佐次郎選
 三毛 (童話)……………山本 鼎選
 通者だより……………(100)



クリスマスの前夜

(金の星童)

寺内萬治郎畫

服部龍太郎著 (最新刊)

世界音樂家物語

四六判 三〇九頁
定價 二圓
送料(書留)十二錢

★ 今日まで、小學、中學、女學校の音樂教育は、單に唱歌教授にのみよつて其の任務を果たされて來た。勿論「唱ふこと」は音樂を知るについて、最も重要なことである。★
★ 併し更に一步を進めて、音樂史、音樂家の傳、音樂の形式について親切に教授された★
★ ならば、子供達の世界は何れほど幸福を増すか知れない。本書はその意味に於て、各學校、又家庭の必備書として心より推稱いたします。(挿畫十二葉、裝幀 恩地孝四郎氏)

音樂の法悦境 山田耕作著 價一八〇

ニジンスキイの藝術 ジェフ・ホイットアス著 澤柳禮次郎譯 價〇七〇

ホームシングス 第一編 第三編 山田耕作作曲 價各編〇八〇

星の金 系大著名女少年少界世 編社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

編一第 編二第 編三第 編四第 編五第

ロビンソン漂流記

ナポレオン物語

ドン・キホーテ

コロンブス物語

大人國小人國めぐり
ガリバー旅行記

船乗りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて来るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程深山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですからこの本を讀まない者は一生の不幸だといはれてゐます。

『ナポレオン物語』は即ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の孤島セント・ヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語をわかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

イスパニヤのある村にクイズノといふ男がりました。が、毎日騎士の物語りを讀んでゐる内に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、瘦馬に乗つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語です。

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心懺悔して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇抜な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる教訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすすめいたします。

星の金 系大著名女少年少界世 編社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美顔入箱判六四

編六第 編七第 編八第 編九第 編十第

ロビンソン・フッド物語

アラビヤン・ナイト

ギリシヤ神話
オデッセー物語

シエークスピア物語

グリム童話

『ロビンソン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャウワッドの森に住んで正義のために戦つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで劇をなぞらせます。悪い知事や僧正や、王をやつつけて、最後に厄のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊れてゐる物語りです。昔アラビヤに悪い王があつて、毎日一人づゝお妃を迎へては翌日は殺して了ふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜も千一夜物語つたのが、この『アラビヤン・ナイト』だといはれてゐます。

ギリシヤ詩聖ホーマの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤド物語』と共に有名な物語りです。トロイの戦争に遙々海を越えて出征したオデッセーが、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遇ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語りです。

有名なシエークスピアの芝居の中で、童話として面白いものばかり特を選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のま』『ベニスの商人』『がみ』『女闘し』『眞夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一冊にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

星の金 社 編 系大著名女少年少界世

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編一十第 入 繪 イソツプ物語

編二十第 日本 神話 古事記物語

編三十第 子供キリスト傳 新約物語

編四十第 西遊記

編五十第 ローマ英雄物語

イソツプ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで随分深山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づゝの立派な装を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見てほしいと思ひます。

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありません。實際驚く程立派な面白い物語です。日本の國がはじめて出来た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に従つて最も正確に書いた本です。この偉い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として、廣く世に紹介したいと思います。

支那から印度へ、はる／＼お經を取りに行つた玄奘三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で様々の怪物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的な名作です。この本を讀まない者も不幸です。

ローマの英雄を中心にして、ローマの歴史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロムルスとレマスの不思議な生立物語りからはじまつて、ハルニバルやシーザーなどの大英雄の物語りなどが順々に現れて来て、息もつけぬ程面白い物語です。

編六十第 聖書物語

編七十第 奴隷トム物語

編八十第 ギリシヤ英雄物語

編九十第 アンデルセン童話

編十二第 小公子

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものはないと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハム・イサクの偉えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判斷。實に面白い物語です。

奴隷トム物語を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語りです。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために著した名著を、土臺にして書いたものだけに、最も理想的なものとして讀むことの出来るものです。

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならぬほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推薦されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育てられたが、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主入公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

星の金 社 編 系大著名女少年少界世

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

星の金 系大著名女少年少界世 編社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編五十二第 編四十二第 編三十二第 編二十二第 編一十二第

母を尋ねて三千里

本書は伊太利文藝アマチスの世界的名作「タオレ」の中から、最も面白い部分を選んで一冊としたものであります。三千里の道をはるく、母を尋ねて行く少年の哀話もあり、又難破船に乗り込んで自分の身を棄て、少女を救ふ勇敢な少年の話もあり、各篇とも一生忘れられぬ物語りばかりです。少年少女必讀の書。

不思議國めぐり

或る所に、アリスと云ふおてんば少女がありました。夏の日の事、お姉さんと一緒に草原に行つて草をつんであるうちにつひつと眠つてしまひました。その間にアリスは、一つの不思議な夢を見ました。覺めてからのち、アリスはお姉様にその話をしました。一體それは、どんな夢だつたでせうか？

青い鳥

メーテルリンクの傑作「青い鳥」の名を知らぬ者はありません。原作は劇になつてゐますが、本書はそれをお話風に書改めました。青い鳥の影を追つて夜の宮、未來の國と移り歩くナルナル、ミナル二人の姿は、ちょうど活動寫眞でも見るかのように、皆様の眼の前に浮んでせう。何人も一讀すべき名著であります。

爲朝一代記

鎮西八郎爲朝！この名を聞いて胸を躍らさぬ少年はありませぬ。また、英雄崇拜の種々しい精神に燃えてゐる少女諸君にも、この爲朝の一代記は、如何にスベライ魅力をもつ事とせう。本書の表紙畫の、海に向つて弓を射てゐる爲朝の勇姿は、讀まして本書の内容を語つてゐます。金の星社自慢の本として、お薦めします。

ハムレット

ハムレットは、世界第一の芝居の作者シェークスピアの傑作です。デンマークの王子ハムレットの一生にからまる悲しき運命を描いたもので、ハムレットが如何に自分の父母を熱愛したか、又、可憐な花の如きオファリヤ姫のはかない最後など、一讀、再讀、いよ／＼熱讀を覺える名篇であります。

星の金 系大著名女少年少界世 編社

錢六金料送・錢十九金冊各價定・本美頗入箱判六四

編六廿第 編七廿第 編八廿第 編九廿第 編十三第

新ロビンソン漂流記

スペインを船出した汽船が大暴風雨に出遭ひ、船中の一人一人鳥で籠被して下ひ、一家族六人の者だけが助かりました。その内四年間の話を書いたこの六人の者が救ひの船の来るまでの二年間の話を書いたのが此の物語で、野生の植物を食物にしたり、猿や駝鳥をお友達にしたりします。

ポムペイ最後の日

伊太利のベスビヤス山の大噴火と共に地の下に埋つてしまつたポムペイの町のお話です。お話の中には、いろいろな人物が現れます。妖術使や魔女のやうな悪い人間が出て來ると共に、可憐な盲目の花賣娘や、歴史の星のやうな美女や、義侠に富む勇士などが現れる。歴史にながく傳へられる「ポムペイ最後の日」のあはれにして、悲しい物語となつてゐます。英國のリットン卿の名作です。

少年鼓手

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えた時、雪なだれにあひました。その時なだれの下から勇敢にも軍鼓を打つた「少年鼓手」の話は世界に有名です。かういふ勇敢な少年少女のお話ばかり十篇を集めたのが此の本ですから、血をどり、涙ながれるものばかりです。

ジャンバルヂヤン

主人公ジャンバルヂヤンは貧乏なためにパン一切をぬすみました。その爲めに牢へ入れられます。やがて牢を破つて出て來て再び泥棒にならうとする處を、エミエル僧正に助けられ、偉い人間となりますが、それからジャンバルヂヤンの一生は涙なしには讀めません。ニゴーの大傑作です。

ロミオとジュリエット

有名なシェークスピアの作つたロミオとジュリエット二人の物語りは、最初から終りまで泣かすには讀めない程あはれにしてはかぬものです。最後は二人の死によつて終る悲劇中の悲劇ですから、あはれな話、感しい話の好きな方々には、さつと大歡迎を受けます。是非讀んでいただきたい世界の悲劇です。

(あゝ無情)

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編一第	系大傳人偉 編二第	系大傳人偉 編三第	系大傳人偉 編四第	系大傳人偉 編五第
<p>ジヤンヌダルク</p> <p>大木雄三先生著。有名なオルレアンの少女ジャンヌ、ダルクが奮ひ立つて母國を滅亡から救ふ勇壯な物語りである。各頁とも血ひたたり、涙ながる、悲劇的物語である。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>ローマ 英雄 シーザー</p> <p>霜田史光先生著。シーザーは古代の大英雄である。世界歴史を通じてシーザー程の英雄は幾人と數へる程しかない。そのシーザーの變化極りない運命を書いたのが本書である。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>ネルソン</p> <p>三井信衛先生著。トラファルガアの海戦に名譽の死を遂げたネルソンの傳記です。その國を愛する赤心と、己の責任を重んずる觀念は偉大なる教訓を讀者に與へます。何人も一讀すべき名著です。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>リンコルン</p> <p>久米敏一先生著。最も優れた立志傳として、この「リンコン傳」をおすすめする。紙一枚、ペン先一ツ買ひを惜しむな。如何にして大統領の地位を勝ち得たか。本書を讀まぬ者は一生の不幸である。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>太閤秀吉</p> <p>三島精川先生著。日本の英雄として世界に誇り得るものは、太閤秀吉である。本書は、秀吉の一生をあらゆる歴史書を參考にして研究し、それを三島先生の名筆によつて面白く書現したものである。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>

録目著名行發社星の金

系大傳人偉 編六第	系大傳人偉 編七第	系大傳人偉 編八第	系大傳人偉 編九第	系大傳人偉 編十第
<p>ナイチンゲール</p> <p>入交織一郎先生著。女神様のやうに崇高な心を持つたナイチンゲールの一生を書いた本です。この人の傳記を讀んだものは誰でも、本當に清い心の人になります。少年少女の爲に書かれたはじめての本です。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>ワシントン</p> <p>三井信衛先生著。アメリカを獨立させて最初の大統領になつた大偉人ワシントンの傳記です。艱難辛苦して遂に偉い人となつたワシントンのお話は、誰が讀んでも勇氣をつけられます。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>大楠公</p> <p>三島精川先生著。楠正成の傳記を正しく書いた本として、これ以上の本はありません。この本を讀んだ人は成程と正成の偉かつた事に感ずるでせう。面白くてそして本當の正成のお話解る本です。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>英雄 ローマ ピーター大帝</p> <p>大戸喜一郎先生著。文明に後れてゐたロシアを盛んにする爲めに、帝王の身であり乍ら造船職工にまでなり、また自分の子や妻までも殺さなければならなくなつた變化極りないピーター大帝の物語です。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>	<p>お釋迦様</p> <p>齋藤佐次郎先生著。お釋迦様ほど立派な方は恐らくこの世の中に生れなかつたでせう。そのお釋迦様の一生をわかりやすく、面白く、そして正しく傳へたのが此の本です。得がたい本です。</p> <p>錢十九金 錢六金料送</p>

の評好大るす表代を界曲作謠童本日
集譜曲謠童星の金

錢六金料送・錢拾八金下以輯三・錢拾六金各輯二輯一

第一輯 人買船 (目曲)	第二輯 一つお星さん (目曲)	第三輯 青い (目曲)	第四輯 赤い靴 (目曲)	第五輯 夢ごり (目曲)	第六輯 子守唄 (目曲)	第七輯 お人形さんの夢 (目曲)	第八輯 べんべん鳥 (目曲)	第九輯 あの町この町 (目曲)	第十輯 名所めぐり (目曲)	第十二輯 夢のお國 (目曲)
本居長世作曲・野口雨情作謠 人買船、青い目の人形、九官鳥、日傘、歸る燕、十五夜お月さん	本居長世作曲・野口雨情作謠 一つお星さん、七つの子、鼯と雀、鶏さん、象の鼻、四丁目の犬	本居長世作曲・野口雨情作謠 青い空、燕、雨夜の傘、てんく蟲、雀の酒盛り、呼子鳥	本居長世作曲・野口雨情作謠 赤い靴、山彦、三ヶ月さん、姥捨山、朝鮮館屋、眠り龜の子	小松耕輔作曲・野口雨情作謠 夢とり、おしやれ椿、つげ子、十と七つ、雲雀の水汲、雀の機織り	本居長世作曲・野口雨情作謠 子守唄、櫻と小鳥、乙姫さま、はぐれ鳥、葱坊主、藪の下道	小松耕輔作曲・進崎龍作謠 お人形さんの夢、釣鐘草、啼いた啼いた雉子、芒の穂、お馬のお耳、草遊び、霜柱	小松耕輔作曲・進崎龍作謠 べんべん鳥、螢のお使、仔牛、赤い子馬車、紅殻蜻蛉、さみだれ	中山晋平作曲・野口雨情作謠 あの町この町、雀踊り、木の葉のお船、高野山、鼠の小母さん、謹誠寺の狸囃	本居長世作曲・野口雨情作謠 長柄の橋、柱くとり、阿彌陀池、宮城野の萩、お乳給、石山寺の秋の月	藤井清水作曲・野口雨情作謠 夢のお國、鬼が来い、赤い櫻ン柱、猫さんお手まり、櫻の歌、砂の歌

東 京 本 郷
 動 坂 町
社星の金
 電話小石川三五七八番
 振替東京五九六番

星の金

二十二月號



(通巻第八拾五號)

子供は風の子

野口雨情

子供は風の子

お庭で遊びな

お庭の風は

山から ごとごと

お庭の風は

海から ごとごと



海から吹いたら
海のこと思ひな

山から吹いたら

山のこと思ひな

子供は風の子

お庭で遊びな



寺内萬治郎畫

童話の旅

沖野岩三郎

川上四郎 畫



山梨縣西八代郡の釋迦ヶ嶽を中心にして、南に阿難山、北に迦葉山といふ二つの山があります。いつの時代だか解りませんが、ずっと昔のこと、京都に大變な戦争がありました時、一人のお坊さんが世界中にたつた三體しか無いといふお釋迦様の像を、その戦争のために焼拂はれてはいけないと思つて、お寺から負出してこゝまで持つて來たのです。

お坊さんは富士の裾野から甲斐の國に入つて、高山の上にも其のお釋迦様を祭つて置きました。山の上から見ますと、南と北とに二つの山があつて、二人の家來のやうに眞中の山を守つてゐます。そこでお坊さんは、眞中の山を釋迦ヶ嶽、北の山を迦葉山、南の山を阿難山と名づけました。迦葉といふのは兄弟三人が一千人の弟子をつれて、お釋迦様の所へ教を受けに來た人で、阿難といふのは、お釋迦様の亡くなられる時、お傍に事へてゐた弟子です。お坊さんは此の二人の名を山の名にしたのです。迦葉も阿難も、温順しいお坊さんの名ですから、定めてまん丸い低い山だらうと思つたなら大變な間違ひです。迦葉山も阿難山も、お話にならない險阻な山です。だから甲斐の國にとつて此山は、駿河から攻めて來る敵を、防ぐに必要な場所であつたのです。武田信玄が此の二つの山を越えた時に、戦争の起つた時、此の山の間にある九一色村の村民を徵發

して兵隊にする必要があると思つたので、特に九一色村の人たちには税金の一部を免除したことがあります。武田氏が滅びて徳川家康の時代になりました時、家康は阿難山の南にある精進湖の傍に一夜の宿をとつて、其の地の四十二戸に對し、税金免除の許を與へました。これは、こんなにして土地の人たちを大事にして置かなければ、戦争の起つた場合に都合が悪かつたからせう。大正十五年九月三十日の午前でした。私はそんな三百年前の歴史を考へながら、甲府市から迦葉山の麓まで自動車に乗つて進みました。有名な笛吹川を横きつて、右左口といふ所で自動車を降りると、そこには一人の青年紳士が立つてゐて、

「あなたは沖野さんでせう。」と問ひかけました。
「ええ、さうです。あなたはどなたですか？」
「私は上九一色の土橋です。」

「さうですか。私はこれから、あなたの村へ重話講演に行くところです。」

「私はあなたが多分こゝへお出でるだらうと思つて待つてゐたのです。」

「さうですか、それはすみませんでした。さあ、一緒にまゐりませう。」

私は土橋さんと一緒に歩き出すと、向ふの家からカーキ色の軍服みたいな着物を着た人達が八人、どかどか出て来ました。其のうちの四人は、脇掛椅子のやうなものを、竹竿に縛りつけて擔いでゐます。

「あれは何ですか？」と私は問ひました。

「あれはOmitです。」と土橋さんは妙なところで英語をつかひました。

「椅子はわかつてゐますが、どうして、あんな竹に縛りつけてゐるんです。」

「あの椅子に腰を掛けてゐる人を、四人で擔いで行

くのです。」

「今まで腰を掛けた人がありますか。」

「大正十一年に攝政宮殿下が、あのチェアにお乗りになりました。」

「攝政宮殿下お一人だけですか。」

「二三週間にスキーデンの皇太子殿下もあのチェアにお乗りになりました。」

「では、そんな尊いお方のお乗りになつたチェアを博覽會へでも出品したのですか。」

「いゝえ、さうぢやありません。あなたをお乗せするつもりです。」

「飛んでもない。そんな尊い人のお召しになつた乗物へ、私のやうな無位無官の者が乗れば罰があたります。」

「兩殿下の外に、西園寺公爵も乗りました。」

「西園寺さんは總理大臣よりも、えらい人ぢやないですか。」

「山梨縣の警察部長さんも乗りました。」

「それも私よりえらいお役人ぢやないですか。」

「あのチェアは最初の程は、攝政の宮殿下のお召しになつたものと云つて、村役場で大切に保管して



あつたのですが、いつの間にか、多勢の子供たちが引ばり出して、さんざん乗り廻しました。」

「さうですか、子供さんたちの乗つたチェアなら、

私が乗つても罰はあたりませんまい。」

「ええええ、決して罰は當りません。さアお乗り下さい。」

けれども私は何となく恥かしいので、すぐ乗ることとは出来ませんでした。で、話しながら險しい坂路を登つてゐましたが、お腹は空いて来る、汗はだくだく流れる。たうとう閉口して、坂の中途から私はそのチェアに乗せてもらひました。

チェアに乗る前、私はそのカーキ色の軍服を着た人達のお名前をきゝますと、

内藤卓衛、田中一虎、土橋今朝清、樋口辰雄、河野儀勝、河野幸俊、佐野幸康、小林潔、だと土橋さんは申しました。みんな武田信玄の家來で、千石以上の扶方でも取つてゐる堂々たる武士みたいなお名前ばかりです。

「土橋さん、あなたのお名前は、なんと讀むのですか？」 私はチェアに乗りながら問ひました。

「力といふ字を書いて、リキと讀むのです。」
「いつその事、ムを一つ添えて、リキムと讀んだら
どうです。」私が、さう言ひましたので、みんな一度
にとつと笑ひました。

山の上まで二時間かゝりました。迦葉坂の頂には
東宮殿下の御野立の跡があつて、暴風に吹倒されか
けた四阿が建つてゐます。

そこへ登つてみますと、西北には駒ヶ岳、八ヶ岳
金峰などの高山が美しく聳えてゐます。茅ヶ岳の山
脈が段々低くなつて、盆地になつた所に白いものが
ちら／＼見えます。それが甲府市です。釜無川と笛
吹川との二つの川が平野の中を帯のやうに横きつて
ゐます。

「あの釜無川で、岩見重太郎が五百貫目の石を肩げ
たさうですネ。」と青年の一人が言ひました。

「さうでせう。岩見重太郎だつたら、五百貫目
位の石を肩げる位何でもなかつたでせう。私し

に吹かれてうなづいてゐます。昔の家の中
では、お婆アさんが繭を糸に紡いでゐ
ます。

二

私は土橋さんのお宅へ宿りました。
土橋さんのお父様は土地の郵便局
長さんで、讀書家と見えて、珍らし
い書物が澤山本箱に並んでゐます。
「いつから郵便局長をお勤めです
か。」と聞いてみました。

「今から五十二年前の明治七年に、
私の父が始めました。」

「明治七年ごろに、毎日どの位の手
紙を配達しましたか。」

「一ヶ月に十通位だつたさうです。」
「今はどれほど配達しますか。」



は天の橋立で、重太郎が、一刀のもとに斬つたとい
ふ大きな石を見ました。大きな石を斜に、すかりと
斬る程の強力ですもの。」と云つたのは私でした。
景色はいゝが、頂上に立つてゐると冷たくなるの
で、私たちは急いで山を上九一色村の方へ降りまし
た。
村には百日紅の花が眞紅に咲いてゐる、カンナの花
が美しく夕陽に輝いてゐました。まだ赤い種を見せ
ない柘榴の實が
枝の上で、風



「唯今は一日に約一千通はありませう。」
「僅か五十年間に、大變な進歩ですネ。」

そんな話をしながら、私は夕御飯をいたゞきました。朝の七時に長野縣の下諏訪で、パンを二片食べただけで、お腹がべこ／＼になつてゐた私は、何を食へたか飲んだか、そんな事は夢中でした。青年團の人たちが、あのチエアで私を迎へて来て下さらなかつたなら、多分私は迦葉山の中程で行倒れて死んでゐたかも知れません。

そんな事を思ひながら、私は芦川の水音を聞きつつ安らかに眠りました。

翌る朝眼を覺して、表へ出てみますと、高い峰から鮮かな太陽が顔を出してゐました。お庭の泉水には大きな鯉が、小い鮎魚や鱒と一絡に遊んでゐます。樺や梅や蘭が高く聳えてゐます。

八時頃に學校へ行つてみますと、もう子供さんたちは運動場に並んでゐました。

三

二日の朝、下九一色の青年團の人たちが迎へて来てくれました。

「遠き者は音にも聞け、近きものは眼にも見よ。吾こそは甲斐の住人河野義治なるぞ。」と呼はりながら栗毛の馬に打跨げて現はれたと云つたなら、三百年前の武田信玄の家來が攻めて来たやうに思はれるでせうが、實はさうでなく、今日私が下九一色の可愛い子供さんたちに、童話講演に行くといふことを聞いた河野さんは、自分の大事の馬に西洋鞍を置いて私を迎へて来て下さつたのです。

私は二十年ぶりで、馬に乗りました。そして芦川に添うて二里ばかり下りますと、下九一色の村に着きました。途中に觀音岩、大岩などの名所がありま

す。
下九一色の校長米山さんは、私の知つてゐる入で

昨年きんねんの十月から、ほとんど一ヶ年講演をしながら私は、久しぶりに子供さんたちの前に立つのが嬉しくてたまりませんでした。けれども一時間ほど話しますと、もう聲が續かなくなつて、大變苦しくなりましたから、残念であつたが、お話のまとまりをつけないうちやめました。けれども子供さんたちは、みんな面白さうに聞いてゐました。

十時前に土橋さんのお父様に案内されて、芦川のほとりにある永代寺に参つてみました。そこには昔釋迦しやくたヶ嶽たけに祭つてあつた、世界に三體しかないといふお釋迦しやくた様を祭つてあります。子供を負おした一人のお婆アさんが、

「のう、お釋迦しやくた様、この子の病氣を早くなほしておくれ。のう、お釋迦しやくた様、頼みますぞい。」と云つて拜んでゐました。

午後は二時から青年團の人たちに二時間のお話をしましたが、別に疲れもしませんでした。

したから、お互ひに大へん喜び合ひました。

十時から講演會を開きました。初めに飯島先生が栗拾ひといふ面白いお話をいたしました。そのあとで、私は一時間あまり、「泣かわかれ」を話しました。題は泣きわかれといふのですが、みんな腹をかゝへて笑ひました。

午後一時から青年團の人たちに、一時間半の長講演をいたしました。お話の内容は、明治維新の前に佐久間象山先生は、西洋鞍を置いた馬に乗つてゐた爲に殺されたが、私は今日西洋鞍の馬に乗つて来たが殺されなかつたといふお話でした。そんな話を一時間半も長く話したのです。

四日の朝八時すぎに、上九一色の校長さん渡邊勸助先生と、下九一色の米山先生、飯島先生、土橋力さんたちと一緒に阿難山の險を越えて、精進湖へ出ました。米山先生はリユークサツクに梨を一杯入れ

てゐます。土橋さんは寫真機をもつてゐます。私は

馬に乗つてゐます。

馬の足は四つだが、二本足の先生たちの方が餘程早い。

阿難の山頂に登つた時、富士山がすぐ眼の前に現はれました。前の日の午後初雪が、降つたのださうでうツすらと白いペールを被てゐます。

脚下には精進の村があり、精進湖の青い水が美しく光つてゐます。何千年前に植ゑられたやうな大きな大きな杉の木が二本見えます。渡邊さんの説明によると、幹の周囲が三丈四尺あつて、一千年以上の老樹だそうです。

山を降りると、青年團の人たちが、ボートを湖水に泛べてくれました。で、湖水を一直線に横断して精進ホテルに着きました。

精進ホテルといふのは、今から三十年前に、イギリス、ロンドン生れのエル・シチュワアド・ソロモンといふ人が、富士の裾野を見物に来て、この絶景の

地にホテルを建てないといふのは、間違ひだと云つて獨力で建てたものです。

このソロモンといふ人は、後に名を星野芳春と改めて日本人になりました。

ソロモンの星野さんは、こんな山の中にホテルを建てましたが、日本人は一人も泊りに来ません。そこで横濱や神戸の英字新聞へ廣告しますと、外國人が富士山の景色を見るために、ぼつり／＼と駿河の

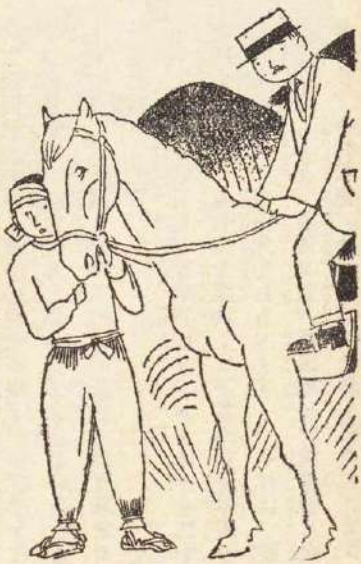


方から甲府の方から大月の方から尋ねて来ました。

来てみた外國人は、この山と水との美しさに感心し呆れ驚いて、段々お友達を誘ひ合すやうになりました。さうしてゐるうちに、遠く支那あたりにゐる西洋人が遊びに来るやうにまでなりました。

ソロモンの星野さんは、イギリスで發行する新聞や雑誌へ盛んに廣告しましたので、精進ホテルと富士山の名は、イギリス人の誰でも知るやうになりました。

ボンチングといふ人が日本へ来て、この精進ホテルに泊つて、精進湖の景色がすつかり氣に入つてしまつたので、Lodges Landといふ書物を著して精進湖附近の景色を詳しく紹介しました。で、英皇太子殿下が、日本へお出でになつた時、先づ精進湖を御覽になりたいと仰しやつたので、宮内省では、すつかり準備してお迎へしましたが、折悪しく暴風雨の爲めに御豫定を變更なさいまして、たうとう折角



の貴賓をこの山と水との歡樂郷へお迎へできなかつたのでした。

そこで大正十一年の秋、攝政宮殿下は、始めてこの外國まで知られてゐる精進ホテルへお出でになられたのでした。

「攝政の宮殿下が、こゝへお出でになられた時は、この棧橋へボートをお着けになつたのです。」
渡邊先生は棧橋の上に立つて申しました。そこは

水面から三丈ばかりも上の方です。

「四年前には、こんな所まで水が漲つてゐたんですか。」と私は驚いてたづねました。

「六七年前までは、あの邊まで水があつたのです。」一人の青年が、其の棧橋から一丈ばかり上の方を指さしました。見ると其所の岩には、舟を繋ぐために打込んだ鐵の鑿があります。

「どうして、こんなに水が減つたんでせうか。」

私は不思議さうに水面を見ながら言ひました。

「それは、この精進湖の次に、西湖といふのがあつて、東京電燈會社が水力電氣を起す爲めに、其の西湖から水を取つたのが原因で、こんなに減水したのです。」と他の青年が云ひました。

「水力電機も必要だが、こんな風景を害するやうなことはしないがい、ネ。」と他の人が腹立たしさうに言ひました。

「歡樂郷を書いたボンチングといふ人が、前年のこの

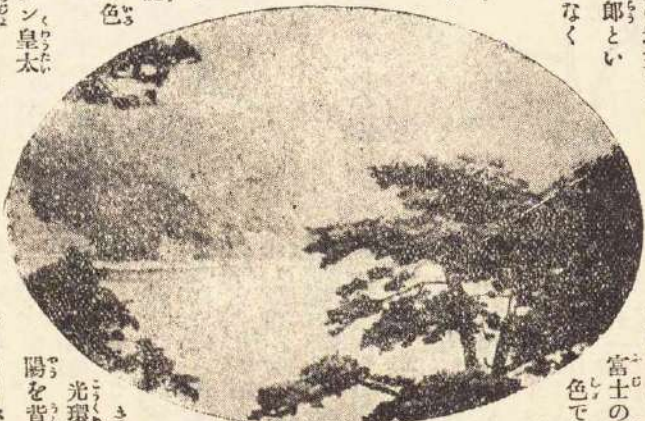
も徳川家康の家臣で、何れも一國の城主でもあつたらしい名前である。岩三郎とい

ふやうな平凡な名前の私は、何となく肩身が狭いと思ひました。

パノラマ臺は流拔四千三百七十尺の高地で、正に天下の絶景です。

西北には八ヶ岳、地藏嶽、奥千丈、赤石、白根の諸山が雲表に聳えてゐます。東南には富士山が屹然として聳えてゐます。下を臨むと、本栖湖、精進湖、西湖、川口湖が美しく緑の中に光つてゐます。ことに本栖湖の水は龍ヶ崎の金山を縦に映して、紺碧の色が物凄く美しく見えます。

私たちは攝政宮殿下、スキーデン皇太子殿下のために設けられた御野立所のベンチ



湖水を見て、これは大變だ、精進湖は日本の精進湖でない。世界の精進湖だ。このまゝにしては置けないと云つて、大變心配してゐたさうです。西洋人はこの減水を大問題にしてゐるが、肝心の日本人は一向平氣なんですよ。」

誰やらが淋しさうに笑ひました。

四

二週間前にスキーデンの皇太子殿下が御食事をなすつた食堂で、私たちも上品ぶつて食事をいたしました。そして、青年團の人たちに案内されてパノラマ臺に登りました。

パノラマ臺は烏帽子嶽の頂上で、ホテルから二十三町あります。私たちを案内して下すつた青年團の人たちの名前を渡邊先生にきゝますと、それは、渡邊孝、渡邊幸男、渡邊藤重、渡邊順一、渡邊智、内藤貞良、小林松恵、小林兼吉だと申しました。どう

に腰をかけて呆れながら景色を眺めました。

富士の裾野の樹海は見れば見る程いゝ景色でした。

渡邊先生は、そこで濃霧の話、ハロの光環の話をしてくれました。

霧の深い朝、學校の生徒を乗せたボートが精進湖の北の濱を出て三時間ばかり漕いでやつと、對岸に着いたと思つて、岸の上つてみると、朝、舟を出した元の岸であつたといふ話、薄絹のやうな卷層雲が太陽の表面を包んで、

まんまるい虹のやうなハローといふ光環を見て驚いた話、霧のある日、太陽を背後にしてこゝに立つてゐると、グローリースといふ小さい光環が自分の頭の上に

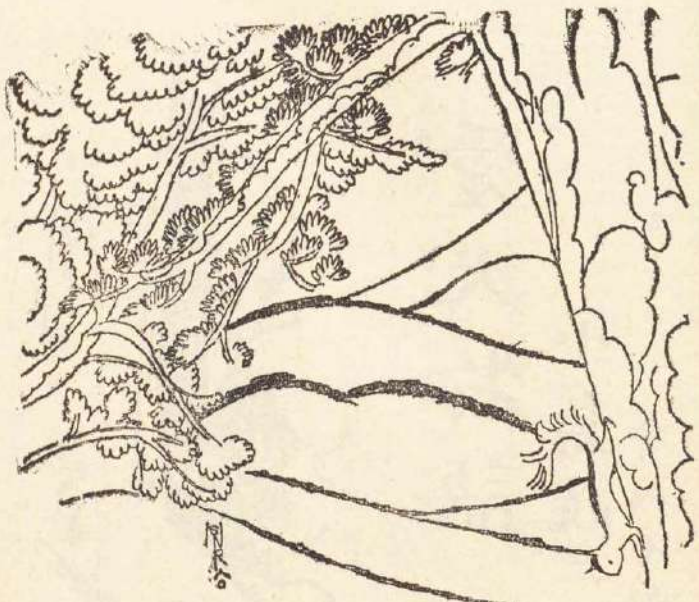
出て、お寺の本堂にある阿彌陀如来様のやうに見えてびつくりした話、それからプロッケンの妖怪といつて、此のバノラマ臺が晴れてゐて、下の本栖湖精進湖に霧の深い時、こゝに立つてゐると、富士山の頂上とも思はれる、遙か向ふの雲の中に、途法もな、い大きな自分の姿が現はれる話など、面白い話が、果しなくつまりました。

五

四日の朝、早く起きて窓掛を引くと、富士山の遙



か下の方から太陽が浮び出るところであつた。あまりの美しさに見とれてゐると、可愛い木鼠が長い尻尾を捲いて庭の松の枝で、き、きと鳴きながら二つも三つも戯れてゐる。何といふ幸福な日であらう。午前中に、小學校で子供さんたちと、青年團の人たちに二回の講演をして、午後は學校の伊藤今朝松先生や、青年團の人たちと一緒に、富士山麓の大室山に風穴を見に行きました。此の風穴は昔富士山の火噴火の際、流れ出た熔岩の中に出た洞穴です。洞穴といつても長さ三町にわたる大きなもので、其中には嘗て蠶卵紙を貯藏した大きな家が三軒あります。一番奥には僅かの滴が積り積つて出来上つた水の柱が五六本並んでゐます。玉と云はるか水晶と云はうか、形容すべき言葉のない美しい水柱です。それだけになるには何十年かゝつたか知れません。ところが一本の柱がめちや／＼に碎けて倒れてゐます。どうしたのだらうかと思つて、さいてみますと



ついで二週間前に、東京から二人の大學生が来て、ステッキで其の水柱を打ちくだいて、其の一つを穴の外へ擔ぎ出して寫真にとつたのだといふことでした。
「實に馬鹿な奴だ。僕がそれを見つけたのであつたら、殿りつけてやるのだつた。」と云つて一人の青年は憤慨しました。
「こんな神聖な所へ来て、そんな不心得なことをして平氣でゐるやうな青年が、日本の大學生かと思へば、なさげなくなる！」と伊藤先生は悲しさに申しました。私も泣きたいやうな氣持になりました。靴の下につけたガソリンを踏しめながら、風穴を出ますと、地上の風が蒸されたやうになま温かでした。
私たちは、とつぷりと日の暮れた頃ホテルに歸りました。

(をばり)



愛犬物語

小島政二郎
寺内セ郎画

見れば、ソーントン等の拵へた、松の枝でしつらへた假小屋の跡に、イーハットと呼ぶ食人種の一團が、頭の飾毛が風に靡かせながら、輪になつて喜びの踊を踊つてゐました。

その真最中に、突然物凄いやり聲、襲つて來たので、はつとする間もなく、彼等は會つて見たことのない一動物が、自分達に向つて突進して來るのを見ました。

それはバツクでした。バツクは、生きた旋風のやうな勢で、群る食人種の中へ躍り込みました。

真先に立つてゐたのは、彼等の會長でした。「うをウ。と、躍り上つたかと思ふと、喉笛に喰ひ附いて、存分に食ひ裂きました。そこから、鮮赤な血が泉のやうに迸り出たかと思ふと、會長もがきながらバツタリ、倒れました。その時には、バツク

はもう二人
目の喉元を噛
み裂いてゐまし
た。



いつかバツクは食人種の真中に飛び込んで、或は食ひ付き、或は引き裂き、或は噛み殺し、敵の射まける矢などにはピクともせず、縦横無盡に荒れ廻りました、實際、彼の動きの速いことと云つたら、正に神變不思議と云ふより外はありませんでした。その上恐れて敵はかたまつた爲め、バツクを狙つて射出矢に、却つて同志打ちをする有様でした。中には、「エイッ」と繰り出した槍に、バツクを狙つた筈なのが、思ひも寄らぬ仲間の胸元をグサと突き貫いて、穂尖が背中に抜けた例もありました。

「悪魔だ。」

一人がさう叫ぶと、敵は一人残らず、ハツと劫えて、我れ先に森の中へ逃げ散つて行きました。全くバツクは悪魔でした。逃げるあとを追つて、猶も敵の幾人かを森の中で引きずり倒して、ガブツと、一噛みで噛み殺す早業は、目にも止まらぬ位でした。

食人種にとつては、さん／＼な敗北でした。四方八方に逃げ散つた彼等は、それから一週間の後に、やつと、一人歸り、二人歸り、遠い／＼平野の果に再び相集まつて、損害を數へたり、恐ろしさに戦さ合つたりしました。

バツクの方は、あとを追ふのにも飽きて、やがて素の場所へ歸つて來ました。見ると、ビートが毛布にくるまつたまま死んでゐました。彼は、食人種に襲はれるが否や、寢床から飛び起さる暇もなく、毒矢に斃れたものらしく見受けられました。ソーンと

忘れることが出來ました。いや、同時に、大きな誇を——曾つて経験したことのない程大きな誇を、感じました。と云ふのは、あの日當りのいゝサンタクララの大きな屋敷から、うま／＼と囁かれて連れ出されて、諸君は私が第一回に語つたことをまだ覚えてゐますか、あの赤シャツを着た、棍棒を持つた犬馴しに出逢つて以來、どんなことをしても叶はないと思つてゐた人間——その人間に、今日と云ふ今日バツクは生れて初めて勝つたのでした。それ程無敵と思つてゐた人間を、——何十人と云ふ人間を、自分一人で殺したのでした。バツクは不思議さうに、算を亂してゐる屍體を嗅いで見ました。あんまり呆氣なく殺すことが出來たので、今まで自分があんなに恐れてゐたのが嘘のやうな氣がしました。實際、人間を殺すよりも、仲間のハスキー犬を殺す方がどんなに骨が折れるでせう。弓矢か、槍か、棍棒かを手にしてゐる時のほかは、今より後、決して人間を

ンは必死に敵に立ち向つたらしく、その跡がありありと地上に残つてゐました。バツクはそれを嗅ぎ當てる時、鼻を低く地に附けて辿り辿り、とう／＼或深い池の縁に出来ました。そこには、頭と前足を水に入れたまま、最後まで主人に忠義を盡した犬のスキートが冷たくなつてゐました。池の水はドロ／＼に濁つて、底に横はつてゐるソーントンの體を全く隠してゐました。バツクは、足の届くまで、水の中へ主人の跡を附けて行き、悲しげな鼻聲を頼はして啼き悲しみました。

バツクはさうして、三日三晩池のほとりに踞つてゐた後、落着かぬ心持でキャンブのあたりをうろつき廻りました。しかし、彼は「死」と云ふことを知つてゐました。従つて、ジョン、ソーントンの死んだことを知つてゐました。彼はその爲めに、激しい寂しさを感じました。しかし、時々、イーハットの死骸を見附け出す度に、バツクは暫くその寂しさを

恐れるには當らない、バツクはさう胸のうちで考へました。

夜が來ました。満月が、樹々の上を越えて大空高くのぼつた時、その死のやうな冷たい光に、愛するソーントンの沈んだ池のほとりに蹲つたまま、悲しみに顫を垂れてゐるバツクの姿が黒く寂しく照らし出されました。

二十四

真夜中近く、バツクは、ふと食人種とは違つた、またほかの新しい生き物が、森の中に近づくのを感じました。咄嗟に、彼は立ち上ると、耳を澄しつと鼻を地に附けて嗅ぎました。

その時、遙かの彼方から、微かな高ツ調子の啼き聲が、静かな月光を頼はせて響いて來ました。すると、それに合はせて、多くの同じやうな聲が、高い空に反響して悲しげに長く尾を引くのでした。



「ああ、あの聲だ。」

バックがソーントンの眠るキャンプからそつと抜け出して、森の中を憶れ歩いて求めたあの懐しい「先祖の聲」でした。彼は思はず、廣場の真中まで歩み出て、一心に閉耳を立てずにはゐられませんでした。聲はだん／＼近く、だん／＼高くなつて來ました。彼はもう、ちつとしてはゐられなくなりました。今はもう、あの聲の誘惑からバックを引き戻すソーントンもゐませんでした。彼は蒼い月光を滿身に石像のやうに浴びながら、狼の群の近づくのを待つてゐました。

しかし狼の方では恐れをなして近寄つて來ませんでした。一匹のバックと、無數の狼とが、大地にあり／＼と影を引きながら、睨み合つたまま動きませんでした。

バックの方では親しみを持つてゐるのに、狼の方では殺氣を帯びてゐるのです。無數の目が、煙々

と輝き出しました。と、一匹、大膽にも、つと群を離れてバックに躍りかかりました。バックは、稻妻のやうな早さで、敵の喉を噛み破つたかと思ふと、ヒラリとまた素の姿勢に返つて、身じろぎもしずに立ちまだけりました。うしろ三尺の近くには、傷附いた狼が、四足を頓はして跪き苦しんでゐます。それを見た三四匹の狼が、三方から、バックを目がけて噛み附いて來ました。牙の相打つ音が冷たく響いたかと思ふと、見る間に、彼等は喉や肩に手傷を負つて、血を浴びて引き下りました。

さあ、かうなると、もう全群が黙つてゐません。

狼全部が、一度にバックを目がけて押し寄せました。しかし、彼はビクともしずに、うしろ足でクルリ／＼と身を躲しながら、牙に當るを幸ひ噛み附き噛み裂き、今ここにゐたかと思ふと、もうあすこへ行つてゐる早業に、しじゆう敵を目の前に廻し廻し少しも隙を與へませんでした。

しかし、敵をうしろへ廻すまいと、それにはかり
氣をとられてゐた爲めに、バツクは次第／＼に、池
の傍から谷間の水溜れの小川の方へ方へと追ひ詰め
られて行きました。と、幸ひ、そこに、ソーントン
達が砂金を掘りながら築き上げた高い砂利の土手が
ありました。バツクは、それと見るが早いか、素早
く、かう折れ曲つた角のところへピツタリ背中を附
けて、『さあ来い。』と見構へました。ここに陣取つ
たが最後、もう右も左も、うしろも、敵に狙はれる
恐れなく、安じて前の敵にばかり立ち向ふことが出
來ました。

半時間ばかりの後には、狼の群はたつた一匹のバ
ツクを、持て餘して退却しました。彼等はダラリと
舌を出して、白い牙に月の光を物凄く宿してゐまし
た。或者は、腹這ひになつて、首を立て、耳を翫て
てゐました。或者は、幾匹か肩を並べてバツクを見
張つてゐました。また或者は、ビチャ／＼音を立て

た。バツクもそれに倣つて、腰を卸して吠えました。
それが濟むと、狼の群は、土手の角から歩み出たバ
ツクを、取り巻いて、睦じげに鼻を嗅ぎ合はせまし
た。

間もなく、首領立つ二三匹の狼が、『狼の唄』を
叫びながら、森の中へ駆け込みました。すると、全
群が合唱の聲を揃へて、そのあとを追ひました。バ
ツクも、『山の兄弟』と肩を並べながら、暗い森の
中へ姿を消してしまひました。

二十五

バツクの話は、もう、ここで止めてもいゝでせ
う。唯一つ、食人種の間では、バツクにひどい目に
逢はされて以來、決して足踏みをせぬ平野が一つ出
來ました。

『どうして、悪魔はあすこに住みかに選んだのでせ
う。』

て池の水を飲んでゐました。
バツクも、十間の向うに狼の散兵線を眺めながら
静かに息を入れてゐました。すると、その時、瘦せ
た灰色の狼が一匹、用心しながら親しみに顔に進み出
ました。近附くまに、バツクはすぐ思ひ出しまし
た。それは、ついこの間、一日一夜一緒に森の中を
馳け巡つたあの『山の兄弟』でした。相手は、軽く
喉を鳴らしてゐました。バツクも同じやうに、低く
呻きました。やがて、二人はつと鼻を突き合はせま
した。

見ると、歳を取つた、傷だらけの狼がもう一匹、
近附いて來ました。バツクは唸りの前觸として唇を
剥き掛けましたが、やがて相手に敵意のないことを
知ると、また静かに鼻を嗅ぎ合ひました。すると、
年寄の狼は、そこに腰を卸して、満月に鼻を向けて
狼流の長吠えを張り上げました。それに應じて、
狼全體が同じやうに、腰を卸して長啼きをしまし

食人種の女達は、焚火に當りながら、かう云つて
よく嘆息しました。

ところが、毎年夏になると、その谷間の平野に、
食人種共の知らぬ一人の訪問者がありました。それ
は、毛色の美しい大きな狼で、いつもたつた一人山
の方から出て來ては、樹立ちの中の例の廣場まで降
りて來るのです。

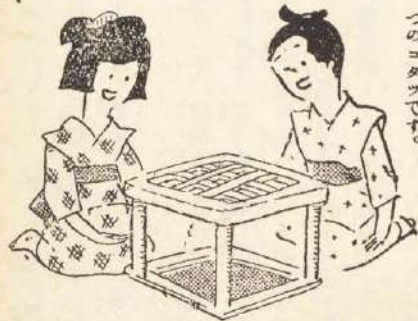
そこには、朽ちた鹿皮の袋から、砂金が流れ出て
土に埋まつた上に、長い草が弱々しく生えてゐまし
た。狼は、池の汀に腰を卸したまま暫く考へ込んで
から、一度悲しげに長啼をしたあとで、またどこへ
ともなく立ち去るのです。

しかし、この時を除いては、彼は決して一人では
ありませんでした。長い冬の夜が來て、狼が低い谷
間に獲物を探し求める時など、彼はいつも全群の先
頭に立つて、氷のやうな月光の下に、大きな體を躍
らせながら走つてゐるのです。(をばり)

2ども屋

河盛久夫

昔、まだ、コタツのない村がありました。或時、村の金持が旅に出て、そのコタツを買って戻りました。村にたつた一つのコタツです。



「丸持さんとは、珍らしい道具がある。見なれない、の、一體、何だらう」と

「丸持さんとは、珍らしい道具がある。見なれない、の、一體、何だらう」と

「丸持さんとは、珍らしい道具がある。見なれない、の、一體、何だらう」と



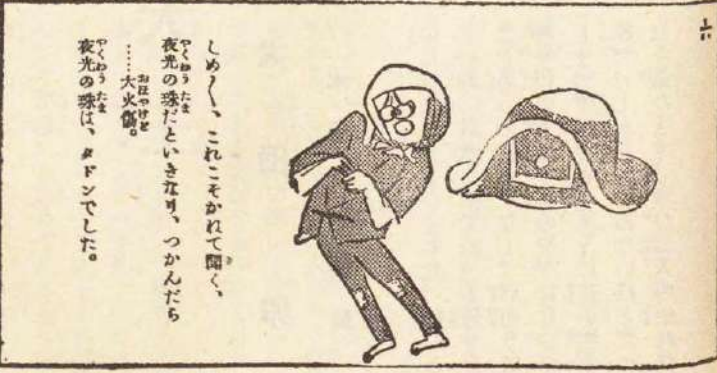
「どりや、一つおれが行つて見てこよう」三平が駆け出しました。



丁度、其時コタツに精霊をかけたところでした。三平は「チエツおれが見にきたものだから、蒲團でかくしてしまつた」と氣を悪くしました。



そして、「あゝとして胡夜具で包んであるところを見ると、よほど大した物にちがひない」とし雷をつけて、或日コツツリ、恐び込んで中をのぞくと、眞赤な玉がひかりを放つてゐます。



しめし、これこそかれて聞く、夜光の珠だといきなり、つかんだら夜光の珠は、タドンでした。

(牛久沼傳説)

河童大王

犬田 卯

水島爾保布畫



ある時——それはすつと昔のこ
とですが、牛久沼の岸のある村に
正太、啓二といふ二人の少年があ
りました。正太はなかくの力持
で且つ勇氣のある少年でした。啓

二は、力は、それほどないが、こ
れはなかく智慧のある少年でし
た。

二人は大の仲よしで、遊ぶ時は
いつも二人で遊んでゐました。あ
る時のこと、牛久沼に大きな
洪水が来て、田も畑もみんなその

中に埋つてしまひました。何しろ
その時の洪水と来ては一通りや
二た通りの洪水でなく、沼向うは
利根川の方まで海のやうになつて
しまつて、ところ／＼に高い樹の
梢だけしか見えてゐないほどだつ
たと云ひます。幸ひ二人の生れた

村は、沼の北岸の高い丘の上なも
のでしたから助つた様なもの、
でも、もう少し増水すると、この
村まで押し流されてしまふところ
でした。

村のものは大人も子供も誰一人、
岸へ出るものもありませんでし
た。みな、おつかなびつくりで、
魔物でも洪水に交つてやつて來や
しないかと思つてふるへてゐたの
です。

ところが正太は少しも驚いたり
怖がつたり致しません。啓二もま
た別して怖がりませんでした。あ
る日のこと、正太と啓二は二人切
りで、この見事な洪水の光景を眺
めて喜んでゐました。

その時、一匹の河童がひよつこ

二

「さうかな。然し面白さうだな。」
二人の少年は輝やかしい眼を沖
の方に投げて丘の上に立つてゐま
した。

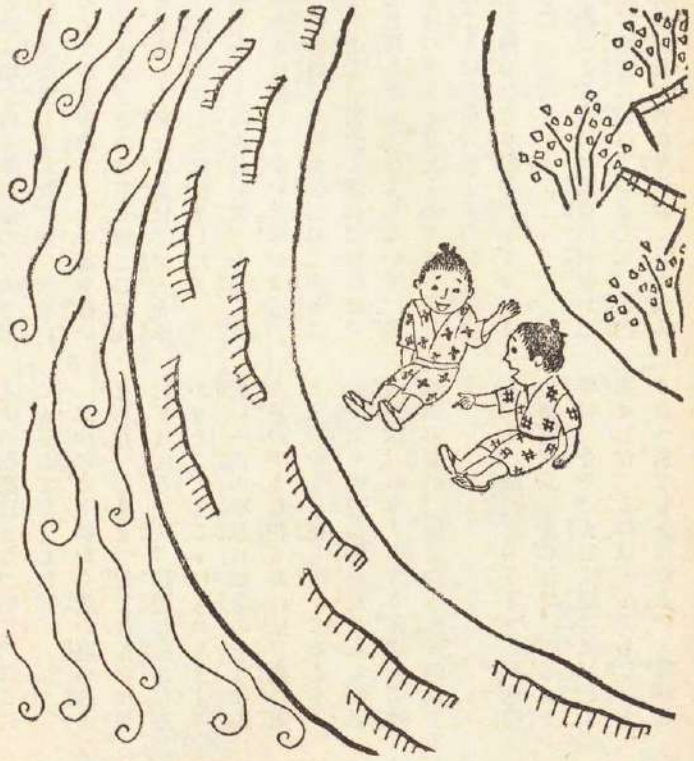
ださうだ。見ろ、あれ、大きな波
ぢやないか。あんな波、俺らはじ
めてだ。一つ、泳ぎでも泳いで見
たいな。向うに見えるあの木のて
つべんへ行つて見たら、さぞ面白
いこつたらうな？」かう正太は啓
二へ話しかけました。すると啓二
は要心深げに答へます。

「あ、面白いだらうな、でも君、
何時もと違つて水が急に流れてあ
るんだから、泳ぐのは危いよ。」

り二人のうしろへ姿を現しまし
た。
この河童の奴、さきから水の中
で二人の少年の立話を聞いてゐた
のです。
「うむ、これは恰好な奴等がゐた
ぞ！」

かう、河童は獨語しました。と
いふのは、この河童の奴、河童大
王から、お旨しさうな人間の子供
を二三人引込んで來いと命令され
て來て、その邊をうろついてゐた
ものなんです。

然しどうしたものか、今度の大
洪水に限つて人間の子供があんま
り姿を見せません。それもその筈
みんな親達から止められてゐて沼
岸へ出て來ないのです。河童大王



「今日(けふ)は沼(ぬま)の中に素敵(すてき)に面白い(おもしろい)ところがあるんだが、どうだ行(い)つて見(み)ないか、俺(おれ)が一つ、案内(あんない)して連れて行(い)つて上げるよ。なあに、沼(ぬま)の水(みづ)なんかいくら流(なが)れたつて俺(おれ)に付(つ)いて来(こ)さへすりや大丈夫(だいじゆう)だよ。」

「あ、お前(まへ)は河童(かぢう)だな。なあに、お前(まへ)に連れて行(い)つて貰(もら)はなくてたつていゝんだよ。」

「お前(まへ)ら河童大王(かぢうたいおう)の御殿(ごてん)見たことあるか。そりや綺麗(きれい)だぜ、俺(おれ)が一つ、案内(あんない)するから見物(けんぶつ)に行(い)かないか？」

「なあ、この村(むら)にも何處(どこ)にも、ま

「河童大王(かぢうたいおう)の御殿(ごてん)見たものは一人もないんだ。お前(まへ)ら見物(けんぶつ)して来て話(わ)して聞(き)かせろよ。それこそ偉(偉)い人間(にんげん)になるぜ。大王(たいおう)は今日(けふ)うんと御馳走(ごちそう)してくれるよ。何(なん)しろこんな大きな洪水(こうすい)はこの中(なか)珍(めづ)らしいんだからな。河童(かぢう)の國(くに)ちや、どんちやん／＼お祝(いわ)ひしてるんだ。なあ、早くそのお祝(いわ)ひ見(み)に行(い)かうよ！」

「かうなると、もと／＼珍(めづ)らしい物(もの)好き(すき)の二人(ふたり)の少年(せうねん)ですから大分(だいぶ)心(こころ)が動き出(で)しました。本當(ほんとう)に、河童大王(かぢうたいおう)の御殿(ごてん)なんてこんな時(とき)でもなければ見(み)たくたつて見(み)られやしない。それに御殿(ごてん)では今(いま)お祝(いわ)ひをやつてゐる。綺麗(きれい)だらうな。御馳走(ごちそう)走(は)もしてくれる。どんなお旨(うまい)いものが並(なら)んでゐるだらうな……」

「正太(しょうた)と啓二(けいじ)は眼(め)と眼(め)を見交(ま)ししました。と、河童(かぢう)の奴(やつ)、こゝぞとばかりまた附加(つづ)かへます。

「よう、早く行(い)つて見(み)ようよ。俺(おれ)んとこの大王(たいおう)は子供(こども)が好き(すき)なんだから、お前(まへ)ら行(い)くと大喜(おどろ)びだよ。歸(かへ)りにやきつといゝ寶物(たからもの)をお土産(みやげ)にくれるぜ！」

二人(ふたり)の少年(せうねん)はたうとう決心(けっしん)しました。大膽(だいだん)にも河童(かぢう)の御殿(ごてん)へ行くことにきめたのです。だから、河童(かぢう)の奴(やつ)、これは古め／＼とばかり、喜んで二人(ふたり)を兩脇(りょうわき)に抱(かか)え、満々(まんまん)たる洪水(こうすい)の中(なか)へざんぶとばかり飛込(とびこ)みしました。

三

やがて一時間(ひとしじ)も水(みづ)の中(なか)を泳(およ)いだ

と思ふ頃、行く手に當つて大きな門が見え出しました。鯉や鮒やいろ／＼の魚が悠々とその邊を泳いでゐます。その時正太啓二の二人を案内して来た河童は、二人を水の中へ下ろして云ひました。

「さあ、漸く着いた。お前から俺のあとに隨いて歩いて来いよ。」

不思議にも正太啓二の二少年は水の中で、何處も濡れなければ、また浮んでしまひもしないで、眼もはつきりと見えるのです。そこで二人は河童のあとについて藻の花で飾られた立派な門をくゞりま

した。門のところには門番の河童が二匹、両方に控へてゐました。案内役の河童が何か分らぬことを云ふ

とその門番はうなづいて、にこにこ笑つてゐました。

二少年はそれから廣い庭へ入りました。いままで村でなんか見たこともない花、綺麗な樹木なんかぞそこにもこゝにもあります。廣い一面の草原には金のやうに光る星のやうな花もあれば、紫に光る玉のやうな花も咲いてゐます。しかしその邊に姿を見せるものと云へば、ぬら／＼する皮膚の、薄氣味の悪い、眼ばかり光る河童です。

「なあ、綺麗だらう！」と案内役の河童は云ひましたが、然し二少年は、今や、少しく變な氣がして來ました。これはとんでもないところへ來てしまつたといふ氣がして來ました。

「お祭りは何處でやつてゐるの。」と正太は訊ねました。

「お祭りか、今に見せてやるよ。それよりや先づ大王のところへ行つてお前らの來たことを知らせなくちやならないんだ。」

庭を横切ると、やがて御殿だといふ。正太と啓二は龍宮のやうなところだと考へてゐたのに、そんなものは何處にも見えません。御殿だといふのは、大きな泥の穴です。その奥の方に、何か真黒い大入道のやうな奴が、眼をきら／＼さして此方を見てゐます。

「さア大王の前だ。首を下げろ！」案内役の河童に云はれて二少年はひよつと首は下げたが、おかし

いなア……と思つてすぐに眼を上げて大入道を見つめました。するとそれがだん／＼はつきりして來ます。大入道も大入道、ひどい大入道だ！真黒な泥のやうな顔の真中に大きなびか／＼する眼が二つ。それに獅子鼻。四斗樽を打抜いたやうな尖り口！いやはや！二人の少年、今更のやうにびつくりして逃げ出さうとしたのです。

ところがどつこい！もう駄目だ。二人はまんまと河童の計略に引



かゝつたのです。逃げ出さうとすると、その大入道が、ぬつと熊手のやうな、然もぬら／＼する大きな手を突き出して二人を一しよに掴んでしまひました。

「はつはつ／＼はア……」

そしてとてつもない大きな口を開いて、大聲に笑ひ出しました。二少年、勿論、びつくりしてしまつて青くなつたが、尙も逃げようとしてあせりました。が、駄目でした。大王の曰く、

「うむ……これは旨さうな人間の子供だ。いかにも旨さうに肉がこつて／＼と附いてゐる。よし、早速丸呑みにしてやらう！」
かう云つて河童大王、あわやと思ふ間に、二少年をべろりと生の

まゝ丸呑みにしてしまひました。「うむ……旨い／＼。これは旨い。ぐうつ。ぐうつ……ううい、あゝあ！」

さア、大變なことになつてしまひました。河童大王から御馳走になつたり、お土産を買つたりしようと思つて遙々やつて來たのに、反對にべろりと一と呑みに吞まれてしまひました。

四

正太と啓二の二少年は、河童大王の咽喉を通つて腹の中へ入つて行きました。そこで二人はお互ひに顔を見合せたのです。正太はいつもの剛膽にも似合はず青い顔をしてゐます。が、啓二は少しも驚

いてはゐませんでした。「大丈夫だよ、正太」と彼は云ふのでした。「俺、ひよつとするとこんなことぢやないかと思つてゐたんだ。そこで一つ、此處で遊んでやらう。面白いことがあるぞ。」これはしたり！ 正太には何のことか分りません。

「それどこぢやないよ。君、ぐづぐづしてゐると溶けつちもうよ。腐つちもうよ……」

「なあに大丈夫だ。なあ、あの河童の奴、いゝ加減なこと云つて俺等ことだましやがつたが、かうなりや此方のもんだ。いゝか正太、お前力があつたから、そら、そこにお前下つてゐる筋をぐつと引張つて見る。さうすると、腹の力



が弱つて俺達は大丈夫三時間ほどろけないよ。さア、引張れ！」
正太は不思議でたまりませんで

した。
「そんなことしていゝのかい、お前。」

「いゝから引張れ！ 早く。」
啓二が云ふので、正太はその氣になり、そのふら下つてゐる筋をぐえつと力任せに引張りました。すると啓二の云ふとほり、すうつと何んだか冷たくなつて來て、今まで熱苦しかつたのがせい／＼して來ました。

「どうだ、これで大丈夫だらう。正太見ろ、あすこに骨があらあ。ありや、俺等見たいに丸のみにされた人間の骨だせ……」
「薄氣味わるいこと云ふなや……」
「さうか、ぢや、な、あすこにおら下つてゐる筋を引張つて見ろ。」
「どれ、これか！」 正太はまたぐつと引張りました。すると河童大王、あゝ、あゝ……と大きな欠伸

を連發するのです。

正太もそこで元氣を恢復しました。

「こんどはお前、別の何かを教へろよ！」

「よし、あの筋を引張つて見ろ。大王が笑ひ出すから。」

さうかとはばかり正太が力を入れてそれを引張ると、大王の奴、げら／＼つ、げら／＼つ、げら、げらつ、げら／＼と笑ひ出しました。

「こんどは、な、これを引張つて見ろ、大王がくしやみするから。」

「よし！」正太がまた思ひ切り引張ると、大王、くしやん／＼、くしやん／＼、くしやん／＼と途方もない嘔をやり出しました。

「こんどはな、これだ。すると怒

り出すよ。」

よしとはばかり、また引張ると、さあ、大變、大王ぶん／＼噴つてあたり構はずなぐり廻つた。お蔭で、近くにゐた河童小河童共、四五十匹も叩きつぶされてしまひました。

「もういゝ、離せ。こんどはこれだ。すると泣き出すよ。」

引張ると、成るほど、大王、こんどは反對におうい／＼おい／＼とばかり、手放して泣き出しました。大きな涙がぼろ／＼とこぼれ落ちます。

「こんどはな、これだ。すると痒がるから。」

それを引張ると此度は大王、身體中がむづ痒くなつてがり／＼、

がり／＼、がり／＼と掻きはじめました。

正太はますます面白くなつてしまつて、

「啓二、こんどは歌でもやらせよう。河童の歌でも聞かう。」と云ひました。

「ちや、この筋を引張れ！」

啓二の指差す筋を引張ると、河童大王の奴、何やら分らない唄をぐう／＼うなり出しました。うう、あゝあゝ……ぐう／＼……大變な陽氣です！

「これは面白い／＼。もつと面白いことはないかな、啓二！」

「あるとも／＼、これを引張つて見ろ！」

「するとどうなるんだ？」

「まあ、どうでもいゝから引張つて見ろ！」

云はれた筋を正太がうんと引張つて見ると、これはしたり、ふう！ふう！ふうつ……と、とて

つもないおならが出ました。いや臭いのなんのつて、河童大王の屁と来ちや堪らない。

「あゝ、駄目だ！駄目だ！何とかしておくれ、啓二、助けてくれ！」

さすがの正太もこれには弱つてしまつて救ひを求めました。

「よし、その向うの筋を引張れ！」で、教はつた筋を引張ると、臭味が何處かへ行つてしまひました。正太はますます面白くなつて堪りません。

「もつと何かないか？」

が、もう残念ながら別に何んにもないので。愚圖々々してゐると三時間が経つてしまつて、とろけ出す。かう啓二は云つて今度は逃げ出すことにしました。そして一本の筋を示して、正太に引かせたのです。すると河童大王は、ぐう、ぐう／＼と雷のやうな轟聲を上げて眠つてしまひました。

大王が眠ると、御殿にゐた河童共は、さん／＼狂態を見せられた揚句ですから、これ幸ひと何處へか遊びに行つてしまつたり、自分

達もぐう／＼やりはじめたりしてしまひました。その間に正太と啓二は大王のお腹からも来た道を引返してそうつと這ひ出してしま

ひました。が、このまゝ逃げて行くのもつまらない。正太はそれこそ何か寶物でもないかと思つてあたりを見廻しました。

「なあ、啓二、家へ何か土産にするやうなものはないだらうか。」それを聞くと啓二は答へました

「何かあるもんか。河童なんて奴は、俺等こと引込んで食ふ位しか能のないもんだ。それが今度分つてしまつた。だから「河童の能なしやあい……」とでも書いて残して行かうよ。」

「さうか／＼、ちやさう書かう。」とんだ悪戯書きを残して、二人の少年は河童の御殿を抜け出し、無事に沼から上つて家へ歸つたと云ふことであります。(終)



童話

野口雨情選

(子供篇)

小犬(賞)

東京 岩本セツ子 (八才)

ちいいつと
くさをかいでる小犬
くさのにはひでも
するの

かすみ(賞)

朝鮮 河野 浩 (十歳)

夕方になつた
かすみ山を
かくした

アサガホ(賞)

石川 山本 好子 (七歳)

アカイノガ三ツ
シロイノガ二ツ
アライノガ五ツ
カキネニサイタ
アサガホノハナ
ツルヨモツトノビテ
ハナヨモツトサケヨ

月

千葉 中島 仲江 (尋四)

今夜はさんや様

月が大きいや

となりのをばさん

月おがんでる

私もひよつこり

おじぎした

日ぐれ

千葉 大野 春吉 (尋五)

日ぐれになつたよ

赤とんぼ

つばめはふるすへ
かへつてつた

四〇

日ぐれになつたよ

赤とんぼ

お前もお家へかへらんか

あまだれ

早岐 金森 重三 (十二歳)

あまだれさん

テレンコテンテン

あまだれさん

太鼓はたたくが

笛ふかぬ

テレンコテンテン

あまだれさん

お日より
千葉 大川 政雄 (尋六)

よいお日よりだ

めしの花へ

さいろいてふくが
そうつととまつた
なんだかけしの花は
うごいたようだ

なんてんの葉

埼玉原 虎松 (尋五)

くものすにかかつた
なんてんの葉
風に吹かれて
ゆらくと
ゆれてゐる

雨こんこ

朝鮮 河野 青雨 (十四歳)

雨こんこ

赤こんぼ

東京 久保田曉藏 (十四歳)

バラバラ
ふつてきた
お日さま
どこかへ
いつちやつた
山から山から
赤とんぼ
皆んなでそろつて
飛んで来た
真赤になつて
赤とんぼ
たくさんく
飛んで来た

カガミ

石井 竹 (尋三)

小犬



ワタシガ
カガミノ前デ

ワラツタラ

カガミノ方デモ

コチラムイテ

ニコニコワラツタラ

かげさん

埼玉原 萩原 みよ (尋三)

かげさん

どこまで

くるさなの

家の中へ

はいつたら

かげさんどつかへ

にげちやつた

かげさんほんとに
おもしろい

四一



人名のり捕卵

吉要海鳴

畫枝もと岡岩

「先生。今夜もお話を一つ願ひます。」

と、一人が言ひました。

「先生。是非とも一つ。」

と、又一人が言ひました。つゞいて三四人

がまたそのやうに言ひました。

「いや。僕もさうむやみに話は知りません。

毎晩やつては種も盡きてしまひますよ。」と若い

先生はわらひました。

それは山奥の村の小さい學校に附いた居間

なのでした。

圍爐裡には太い松の根ツ子が燻つてあまし

た。そのぐるりに若い先生と四五人の村の青

年とが手をあふつてゐました。

偏僻な村に行きますと、よくかういふ學校

があります。農事のあまり忙がしくない、そ

して成るべく夜長の時期をえらんで、いはゆる若者の夜學が始まります。

先生の居間に押かけたところだす。

「もう昔話は種が盡きましたから、それでは僕が前に居つた村のことでも話させようか。」

若い先生はやう／＼口を切りました。

「どんな話でもいゝからどうぞ。」

と、みんなが言ひました。

二

これからがその話です。――

今から五六年前のこと、私は亞米利加の隣村だといふ處に居りました。「亞米利加の隣村」といふのはその村の人達の洒落なんです、つまりは太平洋岸の漁村といふことです。二町と離れない海中に辨

天島といふ小島があつたり、磯の岩が黒かつたり、むめといふ白い海鳥が群をなして飛んだり、それは景色のいゝ村でした。そんな村で私はいまのやうに教員をして居りました。先生の數も此處のやうに、一人限りではありませぬ。五六人居りました。え、その村は此處からは殆ど百里も離れて居ります。

私は五年生と六年生の合併組を受持つて居りました。その六年生に一人跋な生徒がありました。名は芳村福松といひました。貧乏な漁師の家の子でした。福松くんは「びつこの福松」といつたり、「もろこしびつこ」といつたり、色々な綽名を持つてゐました。そしてよくみなに調弄してゐました。

不具者には大抵遠慮して綽名もつけなければ調弄ひもしないものです。この子の調弄はれるのは少し譯がありました。

福松くんは自身からよく吹聴しました。調弄はれるのはそのせみです。——おれは唯のびつこちやない。おれが腹の中にゐた時分に、おつかさんが玉蜀黍を慾ばつてあんまり多くちぎり、足元が見えないんで石にけつまづいてころんだんだ、そのせみでおれがこの通りびつこになつたんだ。だから、たうもろこしの崇りさへとれ、ば跛がすつかり治るんだ。と跛を大威張で吹聴しました。それで「もろこしびつこ」ともいはれ、ば調弄はれもする譯なんです。心なしに福松くんの頭の毛もなんだか玉蜀黍の房に似て見えました。つまり西洋人のやうに赤毛な譯なんです。

三

福松くんは生まれつき鳥の卵をとることが何より好きでした。だからまたそれがながくの名人でした。鳥の卵でも、雀の卵でも、鳩の卵でも、雲雀の

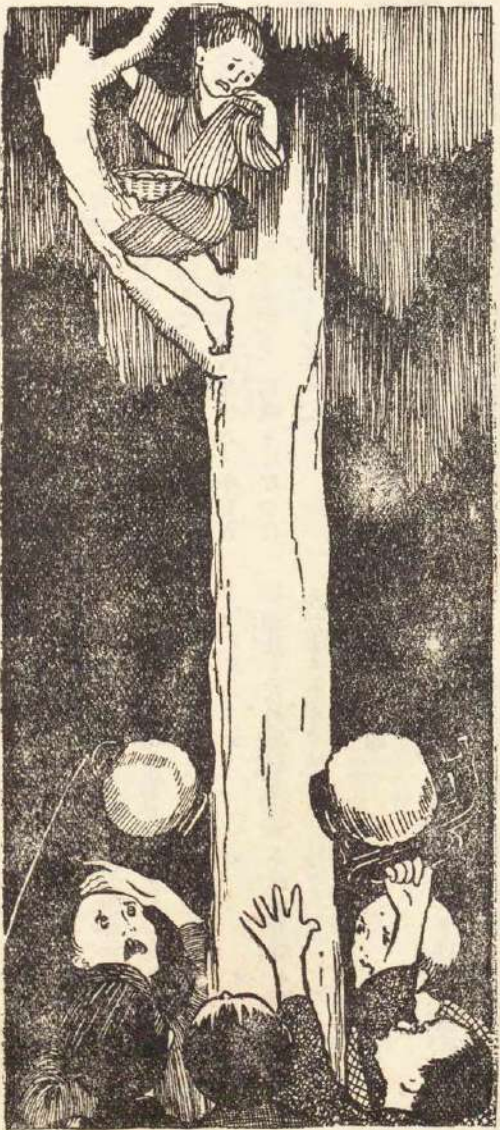
卵でも、福松くんには叶ひません。ごめの卵は勿論だが、時には鷹などの卵も山へ這入つて行つては取つて來ます。七八つの頃から、その跛足で高い木などによちのぼつては小鳥の卵をよく取つて來たものださうです。

福松くんの十歳ぐらゐの時の事です。或夏の夕方、八幡さまの境内の杉の木の上に子供は臆病者の役場の小使だつたさうです。薄暗がりだものだから、上も見上げないで、大急ぎで飛んで來て此の事を村の連中に知せて歩きました。それは事だといふので、駐在所の巡査をはじめ、村の誰彼の差別なく、その杉の木の下へ集つて來ました。その時はもう日はとつぷりと暮れてゐたさうです。提灯を向けてよく見ると、それは例の福松くんなのです。見ると、瘤のやうになつた短かい枝に馬乗りにな

り、その上の小さな孔に右手をつゝこんでしく〜と泣いてたさうです。今まで探してゐた福松くんの両親もそこに駆付けてゐました。

「おい。お前をさつきから探してたんだ。どうして

ひとりでおりに來ないんだ。いつもならこんなに世話焼かせたことが無いぢやがなあ。」
お父さんがかう言ひますと、
「父うちやん。おりられないんだ。雀の巢から手が抜けない……。」



死ぬやうな聲で、上から福松くんがかう答へました。

「それは大變だ。可哀さうに。」

といふことになつて、それから早速消防の梯子やら、高張りやらが其處にもつて來られました。

「もう少し辛抱しろ。それは痛かる辛かる。今ちきに手を抜けるやうにしてやるから、馬乗りになつた枝から尻を外すなよ。怪我をするから。」

そんなことを言つて下に居た村の人達が代る／＼福松くんを慰さめる聲をかけました。そして鑿と玄能をもつて、大工の八さんが梯子を上つて行きました。

高張に棒を足して、福松くんの傍にかざしました。八さんは「少しがまんしろよ。」と言ひながら、鑿と玄能で孔のぐるりをやうやく刮り取りました。大變な骨折でした。

出抜に八さんの大きな聲が下に響きました。

「馬鹿やろ！」

下の人達もその意外な聲にびつくりしました。

福松くんは、その手に雀の卵を三つばかり大事さうに握つてゐたのでした。つまりそれで手が抜けなかつたのでした。

福松くんの卵取りは、それから益々評判になつたんださうです。

四

福松くんはそのため調弄はれどほしに調弄はれませんでしたけれども、卵をとることだけは決して止めませんでした。だつて、福松くんの卵取りはもうその頃から道樂でも氣散じでも無かつたのです。貧しい家の暮しをこれで助けるやうになつて居たのでした。福松くんは、何んだかんだの卵を取つて來てはこれを生で賣つたり、茹で賣つたりしました。不漁



の時の肴にされたり、滋養物にされたり、福松くんの卵はなか／＼村に重寶がられました。

この外に、毎年福松くんの書入時がありました。書入時といふのは、極まつた儲けの這入る時の事です。

それは辨天鳥のごめの卵の口開きです。何萬と鳥に生み付けられた卵が、口開きの日から誰でも取れることになるのでした。

福松くんが、尋常を卒業した年の口開きの日でした。朝から天氣がよく、村の人達が一齊に船で島に漕付け、背負籠のやうなものに卵をめい／＼に拾つて居りました。

午前十時頃から急に天氣が變りましたので、誰も彼も周章で、船で漕ぎ歸りました。

後で氣がつくと福松くんだけ歸つて居りません。大騒ぎになりましたが、その日は大暴風雨になつて逆もどうすることも出來ず、翌日またも村中の人

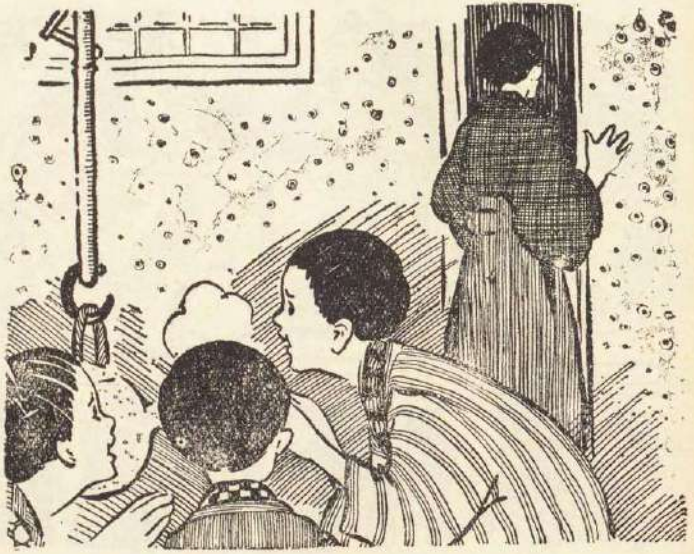
が行つて探したけれど、それきり福松くんの姿は影も形も見えなくなりました。

その時は、私がやはりまだその村で教員をして居た當時でした。その学校には、福松くんの取つた珍しい卵の標本も幾つかとつてある筈です。福松くんを思ふと、今でも妙に可哀さうな氣がします。

五

若い先生の話はこれで少時とだえました。聴いて居つた夜學生達も何だかあつけないやうな顔をしました。山の雪も大概消えてしまつた冬の終りの夜は更けました。

「御免なさい。御免なさい。」
戸の外に聞き馴れない若い男の聲がしました。



「どなたです。」と言ひながら先生は起つて、戸を開けました。

「私は……芳村福松です……。」

切れんに夜學生の耳にかう聞えました。

夜學生達は餘りの意外に顔を見合せて脅えてしまひました。それよりも一層脅えたのは先生らしく、「あらッ！」といふ驚きの聲さへ發しました。

でも、先生は「まあ、あがりたまへ」と本當の人間に對するやうに言葉をかけて居りましたが、やがてその若い客と先生とは、揃つて圍爐裡の端の席に就きました。

その芳村福松といふ客は二十歳位の、洋服を着た髪の赤い西洋人のやうな若い紳士でした。跛ではありませんでした。

事情はかうでした。
福松くんは、その大暴風雨の時、その島のところ

に避難したノールウェー國の商船に助けられて、その本國に連れて行かれたのです。そして語學も覚えさせられ、また店員にも世話させられたのださうです。お負けに、名醫にかけられて跛が完全に治つたといふのです。
なせ早く手紙をよこさなかつたといふ問ひにはハツキリと答へませんから判りません。
とにかく、徴兵も近くなつたし、両親に餘り心配をかけるのも悪いと思ひ、貯金も相當出來たから此度歸國したといふことです。
歸國して見ると、幸兩親は變りなかつたが、懐しい元の先生が、此の山奥に轉任したといふことを聞いて自宅に二晩寝たきりで、急に百里の處を遙々訪ねて來たといふのでした。
「噂をすれば影」といふ昔からある言葉が、あんなまりにふしぎに當つたので、みんながお互ひに驚いてしまひました。

(をほり)

御先祖の自慢話

立石美和

松政徳次郎畫



一、僕の御先祖の自慢話を聞かせませう。
御先祖と云つても、何百年だの、何千年だのといふ程、古い大昔の事ではないのです。僕等のお祖父さんのお父さんが、未だ若かつた時の事ですから、まあ百年程前の事だと思つて下さい。
その大おちいさんが、自慢で自慢で、年取つてからは、何度も繰り返して話したといふ話。

— おちいさんは、津輕藩でも、第一の使ひ手といふ評判の剣術の達人でした。ところが、お隣の南部藩に佐々木といふ、これも有名な使ひ手が居て、奥州第一の名人だらうといふ評判だつたさうです。
ものずきな人達は、津輕の福士（おちいさんの名）と、南部の佐々木と一度でい、から試合をさせて見たいものだ。それを末代までも残る様な、見事な立ち合に違ひない等と、よるとさわると、二人の事をうわさして居たといふ事です。

ある年、おちいさんが、殿様の用事で、江戸へ行く事になりました。所が、その途中で、不思議な人と道づれになった。といふのは、兼々、自分の對手として、うわさの引き合ひに出される、南部の佐々木先生。

「お前が佐々木か！」
「ほう、貴公が福士か！」
二人は、まるで、子供の時分からの友達の様な口

のき、方をして、忽ち大の仲よしになつて終ひました。

初め、ハツとして、何うなる事かと心配した双方の連れの者も、あまり二人が、あつさりして、仲よくなつて終つたので、少し張り合抜けがした位だつたさうです。

併し、兩人とも、心の奥底では、何んとかして、對手の力量が、何の位のものか知りたいものだ、互に油断なく注意しあつて居たのはいふまでもありません。

二

殿様の御用もすんで、氣楽な身體になつたので、ある日、おちいさんは、佐々木先生を訪ねて、二人で角力見物に出かけました。角力見物といつても、今の様に、國技館の様な立派な建物はありません。四方を薙で圍つた小屋掛けです。

入つて見ると、大變な大入で、もう坐る場所もなにもありません。仕方なしに、二人で、日物の後ろの方へ立つて、小さくなつて見て居ました。「小さくなつて」と、おちいさんはよく云つたさうですが、死の時分、随分年を取つて居ても、何うして、見上げる様な大男だつたといひますし、相手の佐々木先生も、おちいさんと並んで立つと、二寸も高く見えたさうですから、あんまり、小さくもなれなかつたに異いありません。それに、二人とも、装も振りもかまはない、色の眞黒な田舎士で、一目で分る様な、野暮くさい大たぶさに結つて居たさうですから、おしやれの江戸の人達は、あきれかへつて、じろく二人の方ばかり見て居ました。



この士達は、角力を見乍ら、さかんに、盃のやり取りをして、お酒を飲んで居ました。その中、仲間の一入が、ひよいと下を見て、雲つく様な大男の田舎士が、二人で、夢中になつて角力を見て居るのを見つけました。

大勢つれだし、お酒は飲んで居るし、根がいたずら好きな士達だつたものですから、いいものを見つけたと云はないばかりに、忽ち氣を合して、二人の田舎者をからかひ初めました。

「何うも、見にくつてならないと思つたら、馬鹿馬鹿しく大きな男が前に立つて居ますな。」

「左様、あゝいふのが、半鐘盗人と、いふのでせうな。」

「もし、お國のお方。こゝは田舎の野原ではない。邪魔になるから、少ししやがんで下さい。」

「第一、鳥の巢の様な頭が邪魔になりますな。」

上から見下しながら、二人をおこらせ様として、

種々な悪口をいひます。

「佐々木！ われ／＼の事か？」

「ウム、面倒臭いから、相手になるな。」

二人は話し合つて、上も見ず、聞えない振りをして角力を見て居ました。

三

何んといふ、しつこい悪戯をするのでせう。

いくら口でからかつて、應えがないものですか、その中の一人が、亂暴にも煙草のすひがらを、ぼんと、下へたゞき落したのです。

所が、運の悪い事には、そのすひがらが、佐々木先生の、頭の真中へ落ちて、すべり落ちもしないですうつと、白い煙を立て出しました。

さすがに豪傑の佐々木先生も、

「うむう！」

と、眼を白黒させて我慢をして居ましたが、やが

て、煙草の火が、じゆうと、頭の皮膚へやけついて消えて終ふと、につこり笑つて、

「福士、すまないが、上の奴等の顔を見て置いて呉れ！」

と、小さな聲でさゝやきました。

おちいさんは、自分でも、我慢強いのを我慢にしたさうですが、この時の佐々木先生の忍耐の強いには一本参つたと云つたさうです。で、おちいさんは、素知らぬ顔で二階の士達を、ずうつと見廻しました。

が、かんじんの、頭をやかれた方の士が、聲も立てなければ、上も見ないので、江戸の士達もあきれて終つて、どつと大聲に笑つたきり、後は相手になりませんでした。

四

角方がお終ひになると、二人は大勢の人より、一

足先に表へ出ました。

「福士、顔は見えて置いて呉れたらうな。」

佐々木先生はさう云つて、出口の方へ向きなほりました。

「大丈夫だ！」

云ひながら、お爺さんは、これは佐々木の腕を試すのに、いゝ時だと、心の中で考へました。群集にまちつて、顔を赤くした士達が出て来ました。

おちいさんが、あれだと、眼で知らせると、

「ありがたう！」

さう云つて、素知らぬ顔で立つて居ます。先登の士が、佐々木先生の三尺程前まで来て、さつと倒れて終ひました。併し、何故倒れたのか、誰も知りません。續いて来る、仲間の士達も、何も知らずに、人に押され押されて出て来ました。と、また一人、また一人、とうとう、十四五人の仲間が、先生の前まで来ると、すたつ、すたつと、聲も立てずに

寝る様に倒れて終ひました。

振り返つて、おちいさんの顔を見た佐々木先生は、ニコ／＼と笑つて、先に立つて、どん／＼歩き初めました。

ちようど、二人が、十間程、歩いた時、

「わあつ！」と、物におびえた様な叫び聲が、群衆の中から起りました。

「大變だ！ 大變だ！ 士が切られて居る。」

「三人、四人、五人！ うわあ大變だ！」

「誰だ！ 何うしたんだ？ 皆な死んで居る！」
押し合ひ、へし合ひする様な、人込みの中で、長い刀を抜く事は、中々出来るものではないといひます。それに、先生の抜いて、切つて、元のさやへ刀をおさめる間が、あんまり早いので、誰も、それを見る事が出来なかつたに異ひありません。

おまけに、切り方が、上手なので、切られた人も驚いたり、聲を立てる間もなく、倒れて終つたに異

ひありません。

所が、こゝに、大變困つた事が出来たといふのは、馳けつけて来た、お役人が、いろいろ調べて見て、

「これは、大變腕のすぐれた者の仕業に異ひない。早く、士姿の者を全部つかまへて、刀を調べて見よう。」といふ事になつて、二人も、間もなく役人に取りまかれて終ひました。

五

見て居る人達も、

「強さうなお士だ！ この人達に異ひないぞ？」

と、聲を合せてさゝやきました。

おちいさんは平氣ですから、すつと刀を抜いて、お役人の前へさしだして見せました。

「よろしい。では、あなたのを拜見します。」

お役人がさう云つて、佐々木先生の方へ、詰めよつた時、先生は、さすがに、サツと顔色が變りました。

た。そして、おちいさんの方をぢいつと見てから、
「よろしい！」

さう云つて、刀に手をかけました。その時の佐々木先生の顔には、——こゝで、私が罪人になると、殿様の名前をけがす事になる。私は、役人も切つて終ふつもりだから、お前は早く行け！ ちやんと、さう書いてあつたと云ひます。

先生は、思ひ切つた様にさつと刀を抜きました。と、何うでせう。あれ程の間に、あれ程大勢の人を切つた刀に、涙程の血の後も、けしの實程の刃こぼれもついて居ない！

「失禮しました。」お役人は、それを見ると丁寧に云つて、行つて終ひました。

そのまゝ二人は黙つて歩き出しました。佐々木先生は、時々、小首をかしげて、考へこんで居ます。

六



人家のない、さみしい處へ来た時でした。佐々木先生は、ぼんと、小膝をたゝいて、

「福士！ 貴様ふいたな！」と叫びました。

「これか？」聲に應じて、おちいさんが、自分の、着て居る羽織のすそを、裏返して見せました。それ



を見ると、先生はハツと両手を膝について、

「参つた！」と、われ鐘のやうな大聲で叫びました。

おちいさんの羽織の裏には、十四本、ちようど先生が、切つた人数だけの血のあとが、はつきりついて居たのです。驚くではありませんか。先生が、眼

にも止らぬ早さで、人を切つて、鞘へおさめる間に後に居たおちいさんが、さつ！ さつ！ と、それ以上の早さで、刀についた血潮をぬぐつて居たのです。しかも、着て居る羽織の裏で。

「未熟な者だが、何うか、兄弟の誓ひをして頂きたい。そして、これから先は、私を弟として可愛がつて下さい！」

佐々木先生が、さう云ひました。おちいさんが、よろこんで、承知したのは云ふまでもない事です。そして、一生、二人の間の友情に變りのなかつた事

いゝえ、それ處ではありませんでした。おちいさんには、この事が、自慢で自慢で、我慢が出来なかつた位だつたのです。ですから、おちいさんは死ぬ迄、氣げんのいゝ時には、誰でも話相手にして、
「……で、南部の佐々木は、私の弟ぢや。」
と、うれしそうに話すのでした。（をはり）

世界名作物語

英國 ウイダ原作

フランダーズの少年



三宅房子
岩岡とも枝 畫

第四回 少年と犬の最期

ネルロは、火事の晩に、用もないのに粉挽場のあたりをうろくしてゐたといふために、とうとう火つけの嫌疑を受けてしまひました。村一番のお金持ちのいふことなら何でも信用するこの村の人達のことですから、ネルロを疑つてゐる粉屋の主人の言葉を信じ

ないまでも、兎に角それからといふもの、ネルロは昔ながらむづかしい瓶で見られるやうになつてしまひました。

ネルロとパトラッシュとは、ほんとにふたりつきりになつてしまひました。それは、クリスマスの一週間前の晩、とうとうジエハン爺さんが死んでしまつたのです。お爺さん長い間半死にかけたまゝで、かすかに動く外身動きが出来ず、親切な言葉を云ふより外には全く何も出来ない病人でしたが、

それでもお爺さんの死は、犬と少年のためには大變な力落しでありました。ふたりはもう泣いて泣いて泣き暮らしました。

ふたりの歸りを微笑んで迎へてくれるのは、この世の中にお爺さんだけだつたのです。ですから、死骸を松板の棺に入れて、小さな教會堂の隣りの名もない墓に、冬の寒い最中お葬ひをした時には、ふたりは泣き悲しんで、誰か慰めなつて慰められようと思へませんでした。あゝ犬と少年……お爺さ

んの死を惜しみ泣く者は、この世ではこのふたりより外にはないのです。

ネルロとパトラッシュとは胸も張りさけるほど悲しみながら墓地から歸つて來ましたが、その貧乏な、淋しい、樂しみのなくなつた小屋でさへ、ふたりの慰めようとはしませんでした。それは、もうこの小さい家のためにかつた地代が、一と月おくれになつてゐるところへ、ネルロは悲しい葬式のためにおしまひの一錢までも拂つてしまつたので、その地代を拂ふことが出来なくなつたのです。それで仕方なくネルロは小屋の持主のところへ行つてお詫言を言しました。持主といふのは因業な靴屋のおやぢで人情のない男でしたから、むろん、ネルロに同情をしませんでした。家賃や地代が拂へないのなら、その代り小屋にあるものは木片一つでも、石塊一つでも、鍋から蓋まですつかり取り上げてしまつた上に、ネルロとパトラッシュは、明日かぎり小屋を出て行けと云ひ渡しました。その晩、ネルロとパトラッシュは、一と晩

中火の風のない暖げな夜、灯もつけずに坐つたまゝ寒さと悲しさに泣きながらびつたりと抱きあつてゐました。ふたりのからだは寒さのために感じをなくして、凍え死ぬかと思はれました。

やがて夜が明けるとその朝はクリスマス前夜の朝です。ネルロはぶる／＼とふるへながら、たゞひとりの友達であるパトラッシュをしかと抱きしめました。あたまかい涙がぼろ／＼と落ちました。

「パトラッシュ、行かうよ。ね、パトラッシュ。僕等はちつとしてゐて、追ひ出されるのを待たずに自分から行かう。」

パトラッシュはネルロの云ふことを聞くにはきまつてゐます。ふたりは悲しげに並んで、長い間住みなれたなつかしい小屋を出ました。小屋の中には、粗末なものながらふたりにとっては大切なものばかりでしたが、それも含めて行かればなりませんでした。ふたりは歩きなれた道をアントワーブの町の方へ行きました。太陽はまだ雲を見せな

いし、道に沿うた大抵の家は、まだ戸を閉めてゐましたが、少しは往來があるといふ人もありました。けれど誰も、すれちがふ犬と少年とを振り向いて見るものはありませんでした。

二人が痛い足をひきすつて、町に着いたときには、もう鐘は十時を鳴らしてゐました。その日の十二時には、晝の入選した結果が發表されることになつてゐました。それでネルロは先に晝をおいて來た展覧會場へ行つて見ました。

やがて町の大鐘が音たかく鳴り響きました。十二時になつたのです。と同時に、入口の扉が開いたので、大ぜいの者はどき／＼の胸を押へながら、どや／＼と道入り込みました。當選した晝は、上段においてある晝の上に飾られることになつてゐたのです。ところが、その晝を見たネルロの目は、ぼつとかすんで晝がかつたやうになりました。そして、からだがか／＼として支える力もなくなりました。しかし、ネルロはもう一度

心を落ちつけて、はつきりとその懸けてある
面を見ました。

「あ、それはネルロの描いた顔ではありま
せんでした。」

ネルロがやつと正氣づいたときは、ネルロ
は入口の石の上に倒れてゐて、パトラツシ
ユが一生懸命に、ネルロの氣なとりかへさう
としてゐるところでした。

ネルロはよろ／＼しながら立ち上つて、パ
トラツシユをかつかと抱きしめて、

「あ、もう駄目だ。パトラツシユ、もう駄
目だ。」と力ない聲でいひました。

ネルロはいく度も倒れさうになるのを、や
う／＼踏みこらへました。もうお腹が空き切
つて辛抱出来ないほどですが、やはり又村へ
引きかへすよりほかはありませんでした。パ
トラツシユもそばに寄つて頭を垂れてゐまし
た。もうパトラツシユの丈夫な足も、饑乏と
悲しみのために、弱つてしまつてゐるので
す。

雲は降りしきつて、きつい風が北からさつ

と吹いて來ました。

やつとの思ひで村に近づいた時は、鐘が四
つ鳴りました。その時、突然パトラツシユが
立ち止まりました。何か雲のなかに嗅ぎつけ
たと見えて、泣くやうに吠えて咬へて來たの
は、小さな茶色の羊袋で、暗い中でそれを
ネルロにわたしました。丁度その近くに小
な十字架の像があつて、その下にほんやりと
うす暗いお燈明があけてあつたのでネルロ
が燈明の光りで袋を照して調べて見ると、
それにはコゼツと云ふ名前があつて、中には
六千法と云ふ大金の切手がはいつてゐまし
た。

それを見た時、今までぼつとしてゐたネル
ロの氣持が、少しはつきりして來ました。で
早速シヤツの中に押し込んで、犬を撫でて歩
き出しました。パトラツシユは思ひ入つたや
うに少年の顔を見あげました。

ネルロはまつ直ぐに粉挽小屋まで駈けて行
つて、入口の格子を叩きました。するとおか
みさんが泣き強らした顔を窓から出しまし

「おかしさんとパトラツシユが、ネルロの心
をささる間もない内に、ネルロはかぞん
で犬に、キヌをして、あわたしく扉を
閉めたかと思ふと、外の暗闇の中に、交
を消してしまひました。」

おかみさんも、アロアも、あまりの喜
びと驚きとで、言葉も出ませんでした。
パトラツシユは閉めこまれた際の戸に向
つて腹立しく吠えつきましたが、もう駄
目でした。

やがて、別の入口から、主人のコゼツ
がしよんぼりと歸つて來ました。そして
妻のそばに坐りました。

「あ、もうだめだ。」
その顔は、頬が灰色になつて、唇もいつも
に似ずぶる／＼ふるへてゐます。
「提灯をつけて残らず探して見たのだが、も
うない。――類にゆする分も何もかもすつか

りなくなつてしまつた。」
その時、おかみさんが革袋を主人のコゼ
ツにわたして、そのわけを話したので、流石
に因縁なコゼツも、恥かしさとおそろしさの



ために、両手で顔をかきしてしまひました。
「あ、わしはあの子に辛くして來た。わし
のやうな者が、どうしてあの子の親切を受け

た。アロアも出て來ました。

「あ、お前さんだつたの。可哀さうに」と
おかみさんは、涙をこぼし／＼、やさしい聲
で云ひました。

「でもさア早くお歸りなさい。うちの旦那が
見たら叱りますからね。今夜は家では大へん
な心配ごとがあるのよ。旦那が先刻馬で歸る
途中、大金のはいつてゐる財布を落してしま
つたので、いま探しに出かけたところなの。
こんな雪ではとても見つかりさうにもなし、
あ、どうしたらいいでせう。もし見つからな
かつたら、家は丸つぶれになるのよ。ほんと
に、うちの人がお前さんに辛くした報ひが、
いま來たのです。」

ネルロは革袋を持つて、パトラツシユを
家の中に呼び入れました。

「この犬がこのお金を今夜拾つたのです。ど
うぞ旦那さまにさう仰言つて下さい。もうこ
の犬もおいばれて來ましたから、どうかこの
犬だけは宿を貸して饑乏ないやうにしてやつ
て下さい。僕一生のおれがひです。おれがひ

ることが出來ようか。とコゼツは既くやうに
云ひました。

アロアはそれに元氣づいて、お父さんのそ
ばへ行きました。そして、

「ネルロはもう來てもよいのね、お父さ
ん明日よんでよくつて。先のやうに。」
と、いひました。

コゼツは娘の手をとつてしつかと抱き
しめました。その日に焼けて硬直つた顔
も、今は蒼蒼と、ふるへてゐました。
「さうとも、さうとも、明日のクリス
マスには呼ぶのだよ。いつでも遊びに來
ないときは來てもらふが、わしの兩
意が、こんな大きな罪をつつたのだ。い
ま神様が懲めて下さつたのだ。わしは
神様におすがりして、あの子におわびを
せればならぬ。罪滅しをせればならぬ
い。」

アロアは嬉しさのあまり、お父さんにキッ
スしました。それから急いで駈けて行つて、
扉の方ばかりを見つめてゐるパトラツシユ

のところへ行つて、

「今夜、パトラッシュに御馳走してやつてもいいの」とさもうれしそうに呼びました。「さうだ、さうだ。一番の御馳走をしてやれ」とロセツも云ひました。この老よりの因縁におやぢも、今はほんとに心の底から改心してしまつたのであります。

アロアはクリスマス飾をした明るい綺麗な、そして食物のたくさんあるたのしい部屋で、パトラッシュを一番上等のお客さんにしようと、いろ／＼と骨を折つたのでした。しかし、パトラッシュは腹いせに嫌はたへ行かうとしませんでした。お腹は空ききつて、寒さに凍えてはゐたのですが、ネルロがゐなければパトラッシュはたのしくもなし、喰へたくもないのでした。パトラッシュはどんなに御馳走をとられてもうれしうな様子もないで、たゞ石のやうに扉のそばを動かす、逃げ道はないかとそればかりをねらつてゐるやうでした。

やがてロセツの家では大きな食卓の上に、

いろ／＼な御馳走が並べられて、そのお客達が食卓につきました。皆の歌びの聲は絶頂に登つて、クリスト降誕の假装をした、大勢の子供が、それ／＼選り抜いた贈物を贈つたその時です。今まで疎なれらつてゐたパトラッシュは、新しく来たお客が思はず、扉の掛け金を外づいた途端、風のやうに抜け出しました。

パトラッシュは弱り疲れた四足がつづ限り矢よりも早く、暗い夜の冷たい雪の上を走つて行きました。たゞ／＼ネルロを思つてその跡を追ふばかりです。もしこの犬が人間であつたら、或は美味しい御馳走と、暖かい爐ばたと、安らかな眠りとに誘はれて思ひ止まなかも知れませんが、けれどパトラッシュはそんな心持は持つてゐませんでした。パトラッシュは遠い昔のことを忘れてはゐませんでした。シエハンお爺さんとネルロとが、道ばたの溝の中で死にかけてゐた自分を助けてくれたことを忘れてはゐませんでした。

積つた雪の上にも夜とほし雪が降りつゞ

きました。もう時間は十時ごろです。ネルロの足跡は大方消えてしまつてゐるので、匂ひを嗅いで足跡を探すために、パトラッシュは散々に苦しみました。それでもやつと見つけ出しました。と思ふと、すぐまた見失ひました。そしてまた見つけたり、また見失つたりして、それを百度以上も繰返しました。

その夜はこゝに風の強い寒い晩でした。道ばたの十字架につけた燈明は吹き消されて、路は木の板のやうに凍つてゐました。一寸先きも分らない闇夜で、人家は少しも見えないし、出あるくものは一人もありません。大抵の家畜はみな小屋に寝て、人はみな家のなかでお眠ひをしてゐます。むごたらしい程の寒い夜に外にゐるのは、たゞパトラッシュだけでありました。おいほれて、お腹が空いて身體中が痛むのにもかまはず、パトラッシュはたゞ主人を探さなければならぬといふ責任を感じて、歩きつゞけてゐるのでした。

ネルロの足跡は降りしきる雪のために消されて、いよいよ分らなくなつてゐましたが、

とにかく真直ぐにアントワープへ向つてゐることだけは分ります。パトラッシュがやつと思ひで町の端れまで通りついで、それから狭いうねうねした陰気な道にはいつた時は、もう真夜中を過ぎてゐました。町のなかも真暗闇で、たゞ所々月の隙間から灯りが漏れて来るばかりでした。時々、家に歸る人たちがありましたが、その中には提燈をつけて、酔つぱらひの歌をうたひながら行く者がありました。往來は一面の氷の路で、舞や家がその上にぼんやりと思ひ影をうつしてゐて、しんと静まつた中に音を立てるのは、たゞ風が街燈の高い鐵の柱にあたつて、氷が裂けるやうな響



なてるばかりです。路の上はもう大勢の人が通つて散々に踏みにじつてしまつてゐましたから、パトラッシュが嗅いで探す一線の足跡はむちやくちやくに消されて、それを探して行くのはなかなか難儀なことでした。けれど、パトラッシュはやつぱり何處までも一心に探し探して行きまし

た。寒さが骨に凍し、凍つた角で足を切り、ます／＼饑えてくるばかりでしたけれど、パトラッシュは休みはしませんでした。きびしく凍る時間なかの痔せた、ふるへながらうな垂れてゐる一匹の動物を、誰も哀れが

るものもありません。かうして長い間耐へて来て、パトラッシュは主人の足跡を探し出して、とうとう町の真中まで来て、大きな舊敷寺院の入口に上つたのです。

「あ、此處は一番凍つてゐたところだ」とパトラッシュは思ひました。ネルロが藝術美術と云ふものにあこがれてゐる心持は、パトラッシュには分らないことですが、それが哀れに悲しく、また神々しく見えな

のでした。大寺院の門は、丁度真夜中の集りがすんだあとで、まだ扉がそのまゝで閉つてゐませんでした。門番が早く歸つて御馳走が食べたかつたからか、それとも眠くて鍵をかけるのを忘れたのか、どちらにもしても、そんな手抜かりがあつたからでせう。扉が半分ばかり開けたまゝになつてゐて、そこからパトラッシュが探してゐる足跡が、一つの線になつて白い雪を黒い石の床の上に残してゐるのでした。パトラッシュはそのかすかな白い一つの線について進みました。神々しい静かな堂の内、ひろ／＼とした圓天井の下を通つて、まっすぐに聖堂の入口に行くと、そこにネルロが倒れてゐました。パトラッシュはそつとネル

ロの傍へよつて顔にさばりました。

「どうぞ、あなたを見捨てるやうな不忠なもの、思つては下さるな」と云ふやうに、身体をすり寄せたのです。

ネルロはかすかに叫んで起き上りました。そして、しつかと犬を抱きながら、

「此處で一緒に横になつて死なう。世間の人々は僕たちにもう用がないのだ。僕たちはたつたふたりきりなのだ」とさ、やきました。

ものが云へないバトラツシは、答へのもりでも、向もネルロの胸にしかと頭を押つけました。大粒の涙が茶色の恐しさうな顔に溜りました。それは自分のために泣くのでありませぬ。それは嬉し涙でありました。

ふたりは刺されるやうな寒さの中で、しつかと抱きあつて横になりました。北の海から覺れて来て、オランダの堤防を越えて吹きつける風は、まるで氷の怒濤を崩してくるやうに冷いでした。その風に觸るものは何でも凍らせずにはおかないやうな冷たさです。ふ

やうに云ひました。

夜が明けました。アントワープの町の人々はこの寺院の中に少年と犬を見付け出しました。もうふたりとも冷くなって死んでおりました。酷しい夜の寒さは、少年と犬を一絡に凍らせて、唇がな氷い眼りに就かしたのです。

それからしばらくして、太陽も大分高く登つた頃、頑固さうな顔をしたコゼツが、オイ／＼泣きながらやつて来ました。そして、「わしはまあ、この子供に何人と云ふ残酷なことをしましたらう。すまない、すまない。罪滅しをせねばならぬ。わしの御になる管の子だったのに」と、叫びつづけておりました。

またしばらくすると、この頃有名な画家が来ました。そして集つてゐる人々に残念さうに云ひました。

「本當の價値から云つたら、なしかに明日の賞金をやらねばならぬ管だったのだ。得がたい有難な天才少年だった。未來には

たりが横になつてゐる石造建築の大きな建物の中は、外で野ざらしにされるよりも一そ

う寒さが酷いのでした。そして時々、蟬が啼いながら飛び廻りました。さうかと思ふと、また時々光りの流れが、聖壇に並んだ像の列を明るくすることがあります。ふたりはルイベンスの畫の下で横になつてゐたのです。あまりの寒さに身體はしびれて、眼氣がさして、全く靜かに、夢でも見るやうにうつとりとなつてしまひました。

と、その時突然、大きな白い光りががらんとした堂の内に流れるやうに入りました。それは月がいま、雲の裂け目からのぞいたのです。雪は降りやんで、一面の氷の野を照らす月の光りは、曉の光りよりも清く澄んでおりました。その明るい月光が、二つの名畫の上を照しました。畫を包んであつた覆ひは、ネルロが此處へ入つた時引き裂いてしまつたのですから、今は何も邪魔をするものがありませぬ。この瞬間「基督の昇天」と「十字架上の基督」の二枚の畫をはつきりと

きつとまらゝに畫家になれたのだ。私はなんとかして探して、私が教へてます／＼その天才を彫がさうと思つてゐたのだつたのを。」

また、アロアは泣き崩れながら、父の腕にすがつて、



「ネルロ、いらつしやいよ。支度はみんな出てよ。あなたのために假裝した子供たちが

六四

見ることが出来ました。ネルロは立ち上つて、畫の方へ兩手を差し出しました。うれしさのあまり我を忘れた涙が、青さめた顔の上を流れました。

「お、見た、僕はどう／＼見た。あ、神様、もうこの上は何人にもいりませぬ。」

足の力がなくなつて、やう／＼膝頭だけで身體を支へながら、向もネルロは崇拜してゐる莊嚴な畫をつく／＼と見上げておりました。清く澄んで美しく照り輝いてゐる月の光りは、ネルロが長い間見たい／＼とあこがれてゐたその畫を、一刻々々とはつきり照らしました。

けれど、それも忽ち消えて、再びまづ暗闇の夜になつて、キリストの顔をかくしてしまひました。

畫の方へ捧げてゐたネルロの兩手は、また犬の身體を抱きました。「あ、神様のお顔が拜めるだらうーあそこに。……神様は私たちを見放しはなさらな

い。神様はお慈悲ぶかい。と、ネルロは咬く

手ん手に彫り物を持つてゐるし、いま僅吹き

の響さんが吹きかけてゐるとこなの。あなたとわたしは、クリスマスの一週間は一緒に爐のそばで果を焼いてもいいとおつしやつてよ。クリスマスの一週間どころか、何時までだつてゐても構はないつて。ね、バトラツシニもうれしいでせう。ネルロ、はやく起きていらつしやいよ。」

けれど、偉大なルイベンスの畫の方へ向いたきりのその死顔は微笑んだま、そばの人々に「もうおせい」と答へてゐるやうです。

即ちかな畫の鏡が霧の上に鳴り渡つて、太陽が麗らかに雪の野原を照らし、美しく着飾つた人々は往來に出て喜んでゐますが、最早ネルロとバトラツシは人の慈悲を受ける必要はありませんでした。

生命がある間離れられなかつたこのふたりは、死んでも離れませんでした。ネルロの胸はしつかと犬を抱いてゐました。村の尺達

は墓の一つにして主従抱きあつたまゝで葬りました。——永遠に。(なはり)

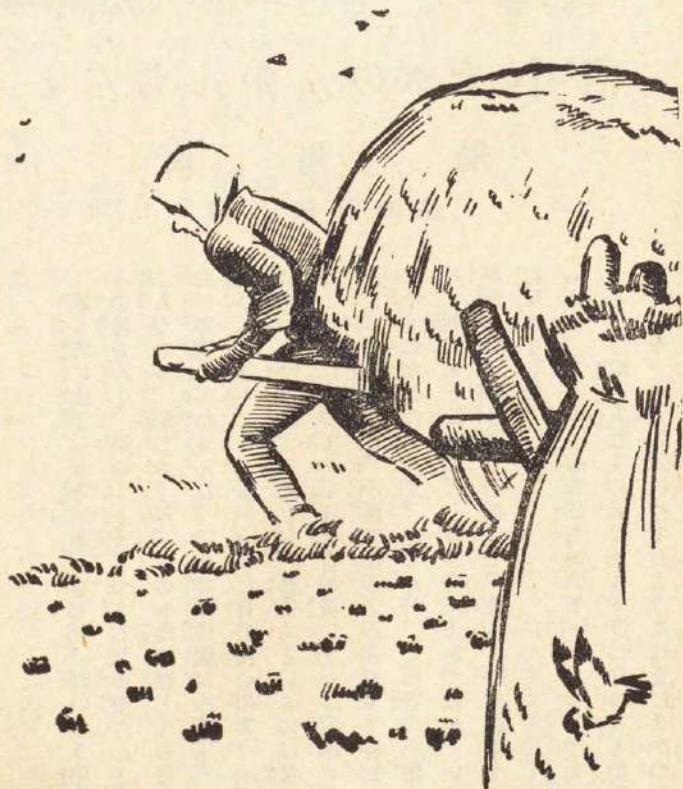
稲田の稲

杜 仙之介

姉上さまは
お嫁に行つた
こつぽくはいて
こつぽく行つた
稲田の稲は



みな刈りこられ
荷車に乗つて
ひかれて行つた
日和はつゞけ
ぽか〜つゞけ
姉上さまは
お嫁に行つた



寺内萬治郎畫



僧小チボのんかんちんと

勉 川 西

畫布保爾島水

一
或る町に立派なお寺がありました。たいさう年寄りの坊さんと、眼のくりくりとした小僧さんと、二人つきり、淋しさうに、このお寺で墓してゐました。年寄りの坊さんは、この寺の住職なんです。小僧さんは坊主になつてからまだ日が浅いので、「新僧」と呼ばれてゐました。新ぼちといふのは發心して坊主になつてからまだ日が浅いといふ意味の言葉だつたのですが、小僧さんなどみんなさう呼ばれるやうになつたのです。ところが、この寺の小僧さん、新ぼちと云はれてゐるうちはよかつたが、いつか新の字が略されてしまつて、ぼちと呼ばれるやうになりました。

「ああ、ありやお寺のぼちかい？」
などと町の人たちに云はれるやうになつたものです。いや、ぼちと云はれてゐるうちはまだよかつた

が、ぼちではお墓の墓地と間違ふからといふので、

いつしかボチと呼ばれるやうになりました。かうなつちや、いくら小僧さんだつて可哀さうです。人間の呼び名だか、犬の名前だか判りやしません。

「あそこにボチが通つてるよ。」

かう云はれたつて、知らない人は人間のことだとは思やしません。きつと、どつかの犬が通つてるのだらうと思ふでせう。どんな毛並の犬だらうと思つて、ひよいと見ると、頭を青々と剃り立てた小僧さんが通つてゐて、それがボチだと云はれたら、きつと呆れてしまふでせう。なにが面白くて犬と間違ふやうな名前をつけたのでせう？ ボチなら決して墓地とは間違はないけれど、犬の名と區別がつきませぬね。そこで、口の悪い人たちが集つて、あの小僧さんはよくとんちんかんなことをするから、とんちんかんのボチ小僧といふことにしよう、相談が出来ました。

二

このとんちんかんのボチ小僧さん、なかなか愛嬌もので、素直な性質だつたので、たいさう住職の氣に入つてゐました。そこで、或る日、もう寺をゆつて見ようと考へて、

「新ぼちはゐるかえ？」

と呼びました。さすがに住職さまはとんちんかんのボチなどとは申しません。

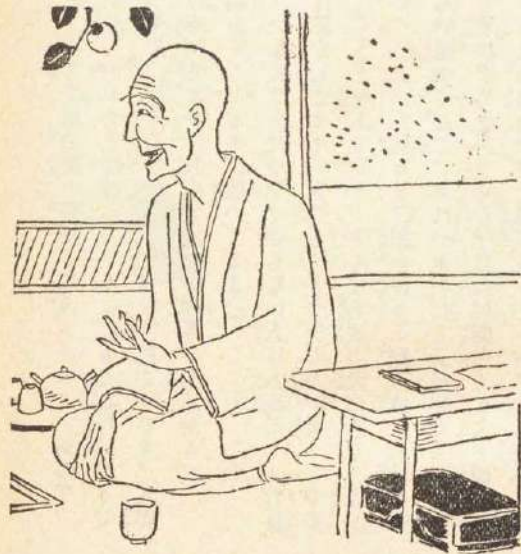
「はあ、お呼びでございますか。」

「お前を呼んだのは外でもないが、もうわたしも年寄りで寺役をつとめることも大儀ぢやから、お前に寺をゆづつて見ようと思ふ。」

「ありがたうございますが、まだまだわたたくしは學問も出来ませんし、それに今日明日と急ぐことでもないんですから、まあゆくゆくのことになすつて下さい。」

「いや、隠居すると云つても、外へ行くのでもなしこの寺の奥の方へ引込んでるだけだから、用があつたら訊ねるが好い。」

「それではお師匠さまのお心任せにいたします。」



ここで相談がととのつて、とんちんかんのボチ小僧さん、立派な寺を、ゆづり受けることになりました。お師匠さまの住職は、小僧さんに寺をゆづつて、後々のことをいろいろ注意しました。

「云ふまでもないことおやが、すゐぶん氣を付けて町の旦那衆の氣に入るやうにして、お寺の繁昌を計りなさいよ。」

住職はかう云ひました。

「御心配なさいますな、きつと町の旦那衆の氣に入るやうにいたします。」

ボチ小僧さん、すっかり引受けてしまひました。

「では、わたしは、もう奥へはいるから聞きたいことがあれば訊ねに來なさい。」

「はい。」

「また、旦那衆がお出でになつたら、知らせてお呉れ。」

住職はかう云ひ残してすいと奥へはいつてしまひ



ました。後で小僧さん大喜び、

「ああ、うれしい、いつ寺をゆづつて呉れるかと思つてゐたら、今日からゆづると仰有つた。こんなうれしいことはない。町の旦那衆が聞いたら、さぞ喜

んで呉れるだらう。」

小僧さん、一人で得意になつてゐます。とんちんかんの小僧さん、ここ大當りのところですよ。とんちんかんをしなければ好いが、――

三

「ごめん下さい。」

誰か表で聲をかけてゐます。小僧さんさつそく出て行きました。すると一人、町の旦那衆が立つて居ります。

「これはようお出でなさいませ。」

なかなか愛嬌よく迎へてゐます。

「とんと御無沙汰いたしましたが、お師匠さまにもお變りはございませんかな？」

「はい、ありがたうございます。一向お變りはございませんが、お師匠さまはなんと思はれてか、今日からわたくしに寺をゆづつて下さいました。どうぞ

これまで通りお心安くお立寄りなすつて下さい。」
「それはどうもお目出度う！ 知らないこととお喜びにもまわりませなんだ。さて、今日お立寄りしたのは、外のこともないが、ちよつと遠くへと思つて出懸けて見たものの、途中でにはかに雨が降りさうになりましたので、傘を貸して頂きたいと思ひましてな。」



「お安い御用でございます。貸して進ませませう。ちよつと待つて下さい。」
小僧さん、一本の新しい傘を、持つて出て来まし

た。

「これお持ちなさいませ。」

「いや、これはどうもありがたう。」
「またなんなりと御用のことがあつたら仰有つてください。」

小僧さん、たいさう上機嫌です。

旦那衆が歸つて行つたので、小僧さんはお師匠さまの隠居部屋の方へまわりました。といふのは、旦那衆が見えたら知らせて呉れと云はれてゐたからです。

「今、なにがしさんがお出でになりました。」

「さうか。寺詣りか、なんぞ外に用でもあつたか。」
住職はたづねました。

「いいえ、傘を借りに来ましたからお貸し申しまし



た。」

「それは好いことをした。が、どの傘を貸して上げた？」

「この間新しく出来て来た傘を貸しました。」

「そりやそそうなことをしたものでちや。あれはまだ差し初めせぬのに、貸すといふことが、あるものか。また、さうしたこともあらうから氣を付けて置

くが、貸すまいと思へば、いくらでも断りの仕様が
あるといふものちや。」
お師匠さんに小言を云はれました。

「それちやなんと云つて断りますか？」

「お安い御用ではございますが、先だつて師匠が指して出られました時、暴風雨にあつて、骨は骨、皮は皮となつてしまひました。それで骨も皮も一緒にたにまん中を結べて天井へ吊して置いてあります。あれでは御用に立ちますまい、と、こんな風に似合はしいことを云つて断るものちや。」

「今度はさう申しませう。」

「まあ、よく物事を案じて注意するが好い。」

「はい。」

小僧さん、「はい。」とは云つたが、いくら師匠の言葉でも、有るものを貸さないなんて不人情なことが出来るもんかと考へました。しかし、なんと云つても、今日、寺をゆづられたばかりだから、お師匠

さまの云ふことには従はなければならぬから、この次から断らうと思ひました。

四

「ごめん下さい。」

また、誰か訪ねて来ました。小僧さん出て見ると矢張、町の旦那衆の一人です。

「これはようお出でなさいませ。なにか御用でございますか？」

「今日はちよつと遠いところへ行かうと思ふんですが、馬を貸して下さいませんか。」

「お安い御用でございますが、先だつて師匠が指して出られました時に暴風雨にあつて、骨は骨、皮は皮となつてしまひました。それで骨も皮も一緒くたにまん中を結へて天井へ吊してあります。あれでは御用に立ちますまい。」

とんちんかんのボチ小僧さん、いよいよとんちん

貸しませんでした。」

「馬のことは覚えてゐないが、——」

「先だつて師匠が指して出ました時に、暴風雨にあつて、骨は骨、皮は皮となつてしまつたので、骨も皮も一緒くたに天井へ吊してあるから、あれでは御用に立ちますまいと、申しました。」

「それは傘を借りに来た時に云ふことだ。馬を借りに来た時にそんなことを云ふものぢやない。もつとも、馬も貸すまいと思へば、断はりの仕様がある。」

「どう断はるのでございますか？」

小僧さん訊ねて見ました。

「この間ちやう春草に付けて置きましたところ、駄狂ひいたしましたして、腰の骨を打ち折つて尻の隅に糞をかづいで寝て居りますから、あれでは御用に立ちますまいなどと似合はしい断はり方をするものぢや。」

「この次にはさう申します。」

「そそうなことを云はないやうに、氣を付けてお呉

かんなことを云ひ出しました。

「いや、馬のことですよ。」

町の旦那衆は云ひました。

「はい、馬のことでございます。」

「さうですか、それぢや仕方がありません。さやうなら！」

「またお出でなさいませ。」

旦那衆は寺の門を出る時に首を傾げて、「ハチ、合點の行かぬことを云ふものだ。」と、咄いてゐました。小僧さんは今度こそ師匠の教へた通りに云つたのだから、きつとお師匠さまも機嫌が好いだらうと思ひながら、奥の御隠居部屋へまゐりました。

「ただ今、町の旦那衆が見えました。」

「なにか御用であつたか？」

「馬を借りにまゐりました。」

「幸ひ馬は隙であるから貸してあげたらうな。」

「いえ、さつきお師匠さまが仰つた通りに申して

れ。でないと、隠居のわたしまで迷惑するからな。」

住職はとんちんかんのボチ小僧をねんごろに戒めました。小僧さんも素直によく聞いてゐました。

五

「ごめん下さい。」

また誰かまゐりました。小僧さん出て見ると、お隣りの方です。

「これは、お隣りの方ですか。ようお出でなさいませ。」

「すぐ近所に住んでゐながら、近頃とんとお目に懸りませんが、お師匠さまにも、お前さんにも、一向お變りはありませんかな。」

「ありがたうございます。別に變りもありませんがお師匠さまは、なんと思はれましてか急にわたくしに寺をゆづつて下さいました。」

「それはお目出度う。知らないこととお喜びにも

参りませなんだ。ついでには、明日先祖の法事がありますので、お師匠さんも、あなたも御一緒に御下さるとありがたいのですが、——」
「わたくしはまゐりますが、師匠はまゐることが出
来ずまい。」
「なにか御用でもありますか？」



「いや、この間ぢう、春草に付けて置きましたところ、駄狂ひいたしまして、腰の骨を打ち折つて厩の隅に糞をかついで寝て居ります。あれではまゐることが出来ずまい。」

「住職さまのことですよ。」

隣りの人は怪訝さうに訊き返しました。

「ええ、師匠のことです。」

「それはお氣の毒なことです。それではあなただけお出で下さい。」

「わたくしはまゐります。」

ボチ小僧さん、またとんちんかんなことを云ひました。それでも當人は得意になつて、いかなお師匠さまでも、今度こそは、教へられた通りに云つたのだから喜んで呉れるだらうと思つてゐます。そしていそいそと御隠居部屋へまゐりました。

「お隣りの方が見えませんでした。」

「なにか用であつたか？」



「明日は先祖の法事があるから、お師匠さまとわたくしと二人に来て呉れと申しました。」

「まゐると云つたであらうな。」

「いえ、わたくしはまゐりますが、お師匠さまは行くことが出来ずまいと申しました。」
「そりやまたなせだ？」

「この間ぢう春草につけて置きましたところ、駄狂ひいたしまして腰骨を打ち折つて、厩の中に糞をかついで寝て居りますから、あれではまゐることが出来ずまいと申しました。」

「ほんとにさう云つたのか？」

「ほんとにさう申しました。」

「さてさて、お前は愚かな人間だ。いくら云つてきかせても判らんかな。それは馬を借りに來た時にさう云へと云つたことぢや。そんな風ではとても寺を守つて行くことが出来ないだらうから、とつと出て行きなさい。」

住職さまは呆れてしまつて非常に腹を立てて、とうとう、とんちんかんのボチ小僧を追ひ出してしまひました。

このとんちんかんのボチ小僧、それから一生懸命に勉強して、後には、偉いお上人様になつたさうです。

(をばり)

乗合馬車

伊藤 昌星

ある山國に、小さな停車場がありました。停車場の前には、一臺の見るからにいたゞしい程古はつけた乗合馬車が、汽車の着く頃待つて居りました。間もなく凄しい響音を立て、汽笛と共に汽車は停車しましたので、乗客はぞろぞろ下りて皆改札口で切符を驛員に渡し出てまゐりました。其の時、乗合馬車の主人は、ラツパで客を盛に集めて居りました。汽車から下りたお客は、ベスケットや風呂敷包を裏そうに肩に

かついで、馬車の側へ駆けつけました。馬車の主人は、再びラツパで客を集めました。其の時、早やお客は十二三人程集りました。一同は馬車の後にK村行の札の下に値段表が下げられてあつたのを見て、皆頭を横にして考へた。其れも其れはす、値段表にはかやうに書いてありました。一等二等、三等、との區別が出来て居て、一等は五拾錢、二等は參拾錢、三等は貳拾錢と書いてありました。

一同のお客は、顔を見合せてふしんに思つて居りました。一臺の馬車に一等二等三等の區別はありませうか。誰か考へてもわかりませんでした。一同のお客は、ふしんに思ひつつ、思ひ思ひに好んで切符を買つて乗りました。

馬車は間もなくラツパを鳴らし走り初めました。野道を通つたり、小川を渡つたりして、間もなく小さな坂へ登りました。其の時馬はハアハアハアためいきをする様子、馬車の主人は急に大きい聲で言ひました。

「あ、モシ〜。三等のお客様は下りて歩いて下さい。」
三等のお客は言はれるまゝに下りて歩いて行きました。
馬車は坂を下り、又、野道を通り、林をわけて、又坂へさしかかりました。

其の時、馬は又ハアハアためいきをはじめ、も早やあるかなくなりました。それを見た馬車の主人は、又大きな聲で言ひました。



「は、馬車の後を押して下さい。」
二等のお客は、又、言はれるまゝに、二等の客は歩く、三等のお客は馬車の後を押して、坂上まで上りました。

其れから一町程の所でK村へ着きました。一同のお客は下りてつくづく考へて、「一、二、三、等の區別を初めて知つて感心しました。」
(かはり)



さむい風が野原の果から郊外のさびしい森へと、ひゆうひゆう唸つて吹きよせてゐました。月のないものしづかな夜です。遠くの空に賑やかな街の灯が

かなしい玩具

吉田 初太郎

岡本 歸一 畫

ほうと薄あかく暈んでゐました。

このにぎやかな明るい街から、ブーブーと一臺の自動車が発笛を鳴らしながら、ひとすじ道を郊外の森へとすらすら走つてきました。自動車は森のなかの立派な大きなお邸の前に、びたりと止りました。

「朝太郎やおうちに着きましたよ、起きなさいな。」
やさしいお母さんに呼ばれて、朝太郎はねむいねむい眼を、うつとりと開きました。

「いやな子ね、こゝは自動車のなかですよ、さあお

うちへ入りませう。」

そこで朝太郎は濛い眼をこすりこすり、お母さんに手を引かれて自動車を下り、玄關口へ歩いて行きました。そのあとから運轉手はおみやげのおもちや



の箱を幾つも小脇に抱へてついで行きました。

二

朝太郎はあたくかな、ふくふくした寢臺にねむつ

てゐましたが、突然に、ぱつちりと眼を覺すとすぐ跳ね起きました。

「さあ大變だぞ、僕はあの玩具を、みんな調べてみなかった。あまりねむかつたので自動車のなかでうたゝねをしてしまった。」

朝太郎は電氣のスイッチをねちりました。お部屋には、青白い光が水のやうに、しつとりと漂ひました。時計が午前一時を示してゐます。お部屋の片隅には玩具のボール箱が、順序よく積まれてありましたので、朝太郎はその蓋をいちいち開けてみました。

一の箱には自動車、二の箱には汽車が本ものとする。これも違はぬ程の巧みさで、入つてゐました。朝太郎はいちばん終りの箱の蓋に手をかけて、中をのぞきました。なんにもありませんでした。

「はてな」

朝太郎はじつと考へこみました。

「さあ困つた、いちばん上等な玩具の馬を何處かに落してしまつた。僕はばかなことをしてしまつたな」

「あゝ僕はおまへを探しにきたのだよ、よくこゝにゐてくれたね。」

馬は夜露にぬれながら、物懈さうに云ひました。

「坊ちゃん早くわたしを起してください。」

「悪かつたね、ごめんよ。」

朝太郎は素直に頭をさげてあやまりました。

「そうだ、これからあの馬をさがしに行かう。」
そう決心をすると、急いで身支度をしてお部屋の窓を開けて、暗い庭ささへ飛び下りました。

「いゝえ坊ちゃん、わたしこそあやまらねばなりません。よくこんなさびしい真夜中に探しにきてくださいましたね。では御禮に珍らしいものを坊ちゃんにお見せませう。どうかわたしの音中におのりください。」

三

朝太郎が馬の脊にまたがると、玩具の馬は急に大きくなって、ぼかぼか街の方へ駆けて行きました。

「何處へ行くの？」

「だまつて……だまつて……」

馬はすんすん駆けて、やがて街に着きました。

街に入ると馬は静かに、しんと寝鎮まつた町角を右に左に曲つて、やがて一軒の家の前に停りました。

「あ、こゝは晝間きた玩具屋ではないか。」

朝太郎は訝つてき、糺しました。

「え、そうですよ。時



に今は何時ごろでせう。」

「さあ夜中の二時ごろだよ。」

「では都合がいゝ、まあじいつとこの暗がりから玩具屋の店先を見てゐらっしゃい。」

馬はかう云ひながら、通りの片隅にびたりとからだを擦りつけて、暗い片陰に身をすくめました。朝太郎も何かしら、おさへられるやうな息苦しさをかんじて、馬の上になんか小くなりました。

四

しばらくたちました。かたりと音がして店の戸が細目に開きますと、長い白い髭のある、高い鷹のやうな鼻を持った、眼つきの鋭い



男が忍びやかに出てきました。

「あッ、玩具屋の主人だ。」

朝太郎が叫びかけると、

「シッ、坊ちゃん聲を立てはいけません。さあ黙つてあの男のあとをついて行きませう。」

と馬がさゝやきました。

主人は肩に白い布をだらりと掛けてゐましたが、大股にとツとツ……と急ぎ足で夜更の街を進んで行きました。

「さあ坊ちゃん、あの男が何をするか、よくごらんなさいよ。」

朝太郎は云はれるまでもなかつたので、頷いたの

でした。

怪しい主人は立止りました。主人の前には一匹の犬が身をこよめて、恐ろしさうに却へた眼つきで

ふるへてゐました。主人はにやりと微笑むと、右手を挙げ口の中でごそごとと唱へました。すると犬は忽ち正氣を喪つて、見る見るうちに玩具のやうに小さく、四脚をこわばらせてしまひました。主人はそれをつかむと、肩にかけた白い袋の口を開けて、無雑作にほうんと投げこんでしまひました。そして、とツとツ……と歩きだしました。

しばらく行くと、ある家の軒さきに一匹の裸馬が荷車につながれて、地面に鼻面をこすりつけてゐました。それを見ると主人はまた右手をあげて、口の中でごそごとと吐きますと、その馬は見る間に玩具のやうに小さくなつてしまひました。主人はそれも袋の口を開けて放りこんでしまひました。

いつしか街の出外れの海岸通りに出ました。主人は暗い沖の方をだまつて見つめてゐましたが、やがて三度、右手をあげました。するとぼつちりと灯を浮べて泛ぶてゐた沖の帆前船が、矢のやうに水の上を這つてきて、これも玩具のやうに小さくなり、主人の袋の中に吸ひ込まれてしまひました。

朝太郎は恐しさにふるふる身體をふるはせました。もう口をきく氣勢もありませんでした。

「坊ちゃん、しつかりつかまつてくださいよ、もしもこゝで一言でも聲を立てたら、坊ちゃんも玩具にされてしまひ、明日は陳列棚に飾られてしまひますからね。」

朝太郎はしつかりと馬の首すじにしがみつきました。あの怪しい玩具屋の主人にめつかつて、袋のなかに入れられたら大變だと思ひました。

主人は満足さうに袋をごそごと大きな掌でいちつてゐましたが、やがて、海岸に並んでゐる美しい

西洋館を眺めました。

高い尖塔、圓い屋根、切裂いたやうな三角形の屋根、大理石の圓柱、黄に赤に青に、ほのかにきらめく美しい窓々……

主人はまたしても右手をあげました。すると、ひとさわ美事な洋館が、すうい——音もなく地上をすうい……またくうちに主人の前に小さくかちかんでしまひました。主人はそれを、四度、袋のなかにぼウんと、投げ入れてしまひました。

「あつ！」朝太郎はあまりの恐しさに、思はず魂消るやうな叫びをあげてしまひました。

「誰だ！」

果して、主人は破鐘のやうに嘖鳴りました。物凄しい主人の眼光が、衝き刺すやうに朝太郎の瞳を射ました。主人が右手を高く、高く舉げました。

「あゝもうだめだ。」朝太郎は馬の首すじをしつかりにぎりながら、眞つ暗がりにとたりと落ちました。

どたりと大きな音がして、眼がさめました。寢臺から床へ、玩具の馬を抱へながら落ちたのでした。



「夢か！」朝太郎は蒼白い顔をして、はつと溜息をつきました。しみじみと抱えてゐる馬を眺めました。「この馬もあの夢で見た馬のやうに、いつかは生きて街を歩いてゐたのかしら？」

そう思ふと、こゝろから仲よくいたはつて大事に可愛がつてやらねばならないと思ひました。

「どんな玩具だつて、どんな、くだらないものだつて、みんな、それぞれの生命をもつてゐるに違ひない。」

そして、これからは決して、どんな玩具も粗末にするのを止めやうと思ひました。朝太郎はあの夢に見た不幸ないろくの玩具が心配になつてならないので、お母さんにお願ひして、街の玩具屋へ調べに連れて行つていただくことをお約束しました。

あの、かなしくもいぢらしい玩具——夢に見た犬や馬や帆前船や西洋館は何うしてゐるでせう？

(をばり)



どりヶ峠

川口平一郎

柳田 隆 吉 露

「普通、或る山里に一人の獵師が住んで居りました。獵師は毎日山へ蛇を打ちに出かけ、多くの蛇をふくろに入れ腰にさげて歸つて来るのでした。獵師は何時も其の蛇を味噌に三年間つけ通して、それを食べてをりました。」

獵師には、なりと云ふおかみさんがありました。おかみさんは自分もあの蛇を食べたいと思つてをりましたが、獵師が食べさせてくれません。

何時もおかみさんは、

「どうか、私にも食べさせて下さい」と獵師に頼みますが、獵師は、「何んだ、女なんか食ふ物でない。」と食べさせませんでした。

或日の事、獵師は何時ものやうに山へ蛇を打ちに行きました。おかみさんは此の時とばかり、獵師の止めてない蛇を食べ始めました。

いや、そのうまいこと／＼おかみさんは、もう夢中で食へるのでした。

「おかみさんはふと、非常にのどかわいて来るのを覺えました。そしてどからは火が出さうでした。大急ぎで、井戸端に飛び出たおかみさんは、かめの中の水をすつかりのんでしまひ、井戸の水をのみほし、しまひには家の前を流れて居る大きな川へ口をつけてのんで居りました。」

獵師は其の時、ちやうど山から歸つて来て、「なり今かへつたぞ」と門口で言ひました。しかし何の返事もありません。何時もならそう言ふと迎ひに出て来るのが、今日にかぎつて出て来ませんから、又

「おいへ歸つた」と、今度はどうなるやうに言ひました。然し又何の返事もありません。獵師が不思議に思つて家に入ると、大切な蛇の味づけが空になつてをりました。が、それは三年たつたのではなく、未だつけかけの味づけが無いのでした。獵師は大變驚きました。すぐ外に走り出て、四方をなつと見つめました。少しもそれらしい姿をみとめませんでした。

ふと獵師は前の川に眼をうつしたとたん、あやふく、

「きやッ」と云はうとして、口をおさへました。

それもそのはず、そこには聞くさへ身の毛がよだつ程恐ろしい大蛇が、川水をしきりにのんで居るのではありませんか。そしてそれが、自分の妻であることを知つた獵師の驚きも無理はありません。

やうやく氣を取りなほして、「お、お前は俺の止めておいた蛇

を食べたのだらう。おれの言ふ事を聞かないから、とう／＼恐ろしい大蛇になつてしまつたのだ」と言ひました。

大蛇はそれを聞くと、たゞ首をたれて、淋しさうにぬるり川へ入つて、其のまゝ消えてしまひました。

けれども私の話はまだつゞきます。

さあ誰云ふと無く、獵師のおかみさんのひやうばんがげつと廣がりしました。しかしそれも半年もたちますと、誰も云ふ者が無くなりました。

「X X X」

そんなことがあつてから、二年と、遂に三年の年月は水のやうに過ぎました。

或る日の暮れ方一人のあんまさんが大きな峠へ通りかかりました



「あれ／＼」と云ふ聲が聞えまします。

「あ、あまりつかれたので、隣の國造様と云ふお家で休んで居りました。あんまさんはあまりいたくつなので、しやみせんを取り出して彈いて居りました。すると、「これ／＼」と云ふ聲が聞えまします。

「俺は此の峠を七巻半巻いてゐる大蛇だが、俺もちやうど今から三年前は、或る獵師の妻であつた。ところが獵師の食ふなと云つてゐた蛇の味づけを獵師の居ないうちに食べたので非常にのどかわ

いて、遂に川に口をつけてまで水をのんだあげく、恐ろしい大蛇になつて川の中へ入つてしまつたのだ。しかしおれには、日に三度の苦しみがあつて、其の苦しさはとても人間には想像もつかない。だが、人を食べればその苦しみが一日だけは逃がれることが出来るのだ。それで俺はお前を食べようと思つたが、お前の彈いた其のしやみがおまりよい音をだしたのでお前だけは助けてやらう。それから俺は、この峠を七日七夜のうちに引きぬいて池をこしらへ、そこに住むのだ。それだから、こゝら十里四方は泥の湖になる。お前はすぐに出かけて、七日の間、早く峠から十里四方以上の所へ遠ざかつて死なぬやうに行け。然しこのことは誰にも言ふな。もしお前が言つたりすると、お前の體は



童謡

野口雨情選

(大人篇)

河原の石(賞)

湊 一訓 (東京)

河原の石は
だあれが積んだ
あの子も積んだ
この子もつんだ

河原の石を

拾って積んだ

おひとツニツ

数へて積んだ

碓の塔は

いつまで残る

河原の日暮れ

お月さま見てた

仔牛(賞)

澄田 郁(わか山)

牧場で仔牛が
生れたよ
白と黒との
斑らだよ
みんなで急いで
見ておいで

角なんなくなつて

かあいよ

お母さんのお乳

のんでたよ

お月見

山岡 静子 (岡山)

ののさまとつちと
小聲でさげば
可愛いお手々で
お空を指した
母さんと二人で
お月見しましよ
お屋根の上から
お月さんも見てた
ののさまとつちと
も一度さげば

お乳のみのみ

お乳を指した

鳩さんおねね

村山俊太郎 (山形)

鳩さんおねね
今夜は月夜
月夜の雁は
かぎになつて渡る
鳩さんおねね
しづかにおねね
雁 雁ながめて
ほうほうおねね
みぞれ
青柳 花明 (群馬)

山から降つて来た
山茶花の花が
みぞれに揺れる
こんこんみぞれ
里まで降つて来た
雀は親子
みぞれに濡れた

小鳥屋の小鳥

名方 和郎 (大阪)

小鳥屋の小鳥は
籠の中
一日お空を
眺めてた
青空見ても
飛ばれない
故郷戀し

親戀し

啼き啼きお空を

眺めてた

いたち

綾子 (岐阜)

垣根の赤い

ほうせん花

馳や横目で

ちよいと見て行つた

きれいな花だと

ちよいと見て行つた

鈴虫

吉村 光雄 (東京)

青い月夜の
枯れすつき

鈴虫や

リンリン

すきのお山



鈴ふつた
鈴は何鈴
銀の鈴

リンリン

ふつた

鈴ふつた

お月さん

川口 洋 (東京)

ふくろが
啼くころ
日が暮れた
お城の
森には
月が出た
ふくろは
森から
月見でた
十五夜
お月さん

まんまるだ

すゝき

西岡さかえ (長崎)

河原に日暮れて

風が吹きや

すゝきの枯穂が

揺れてゐる

日暮れて河原に

月が
出りや

すゝきの穂影が

揺れてゐる

日暮れりや笹やぶ

東 あきら (大分)

日暮れりや笹やぶ

さあさら

風にゆられちや

さあさら

雀は寝れない

ちつちつち

雀のお宿は

やぶの中

お宿がゆられちや

さあさら

雀は寝れない

ちつちつち

すゝき

岸 文二 (東京)

すゝきが

呼んでる

山から

ホイ

手まねき

してゐる

細い手で

ホイ

山から

呼んでる

すゝきが

ホイ

お月様

田宮 敵 (山形)

お月様

いくつ

お年はいくつ

坊やは

五つ

指の數

お月様

何見て

笑つてる

坊やは

お月様

眺めてる

雀の子

森 ほたる (愛知)

かんかん照りの

雀の子

日暮れになつたら

又おいで

日盛やお家で

お休みな

行水してから

又おいで

五郎正宗保稰天

一、お秋は五郎が家出をしたときいて、『あ、これでまつばりした、あんな憎い子が居なくなれば溜飲が下つた。氣持がするよ』と涼しい顔なしてゐました。



三、つぎ倒されたながらも『お祖父さまがお怒りになつておいでになるかもしれせんから』と勞れた聲を振りしぼりながら云ひも終らぬうち



二、ところへドクドクと云ふ足音と共に五郎が飛込んで来て『お祖母様、早くお逃げなさい早く〜』と、お秋は急いで肩を逆立て、『何なこの思知らすめ、云ふのになかなかへて、この姿を追ひ出す氣だらう。お前の顔なんぞ見るのも』



四、コリヤお秋、其方はよくもよくも、孝養をつくす五郎を死なせやうとしたナ、畜生にも劣つた腐つた根性の其方、今日といふ今日は勘辨ならぬ、引渡してやるから量悟し



五、お秋はアツと
 驚く間もなく眞二つに
 さらやうとしたとき、
 『アレお祖父さまッ』
 と五郎が身をもつてか
 ばひましたからたまり
 ません、五郎の肩に切り
 つけてしまひました。

六、五郎は強にも快まず
 『お祖母様早くお逃げ
 なさい、お祖父さま私が
 悪いのです、どうぞお祖母様を
 辨しておけて下さい』と血に
 染れながらも河士に取纏
 つてたの
 しま
 た。

七、この有様に流石のお秋も我を折
 り悔惜の涙をハラハラ流して、
 『オ、五郎、勘忍しておくれ、
 お前を憎んでゐたのは妾が
 悪かつた。妾故にこの重
 傷を負はせたと思へば、
 お祖父様のお手にかゝらうとも
 お前を見ずして、逃げられませ
 ん』と本心に歸つて介抱し
 てなりました。

八、お祖父様の郷士は憎いと思ふお秋を斬りそこれて可憐な
 五郎に重傷を負はせ
 ましたの
 で、ガツカリ
 してしまひました。

九、お秋が生れかばつたやうに改
 心したのを見届けた郷士は、
 『コリヤお秋其方の命の
 あるのは五郎のお蔭ぢや、
 それを忘れず、これから五郎を
 可愛がつてやれ、今日だけは
 許してやる』
 と刀を鞘
 におさめ
 ました。

十、それ以来お秋は
 五郎を我子も及
 ばぬやうに介抱
 しました。
 五郎もお繼
 母さんの
 本心に
 立歸つ
 たよろこびが
 手傳つたか×
 ×さし
 もの傷
 も程な
 く癒え
 ました。

十一、五郎の孝心は
 遂に一家を圓滿に
 して少しも風波が
 なくなりました。孝心に
 厚い五郎の刀鍛冶の仕事に熱心
 なことは申すまでもなく
 十八歳のときに、父から鍛
 冶の秘意をつたへられました。

十二、諸國を巡つて鍛冶を研究して
 益々技術が進み朝廷の
 御番鍛冶を勤め
 ました。
 五郎正宗と云へば
 誰知らぬ者もない名工で
 あります。
 (おはり)

怪彗星

三井信衛
寺内七郎画



(前號までの梗概)

怪しい大彗星が地球に衝突して世界が滅亡すると云ふ事實が確定したため、世界各国は恐怖に鎮されてゐた。天文學者の牧村氏は二十年間の苦心によつて、火星へ航行する不思議な航空船を發明し、地球の危険から逃れようとしたが、時は既に彗星との衝突の間近くにあつたため、折角の航空船も二変より建造出来なかつた。しかも一夜何者かのために一臺は破壊され、牧村氏「無残の機死をした。又、残る一臺は早くも何人が乗せて火星へ出発してしまつた。やがてその犯人は、牧村博士の助手大河原で、彼とその友人の二人が、某伯爵家の家寶である紫色のダイヤを盗んで、火星へ逃げたことがわかつたが、彗星との衝突の日、爆破されたと思つてゐた航空船が高熱に耐ゆる装置があつたために使用に耐へる事がわかり、牧村氏の遺族は地球を去つた。その時丁度、彗星が月に衝突した。

九、扉は開いた

正隆が退くと其後へ玲子が、玲子が退くと直ぐにお母さんが、と云ふやうに代る代る望遠鏡を覗きました。だが、もう一寸眺めるだけで、三人共到底一秒間でも、見つゞけてゐる事は出来ませんでした。まあ、何といふ怖しい景色でせう！月に衝突したメンジュラ彗星は、その儘で月の周りを大輪を描いて廻り出しました。引力の作用で、輪を描いて廻つてゐる中にその彗星の尾が、全く月を包んで、月と彗星と、それが恰ど一つになつたやうに、ぐるり、ぐるりと廻

轉し始めました。

「お母さん」暫くして正隆が、恐ろしさの中にも、嬉しさを單めて叫びました。「御覽なさい。地球が見えますよ。地球は無事だつたんです。はつきりと圓く見えてるですよ。」

お母さんと玲子が望遠鏡に眼を當てると、

「まあ」と叫んでしまひました。

「地球が見えますわ。地球が……」

「球萬歳！地球は無事だ！」

航空船の中で、三人は小躍りをしてしまひました。學者達の考へは、只理窟ばかりで、かう云ふ思ひがけない奇蹟の起ることには、少しも豫想がつかなかつたものと

見えます。

地球と衝突するついでに、思はぬ作用で彗星の軌道は、月の引力に曳かれて、少し反れたのです。天文學にはアリスの二星説と云ふ學理があつて、畧同じ容積の二つの星が、お互ひに衝突をすれば、きつと一つの星になると云ふ理論を、物理學上、化學上、宇宙形成學上、その他の學問の上から證據をあげて説いてみます。果してその學理が正しいか正しくないかは別として、ともかく月に衝突をした彗星は、そのまゝお互ひの引力で曳き合つて、二つの凸凹から成つた一つの塊りとなり、彗星の尾も月に沿つて、だんだんと弓なりに曲つて來ました。つま

りアリスの二星説に従へば、これは二つの星が一體にならうとする最初の状態だつたのです。

がさう言つてしまへば、何の雜作もありませんが、若し此れが地球だつたら何うでせう！望遠鏡で見ると、月にも彗星にも恐ろしい土地の割目が、衝突の瞬間、縦横無盡に出來ました。同時に二つの星の境目からは、青白い焰が炎と上つて居るのです。此れが地球だつたら、土地の陥没と隆起に伴れて、前古未曾有の大地震は起り、全ゆる都會はその陥没の中に埋まり、そして全ての人々は、彗星の尾の毒瓦斯體によつて、窒息をしてしまふのです。

「ね、正ちゃん」何故かお母さん

は、昔呼んでゐた正ちゃんと云ふ名で、正隆に聲をかけました。地球の無事を知つてつい安心をしたので、思はずそんな言葉が出たのでせう。

「何？ お母さん……」

「もう此の邊は、地球から何の位離れてゐるのでせうね？」

「さうですね。何しろ月に行くまでに、一週間はかゝると云ふのですから、さう遠くへは來てゐないと思ふのですが。」

「何うだらうね、今の中に地球へ引き返す方がいゝだらうか？」

「さうですね、地球はあの通り無事のやうですから、引返すことにしませうか……」

「ちや一時も早く歸りませうよ。」

「え、」とは言つたものゝ、正隆はすつかり困つてしまひました。航空船を動かすことは、父に聞いてゐましたが、その方向を換へるのは何うしていゝのか、さつぱり見當がつかせませんでした。此の儘月へ飛んで行つたなら、どんな怖しい目に會ふか、解り切つた話です。さあ大變！

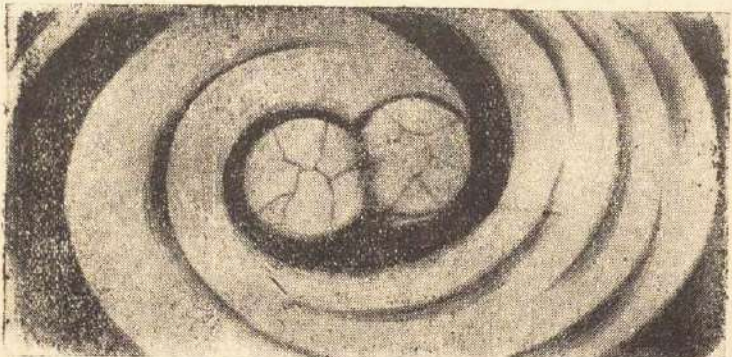
「正隆、もう方向を換へたの？」

「え、もう換へました。」

二人に安心をさせるために、つい正隆は嘘を吐いてしまひましたが、もう氣が氣ではありませんでした。

「この鈕を押したら、いゝんだらう。」

さう思つて、真中の鈕を押すと



方向が變ると思ひの外、天井の電燈が點りました。

「あら、お兄さんは機械の事が詳しいのねエ。玲子は切りに感心しましたが、正隆の方は電燈を點さうと思つて點じた譯ではないので」「うむ、それやもう兄さんはね、機械の事つたら、とてもそのう詳しくてね。」と言つてドギマギしてゐるのです。

「さあて、この鈕を押すと……」後はそのまゝ黙つて、上の鈕をそつと恐さうに押しますと、今度は横に置いてあつた樽から、ちゆうツと飲料水が出來ました。

「と、水が出来るんだよ、玲ちゃん何んなもんだ！」

「まあ、お兄さん、本當にお上手

ね。」
お母さんも玲子も咽喉が乾いてゐたので、くつくつと咽喉を鳴しながら、その水を飲みましたが、正隆はもう気が氣でないで、思ひ切つて上の方の釘を押すと、樽の水は止りましたが、その代り三人とも、あれつと叫びました。
三人共風船のやうに、急に身體がふわり、ふわりとして、天井に上つたり倒とんばに廻つたり、大變な大騒ぎになつてしまつたのです。

「あれつ、お兄さん、助けて！」
「ま、正隆、目が廻る〜」
「ぼ、僕だつて、とても、釘に手が届かないので、わあつ、助けてくれつ！」

しみじみと、今更に亡き父を憶ひ出して居ました。その食物の中には、正隆の好きなバイナツブルの罐詰も、さては玲子の好きなフレッシュメキストも、皆な入つてゐるではありませんか。しかもその食料庫は食物の腐らないやうに、最新式の設備がしてあるのです。
食物！ 食物！ それさへあるならば、もう此の儘一直線に、目的の火星へ進んでも、何の心配することもないのです。

正隆は急に勇氣を盛り返して、彼方此方と機械を弄つてゐるうちに、方向舵も何も、全ての使ひ方が解るやうになりました。
「お母さん、火星へ進ませよう。」
正隆が言ふと、今は二人も亦、

「助けて！」
さあ、もう大變な騒ぎ！ 此れは此度、必要な場合に、外の壓力と中の壓力とを平均させるために此んな装置がしてあるのでせう。上つたり下つたりして、聲を立てて居るうちに、正隆が手を伸して手當り次第に釘を押すと、今度は「さやつ」と言ふ間に、三人一絡にどすんと床に落ちてやつと助かりました。が、その時です。正隆がふと床の上を見ると、そこに一つの釘があつたので、恐る怖る押して見ました。
その瞬間！ がら〜と、一種異様の音がしましたが、その音の方を眺めると三人とも言ひ合したやうに、「おや！ おや！」と叫

強く〜、背くのでした。窓の外は次第に明るくなつて來ました。もう一夜は明けたのです。
そして又その日は暮れました。彗星と月とは、やつぱり一塊りのやうになつて、その尾はすつかり月を包んでゐます。
火星へ！ 航空船は一分間正確に一千哩の快速力を保つて、火星へ〜と進んで行くのでした。

十、光、匂、聲

最初の間こそは、窓の外に見える空の景色を、何とも云へない珍しさで眺めてゐました。けれど一月二月と経つて行くと、もう逆も退屈になつてしまひました。

んだのでした、
今までは、鐵の仕切りだと許り思つてゐた一方の境目が、折り疊んだやうに卷き上つたのです。その向方は庫のやうになつてゐて、そこにはビスケットやパンや罐詰や、三年でも五年でも餓えないやうな、たくさんな食料品が詰つてゐるではありませんか！
「やあ！ 食料品だ！」
「まあ！ ちやんと食物があつたんだわ。」二人も目をさよろ〜と睜つて言ひました。
「これはお父さんが、月世界へ試運轉をするために、ちやんと用意をしておいたに違ひありませんよ。」
正隆がさう言ふと、母も玲子も

地球にゐた頃は、何うかして近くで見たいと思つてゐた、色んな星も、目的地の火星は無論のこと輪のある土星でも、光の殊更強い金星でも、次第々々に近づいて、實にそれこそ口でも言へない美しさでした。殊に彗星と月との一塊りを眼の前で眺めた時は、實際壯觀と言ふより譬へ方もない程でした。

でも、毎日々々、そんな星ばかりを見てゐると、不思議にも、だん〜と吐氣を催すやうな氣がして、自分で自分の身體ではないやうに感じて來るのです。それは「星病」とも名づけるべき一種の病氣でした。その原因も療法も固より一切解りませんが、その吐

氣の後には、ついぞ地球では覺えた事もないやうな、恐ろしい退屈を感じました。さうして晝の中は奇妙にそれが癒つてゐて、星の光が見え出して來ると、妙に又吐き氣が起つて退屈になつて來るので

す。然しだん／＼と日が經つて行く時、身體に抵抗力が出來たせゐか追々健康になつて來ましたが、その代り又今度は、病氣ではない本當の退屈が、三人を襲つて來たのでした。今はもう正面に見えてゐる火星が、一日々々と近づいて來るのを待つ外に、何の楽しみも慰めもありませんでした。長い／＼三年の旅、何うして三

人はその退屈を紛はしたか、地球で覺えてゐた全ゆる遊戯を、盡くやつて、それを又初めから繰り返した時は、やつとまだ一月目でした。繪を描くにも鉛筆やクレイヨンもないし、ランプをするにも骨牌はないし、もうお終ひに三人は、欠伸ばかりして暮してゐました。

が、恰度、春か夏かは分らないが、二年目になつた頃から、この三人の退屈が、そろそろと元の喜びに變つて來たのでした。もう晝間でも眼の前に、火星の薄紫色の圓い形が、直径三尺ほどに、可成りハッキリと、見え始めたからです。さうして二つの月も、右と左に見えてをりました。火星には月

が二つあるのです。「お母さんも玲子も、一寸望遠鏡を覗いてごらんさない。」正隆は言ひました。

望遠鏡を覗いて見ると、火星の都會や運河や森や山が、手に取るやうにレンズの中に映つてをります。お、その都會の美しいことつたら！まるで水晶宮のやうでした。さうして太陽の反射の加減か、至る處の土は、紫色に輝いて居るのでした。

日一日と航空船は進んで、愈々もうあと十四日で火星に着くこととなりました。さあ、さうなること三人はもう以前より何倍も／＼、航空船の中で飛び歩いて、「ね、お兄さん。火星へ着いたら



何う云ふ風に挨拶したらいゝんでせう？」玲子は、さう訊くのでした。

「さあ、(今日は)と云ふのも變だな。」
「でも私達は日本人ですもの、立派に日本語で挨拶をしたらいゝでせう。」

三人がそんな事を話してゐるとその最中に航空船の一端から、不意に不思議な人間の聲がしたので

す！
「おや？」三人は彈かれるやうに立ち上つて、その聲の方を眺めました。

「やア！無線だ！」正隆は叫びました。
今までは一向氣にも留めません

でしたが、航空船の一方には、ちやんと無線の装置が施して、擴聲器も又放送器も取附けてあつたのです。

「ジジジ、ジイ……」と暫らくの間はそんな音がして、それから突然に、餘り上手ではない日本語で一語づゝ離して、

「チ、キュウ、ジン、カン、ゲイ！」

「お母さん！」と正隆は叫びました。「火星から（地球人歓迎）と放送して来たのです！」

「地、球、人、歡、迎！」

「あッ、又聞えた！ 萬歳、萬歳！」もう正隆も玲子もお母さんも手を取り合つて萬歳を唱へてしまひました。

「それにしてもお母さん、何うして火星の人は、日本語を知つてゐるんでせう。火星人は全く賢い人が集つてゐるんですね。」

「地、球、人、歡、迎！」

「そら、又聞えた。正隆、此方からも何とかお返事をしなさい。」

お母さんから言はれなくとも、

もう正隆は無線の放送器に、ちやんと口を當てゝゐました。色々波浪長を合せてゐるうちに、正隆の言ふことが向方へ通じたのか、

「火、星、人、萬、歳！」と言ふと、

「地、球、人、萬、歳！」と向方からも返事を送つて來ました。

正隆は生れてから十五年、こんなに嬉しかつたことは一度もあり

ませんでした。嬉し過ぎて、何だか嘘のやうに思ひました。

もう火星は直径三間程の大きさになつて、直ぐ眼の前に見えてをりました。近づくにつれて氣流の關係からか、少しづゝ航空船が揺れて來ました。

望遠鏡で眺めて見ますと、それが恐らくは火星の首府でありませう。何とも彼とも想像も出來ないやうな、美しい水晶型の多角形の家々が、規則正しく建ち並んでゐました。その家々は全て厚い硝子で出來てゐたのです。

「お母さん、僕は地球にゐる頃、アメリカの何とか云ふ建築家が、太陽の光線の流通をよくするため、家を硝子で建てることを發明

したと新聞で讀みましたが、もう火星ではとくの昔から實行してゐたんですよ。」

「本當にまア、何といふ文明の進んだ國なんぞせう……」若しもこの有様を、死んだ牧村博士に見せてあげたら、どんなに喜んでであらう……母はそのときつとさう思つてゐたのでせう、母の眼には微かに涙が光つてゐました。

夜になるとその硝子の家に、様様の灯が點いて、ぼつと七色の虹が映り、天然イルミネションが出來上つてをります。時々雨が降りましたが、まるで震氣樓のやうに、その家々の恰好そのまで、七色の虹となつて空に浮んで來るのでした。

火星からの無線電話は、ひつきりなしに送られて來ました。時には、永い間の旅で、退屈してゐるだらうと察してか、美しい火星の音楽を、放送して來ました。そればかりではありません。どういふ科學の力によつてか、時々その受話器から、色々の匂ひを送つて來るのでした。

薔薇の匂ひ、百合の匂ひ、櫻草の匂ひ——いゝえ、それは地球の花々のこと、私たちが曾て一度も嗅いたことのないやうな、火星の森に咲く美しい花々の匂ひを、一つ一つ、一分置きくらゐに送つて來ました。それはまア何と云ふ高い薫り！ その匂ひの放送が止んでからも、正隆始め二人の身體に

は、何時までもその薫りが残つてゐるくらゐでした。

すると又それが濟むと、同じ無線の受話器から、一筋の光が漲つて、航空船の一隅に映畫を寫したのでした。

「おやッ!? 活動寫眞！」

二人はもう全り驚いて、お互ひにちろ／＼と、顔を見合してばかりゐました。先づ一番初めには、ちやんと日本文字の字幕で、

「地球の無事なりし事を祝す。」と映りました。あゝ、火星の科學文明は、何といふ進んだものでせう！ 牧村博士の言つたことは決して／＼嘘や偽りではなかつたのです。

「火星の首府ラゴ市の光景。」

その次にさういふ字幕が出る
やがてラゴ市の有様が映り出しま
した。

道路の廣さは、東京の十倍以上
はあつて、そこを通る人は、地球
人よりも背は低くて、その代り大
變頭が大きいのでした。それから
奇妙にもその頭が、大抵は禿げて
ゐました。これは非常に頭が發達
してゐて、又その頭を餘り使ひ過
ざるので皆禿げてしまふのです。

「火星は幸福の國であります。火
星には戦争もありません。天災も
ありません。人は皆正直です。そ
して季節は春秋の二季です。」
その字幕が消えると、今度は又
三人が、すっかり聲をあげて驚い
てしまつたのでした。今度映つた

ものは、最近の東京市の光景だつ
たのです！ 次に字幕がかう映り
ました。

「御安心なさい。あなた方の故郷
は、この通り何の變りもありませ
ん。ほんの少數の死傷者を出した
だけで、地球全體の危機は無事に
去りました。そして地球の夜は、
以前より倍も明るくなりました。
その譯は、彗星と月とが一體とな
り、月光が以前の約二倍弱となつ
たからです……。」

以前より二倍も明るくなつた地
球の夜！ その不思議な形をした
大きな月が、町の上に照つてゐる
有様を三人はちつと目に浮べて見
ました。
「正隆早く火星へ行きたいわね。」

「もうあと一日で着きますよ。」

「えッ、一日で……。」

「え、明日の夕方着きます。後
一日で、美しい都へ着くのです。」

と、その時でした。映つてゐた
映畫が消えると、次には又擴聲器
から流暢な聲が聞えて來ました。

「牧村さんの御一家！」

「えッ!?……」正隆は素速く、放
送器に口を當てました。

「火星人は貴方がたを、心から歡
迎してゐます。火星の科學は進ん
ではゐますが、未だ地球に向ふ航
空船は、發明されてはゐないので
す。火星人は全て、牧村さんに敬
服してゐます。僕は火星人に日本
語を教へ、御一家の旅情を慰める
ために、映畫や匂ひを送らせたの

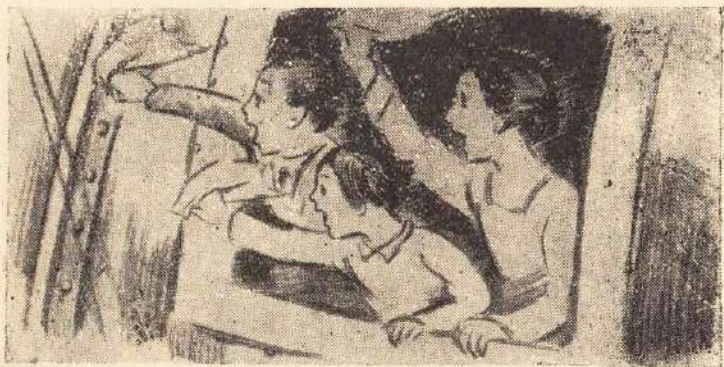
でございます。

「え?! あなたは誰です?」

「おゝ! 正隆さんでしたか……
どうぞお許し下さい。僕は……そ
の先生の御恩を仇で返した、大河
原……大河原でございます……」

お、確かに大河原の聲でありま
した! 忘れもしない助手大河原
の聲! その聲が深い悔悟と哀し
みに慄へてゐるのが、敏感なアン
テナを通じて、細くはつきり聞え
て來ました。

「正隆さん、あなた方が火星へお
越しになりましたら、直ぐに私は
地球へ引返して、私の罪を名乗つ
て出る覺悟でございます。私は伯
爵家の紫ダイヤを盗んで、あな
たより一足先に此の火星へ來たの



でございます……」

大河原の聲は、まあ何と云ふ哀
しみに充ちてゐたのでせう! 玲
子と母も擴聲器の前になつと近寄
つて、一心に耳をその聲の方に傾
けました。

「今私はもう、一思ひに自殺をし
てしまひたい程、胸の中は苦しみ
と、悔でいつばいでございます。」
涙を流して鼻をすする音までが、
いゝえ、その荒々しい呼吸使ひま
でが、はつきり聞えるのでした。

「……紫ダイヤ……、あ、紫ダ
イヤ!……私があなたのお父さん
に害を加へましたのも、私が航空
船を盗んで逸早く逃げましたのも
皆、紫ダイヤが欲しかつたから
でございます。そして私はそのダ

イヤを火星へ持つて来て、高い高いお金で賣らうとしました。けれども、何と云ふ運命の悪戯でせう！この火星と云ふところには、その紫ダイヤが至る處にあつて、地球では容易に得られない貴い寶石として一個何萬圓とする紫ダイヤが、火星では只つた一厘にも價しないのです。

正隆さん、火星の砂は全て、紅と紫のダイヤから出来てゐるのです。

「え？」

三人は同時に叫びました。

「若し、その火星の砂を再び航空船でどしどし地球に運んだならば、地球のダイヤモンドの値打ももう話にもならない程下つてしま

ふのです。幾ら探つても、火星にはダイヤが盡きません。あ、私は、言はず只一握りの砂のために、重い罪を犯して我身を亡した愚かな男でございました。

人間の罪は、どんなに用意周到に企らんでも、きつと何時か何處かで、露れるものでございます。地球が滅亡して、私の犯した罪が秘し終せるものと定めてゐたのも思へば何といふ愚かなことぞいたしましたか……」

そして大河原の、悲しい告白は終つたのでした。何時までも三人は黙つてゐました。大河原の嘔り泣く聲は、やがて、耐へ切れない嗚咽の聲に代りました。その聲は微かとなつて消えて行きました。

ほのぼのと夜は明けました。三人が航空船の窓を勢よく開けて、外を覗いて見ると、空気がもう十分あつて、強い陽の光に、火星の砂は紅く紫にきらきらと輝いてゐました。

「お兄さん！」

不意に玲子は叫びました。

「火星の光が地球から赤く見えるのは紅や紫のダイヤがあるからに違ひないわね。」

二人は強く肯きました。火星からは歓迎のために、七色の電光を直ぐ目の前に照しました。

三人はハンカチを出して、窓の外から、ひらりと振つたのでした。

(完)

晝螢 (推薦)

大阪 古村 徹 三

もうさう藪の
くらがりに
誰だよ ちんがり
こもすのは
——あれは山田のひる螢

風が吹くたび
葉がゆれて
消えたり ついたり
ちらちらよ
——涼しい日ぐれになりました





鈍馬のヤーン

菅 忠 雄
岩岡とも枝 畫

一一〇

寡婦のマリーは、森の側に小さな鳥を持つてゐました。飼牛は乳をどつさり出すし、牝鶏も毎日卵を産むので、マリーは氣樂に呑氣に暮して行くことが出来たのですが、たゞ一つ悲しみの種となつたのは一人息子のヤーンでした。近所の人々から「鈍馬のヤーン」と云ふ仇名で呼ばれてゐるヤーンは、まことに心持の素直な親切な子供だつたのです。いつも一生懸命でお母様のために働いてゐましたが、然し

少々考が足りなかつた事は事實でした。或る朝、マリーは息子に言ひました。「ヤーン。妾は今日鳥で手が放されなから、お前代りに市場へ行つて、この籠の卵を賣つて来てお呉れ。」ヤーンは母から卵の籠を受け取つて、「あゝ行つて来るよ。お母さん。僕うんと好い値段で賣つて来るよ。」

「途中で道草を食つちやいけないよ。こわさない様によく氣をおつけ。」

母の聲を後に、ヤーンは籠を提げて、家を出ました。こんな大任を授けられたのでヤーンは得意でした。で、いつもの様には、飛んでゐる小鳥にも、胡桃の樹の下に落ちてゐる胡桃の實にも、眼をつけませんでした。市場につくと、いつもお母さんの陣取る場所に籠をすえて、お客を待つてゐました。しばらくすると、一人の男がやつて来ました。そして、

「お前さんの卵は新しいかね？」と尋ねました。

「新しいも何も、皆今朝生みたての卵ですよ。」と、ヤーンは答へました。

「わしはその卵を皆買はうと思ふが、その前にいゝ卵かどうか一つ驗して見たいのだがね……。」と男は言ひます。

「ちやこれ一つ割つてごらん下さい。僕の言ふ事

に嘘はありませんよ。」

男が卵を一つとつて割つて見ますと、驚いた事には、黄味の代りにピカ／＼光る金の塊が入つてゐるのです。男は素早くそれをポケットの中へかくしました。ヤーンはチラとそれを見てとりました。ですがヤーンは何か眼の間違だらうと思つて「もう一つ割つて御覽なさい。」と言ひました。男が割ると今度も太陽の様に眩ゆく輝く金塊が、黄味の代りに入つてゐました。ヤーンは眼をまるくして、口をぽかんと開いてゐます。

「お前さんの卵は仲々美事だ。値段はいくらかね。俺はみんな買ふよ。」と男は申しました。

「いゝえ、小父さん。卵は賣りませんよ。」とヤーンは焦氣となつて申しました。

「そうかね、それならばそれでいゝ。御免よ、小僧さん。」と言つて、その男は妙な笑ひ方をしながらむかふへ行つてしまひました。

一一一



「うまいぞ、この卵には皆金が入つてゐるのだ僕も大金持になれるぞ。」

ヤーンはホクホクもので、人の来ない隅つこへ行つて卵を片つばしから割りました。所が金

らしいものゝ影さへなく、黄味はみんなあたり前のドロ／＼した黄色い汁でした。

「え、糞！ ちや僕はだまされたのだ。さつきの奴は悪い魔法使に違ひない。あ、僕は家へ歸つてお母さんに何んと言つたらいいだらうなあ。」

ヤーンはすつかり落膽してしまひました。そして

食べてしまひました。

しばらくしてヤーンが眼をさまして、麥束をとり上げると、實がすつかり失くなつて、残つてゐるのは藁ばかりです。

「アーン。麥の實がなくなつちやつた。藁ばかりになつちやつた。アーン。」とヤーンはボロ／＼涙を出して泣き出しました。所が鶏の持主が、自分の鶏が皆腹をふくらまして歸つて來たのを見て、さつとあすこで泣いてゐる子供の麥を食べたに違ひないと思ひました。そこで牝鶏を一羽ヤーンにやりましました。そしてそれを賣れば、麥を賣るより餘計にお金が儲かると言ひました。

で、ヤーンは直ぐに機嫌を直して牝鶏を小脇にかかへて、市場へやつて來ました。例の所へ陣取つてゐると、又昨日の魔法使がやつて來て、

「今日は、いい牝鶏だね。」と聲をかけました。

「しほ／＼と家へ歸ると、泣き乍ら母にありのままを話しました。」

「マアお前は何と言ふ大馬鹿なんだらう。一體牝鶏が、金を産むなんてことは、どこの世界にあるものだ。お前は魔法使に一ばい喰はされたんだよ。こんなちや、お前には何一つ頼まれないから、どんなに忙しくたつて妾が市場へ行かなくちやならない。」とお母さんは機嫌を悪くして申しました。

ヤーンは今度こそは騙されないから、もう一遍やつて下さいと頼みました。それでマリも仕方なしに、町へ行つて一束の麥を賣つて來る様に言ひつけました。麥の束は、大して重くはありませんでしたが、その日は焼けつく様に暑い日で、道も可成長い事とて、ヤーンは、とある生垣の蔭で一休みしました。するといつの間にかぐつすり寝込んでしまひました。その間に近所に餌をあさつてゐた鶏の群が、ヤーンの麥束を見付けて、忽ちの中に實をすつかり

「だがこれはお前さんにや賣らないよ。早くあつちへ行つてお呉れ。」とヤーンはぶりぶりし乍ら答へました。

「それは残念だなあ、だがこの鶏は、わしには素晴らしいものを生みそうな氣が



するよ。一寸見てゐて御覽。」

魔法使はこう言つて牝鶏の腹をさすると、ピカピカする金の卵がいつか、魔法使の手に握られてゐました。

「返しておくれよ小父さん。その卵は僕の卵だよ。」とヤーンはびつくりして叫びました。

「一寸お待ち。まだ出そうだよ。」こう言ふ中にも、また一つ金の卵が男の手に輝いてゐます。

「僕の卵だ。僕の卵だ。返しておくれよう。」とヤーンは泣聲で叫びました。が男は素早く人込みの中に紛れこんで姿を消してしまひました。でヤーンも諦めて獨言を言ひました。

「僕の牝鶏のお腹には金の卵が一ぱい入つて居るのだ。一つお腹をさいて出してやらう。」

で早速市場を出て途中で牝鶏を殺して腹をさいて見ました。所が金の卵はどこにも見出すことが出来ませんでした。また騙されたヤーンは、しほれて家

へ歸つてお母さんにこの事を話しました。

「ほんとにお前はまあよく／＼の馬鹿だよ。」「鈍馬のヤーン」なんて人に言はれるのも無理がないよ。もうお前には何にも頼まないよ。」

お母さんは、腹立ちまぎれにこう言つて、叱りました。でもヤーンは今度こそはきつと誰れにも騙される様な事をしないと誓ひました。

お母さんは大變ヤーンを可愛がつて居ましたので機嫌を直して申しました。

「それちやヤーン。このお錢で、種麥を十ポンドと子豚を二匹買つて来ておくれ。今度こそ、失策をしてはいけないよ。」

「え、大丈夫です。きつと種麥を十ポンドと、子豚二匹買つて來ます。」

「ちやすぐに行つて来ておくれ。」
ヤーンは家を飛び出しました。そして用事を忘れないために、

「種麥を十ポンドと子豚を二匹。」

と大きな聲で怒鳴り乍ら行きま

した。すると島で働いて

ゐた農夫がそれをきき

つけて言ひました。

「種麥を十ポンドだつ

て、俺の島ぢやその十

倍も入るわ

この鈍馬野郎奴。」可哀想なヤーンは、何をきいても、一番最後の文句丈しか覺えられませんでした。

で、種麥や子豚の事はすっかり忘れてしまつて、「この鈍馬野郎奴。」と繰返し乍ら、進みました。所

が途中であつた一人の將校がヤーンの言ふことをきいて、自分に向つて言つたのだと思ひ違ひをしたから堪りません。真赤になつて怒つて、

「何！俺が鈍馬野郎だつて。この小僧め、どつちが鈍馬野郎だか知らしてくれるわ。」と言ひ乍ら、いきなりヤーンの頬べたを、ピシヤリ／＼と二つ撲り

つけました。そして、「どうだ思ひ知つたか、ざまあ見ろ。いい氣味だ。」

と言ひました。するとヤーンは頭を抑へて、「いい氣味だ。いい氣味だ。」と泣き聲で叫び乍ら逃げ出しました。町に近づいても、相變らず「いい氣

味だ」を言ひつゞけました。

一人の旅人が車の輪を溝に陥して困てゐる傍を通



りかかりました。旅人はヤーンの言葉をききつけて、「この悪性者め！人が困つてゐるのに、助けようともしないで、馬鹿にしてゐるのだな。貴様の性根を直すためにこうしてやる。」と言ひさま、ヤーンの脚に鞭でビン／＼いくつも撲りつけました。するとヤーンは、言ひつかつたこともすつかり忘れてしまつて、また泣き乍ら家に歸りました。母のマリイはこれを見てすつかり愛想をつかしてもう市場へ行くことは頼みませんでした。そしてヤーンには島の番を頼んで、自分で市場へ行く事にしました。

或日の事マリイはヤーンを呼んで、「妾はこれから市場へ行つて、牛乳と卵と雞つ子を賣つてくるから、お前よく留守をしてくれ、牛と鶏に餌をやるのを忘れてはいけないよ。」と言ひつけました。



「そう言やあ、第一番にお城へ入り込んだのは、誰れでもねえ、この俺だぜ。」と三番目の男。すると始めの男が、「所が袋をかついで来たのは俺なんだから、そうなりや俺が一番多く取らなげや詰らない譯だぜ。がこ

て行つて、ウンドコサ首宿を食べさしました。牝牛は新しい首宿をあんまり食べ過ぎて、腹が破れてヤーンが牛小屋へ連れ歸らうとした時には、もう死んでゐました。

ヤーンはたつた一匹の牝牛が死んだのを見て、驚いて、そして悲しみました。お母さんが歸つてから何といつたらいいかも心配でした。仕方がないので牝牛の皮を剥いで近所の森へ持つて行つて、乾す爲に大きな樫の木の上に上りました。そしてフト下を見ると三人の人の悪い男が、金貨の一杯つまつてゐる大きな袋をかこんで何か言ひ合をしてゐます。

「さあ兄弟。金を勘定しようぢやねえか。三つに分けて、みんな同じだけ取るとしようよ。」と一人が申しますと、「いいや、俺らはお前達二人より、餘計取る権利があるんだ。お前達に金の在りかを知らしたなあ、この俺なんだからなあ。」

この所みんなで仲よく同じに分けようぢやないか。」と申しましたが、他の二人はどうしても聞き入れないので、とうとう三人は大喧嘩を始めました。木の上に居たヤーンは、夢中でその様子を見てゐたものですから、つい持つてゐた牛の生皮を落してしまいました。牛の皮は取組合つてゐる三人の泥棒の頭の上に落ちました。泥棒達は驚いたの何の、「ウワツ、化物だ。助けてくれ。」と叫んで金の袋も忘れて、てんでにどん／＼逃げ出しました。

しばらく経つてからヤーンは木の上から下りました。泥棒共は二度と姿を見せませんでした。で、ヤーンは牛の皮と一しよに金の袋を背追つて家へ歸りました。母のマリイにこのことを話しますと、マリイは早速その金の袋をお上へ届けました。ところがいつまで経つても盗まれた主が分らなかつたので金の袋はソックリマリイ親子に下げられました。

それでマリイとヤーンは、永い間幸福に暮すことが出来たと言ふことです。



沖

日高直爾

岡本歸一畫

京太は裏手の石垣に腰をかけた。静かな午後三時すぎの港は、京太の目の前にゆたくと澄み切つた潮水を湛へてゐました。そして向ふ岸の山の色や、崖の赤茶けた色をあざやかに映してゐました。

白い鵜が、岬の方にある捕鯨會社の解剖工場から、鯨の臍の切れつばしを盗んで来ては、衝へたまま飛んでゐました。それから、また、京太の居る岸の近くでは、相もかはらず浚漉船が、ドブン！ガラガラガラガラと、いかにもだるさうに港の底の土を喰ひ上げて、だんべい船の中へ吐き出してゐま

した。しかし京太は、さう言ふ静かな美しい景色が眺めたいので、毎日家の裏に来て坐るのではありませぬ。京太の腫は、いつも、癡乎と港の入口になつたお臺場（昔砲臺を構えてゐた跡）の鼻から離れませぬ。日が暮れはじめると、そのお臺場の角からは、一艘、二艘、三艘、五艘、十艘……と漁船が威勢よくあらはれて來ます。そしてめいめい自分々々の家のうら岸につけます。その漁船の中には、京太のお父さんと兄さんの乗つた船がありました。京太は毎日、お父さんと兄さんの歸つて來る船を石垣にかけて待ちました。

「あ、あれだ、あれだ、あの船だ……おや方角をかへたぞ……なんだ、よその船ぢやねえか……」獨り語を言つてがっかりしてゐると、やがてそのつぎには、京太の家の船が威勢よくあらはれて來ることもあつた。

「おうい、京太ア……」と言つて兄さんが遠くの方から、鮎や鰯や鱒などの大きなのを驚掴みに高く持ち上げて見せますと、京太は手を叩いて喜びました。そして、「お母さア：れうがうんとあつたよ……」と家の方へ駆けてゆくのでした。

「うんとこしよい！」と言つて、お父さんと兄さんと運び上げた鮎一ぱいの魚を、お母さんは、直ぐ

近くの魚市場へ手車で持つて行つて、仲買人に商ひしました。それから、一家は楽しい夕べを迎へました。

京太にとつて、お父さん達が歸つて來る頃から夜になるまでは、何と生き／＼した楽しい時間でしたらう。

——けれども、この楽しい日暮らしはフツツリと切れてしまひました。一家にとつては到底あきらめ切れない、悲しい嵐が突然に起りました。

二

一年中で一ばん賑やかな祇園祭りが來るといふので、この港町の人達は、仕事を休んで、毎日、部落

部落の造り物や飾り物、神輿やだんじりの手入などに夢中になりました。京太のお父さんは、永い間、若い衆の昇ぐ神輿の總代の一人で、大へんな顔さう、兄さんは若い衆の仲間、京太はまだ、小さいので神輿の前綱を曳いてゆく組でした。

祭りの二日前の夜お父さんは、「あしたの朝、俺は一人で行つて何か釣り上げて來るから源は祭りの世話に行け。」と兄さんに言ひました。

「あしたはもう沖には行かなくつてもえ、ちやありませんかの……」お母さんはとどめました。

「お父さんは總代組ぢやから、明

日は寄り合ひの場所へ顔出ししなされよ。」兄さんも言ひました。「俺は、もうこんな年寄になつたのちやから、今年から總代組は断つた。それよりか、お祭りにやお客が来るから、ご馳走のさかなでもうんと釣つて来るのちや。」「それちやお父さん俺も行くよ。」と兄さんが言ひ出しました。「うんにや、お前は若い衆と一緒に神輿の世話をしないと、もうあと二日ちやからなア。」お父さんは、どうしても一人でゆくと言ひましたが、翌朝の、京太がまだ目の覚めない暗い時にはお父さんと兄さんの二人は、さざ波の立つた港を出てゆきました。その日れうに出かけた舟は二三艘

しかなくて、あとはお祭り気分になつてさわいでゐました。ところが朝からジリ／＼と灼くやうに照りつけてゐた天氣が、お午まへ頃から、へんな雲が何處からともなく押し寄せて来て、お午を過ぎると、ぼつ／＼吹き出した風が、だん／＼強く、烈しくなつてきました。間もなく、どーつと雨が降り出しました。お宮で見世物の小屋かけをして居た人々も何處へか逃げてしまひ、立ちかゝつた小屋は吹き倒されました。祭りの世話をしてゐた人々もめい／＼自分の家と船とを心配して歸つてゆきました。屋根をつき貫くやうな雨と小屋を吹き倒す風とは物凄うなりを立て、あれほど物静

かな港の中は大きな波がどしんどしんと岸にぶつかり、帆前船は左右にひねりまはされ、漁船はあちこちでぶちこはされました。京太の家では、お母さんと、おばあさんと京太との三人が、家のつぶれさうになるのもうち忘れて、遠い大海のまつた中にあるお父さんと兄さんの身の上を、氣狂ひのやうになつて心配しました。京太はお母さんと地を匂つて裏岸へ出ました。どす黒く濁つて怒り狂つてゐる海の入口の方を眺めました。二人とも、雨風に身體全體をぶたれてつつ立ちました。「お父さん！」「兄さん！」二人は泣きながらかう叫び合ひました。



夜になつて難破船救助のふれが町中に出ました。縣の警察部から來てゐる高根丸といふ巡邏船が、風雨のまだ歇まない沖を目かけて助けに出てゆきました。發動機漁船は、風のやむのを待つて數艘出てゆきました。風雨は翌日になつ歇みました。お午が過ぎて夜となりましたが、高根丸も發動船も歸りません。京太とお母さんとおばあさんは見舞ひの人々にとりまかれて、心が顛倒して、悪い夢でも見て魔されてゐるやうな有様でした。その次の日の夕方、ケロリとしまり返つた港に、高根丸がまづたく疲れ切つて歸つて來ました。けれど、その船は手ぶらでした。

若い衆の乗つて行つた船もつぎつぎに歸りました。が、どの船もどの船も、父や兄をつれてゐる船はありませんでした。かうして四日目の朝、もう祇園祭りも終つた日に、隣りの〇縣と縣境ひになつた海岸に父と兄とがべつ／＼に打ち上げられてゐるといふ報せがきました。京太の一家は不幸のどん底に落ちこんでしまひました。

三

それからこそ、京太は馬鹿のやうに、毎日お臺場の方角を見つめて暮すのです。
えんやらやつさ、えんよいいんよいいんよいいん

やらやつさ、えんよい……
櫓をこぐ人の矢ごゑが、京太の
耳を掠めると、「ハッ！」とその
方を見まはしました。

「おうい、舖の大ばんがとれたぞ
うい。おうい……」お臺場から、
あらはれた船が、遠くからかう叫
びました。その聲が兄さんにそつ
くり似てゐたので、京太は思はず
「兄さん！……」と呼んで躍り上
りました。

すると今まで京太のゐる方向へ
進んで来た船先をいう／＼と左に
まはしてしまひました。
京太はがつかりして、瞳をまた
お臺場の方へかへしました。
「まだお前は、お臺場を見てをる
のか。さあ家に歸つて夕ごはんを

たべようよ……」お母さが、かう
言つて京太を呼びに來ました。
「……」京太は黙つてゐました。

お母さんの目には、いつの間に
か一ぱい涙が溜まりました。そし
て京太と一緒に、よその家の船が
大漁して、威勢よく海をすべつて
歸る有様を見まはしました。

「あゝして歸る船の一つが、ひよ
つとして、此處の石垣につけるか
も知れない……」京太はそんな
ばかり思ひました。

日がとつぶり暮れて、青や赤や
黄色の灯が色々の船や向ふ岸にボ
ツ／＼つき出しました。漁船もす
つかり沖から歸りました。京太と
お母さんは、うす暗くなつたお臺
場の方を怨しく見殘して家に歸り

四

間もなくお盆が參りました。
京太の町は港町でしたから船乗
りが多くて、住んで居る人たちは
唄や踊りが皆上手でした。で、お
盆が來ると、若い人も老人も一緒
になつて音頭をとつたり、踊りを
をどつたりしました。京太達はま

だ小さいので一とかたまりになつ
て音頭の囃子とりになりました。
死んでからはじめてのお盆にあ
ふ人の家は新盆と言つて、家中一
ぱいに燈籠や岐阜提灯を吊して、
精霊様を迎えるのでした。
京太の家は、何しろ二人の精
霊様を迎える悲しい新盆でした。

けれど、何處其處から、いろ／＼
な燈籠や供へ物が參りました。漁
業組合からは大きな牡丹燈籠が贈
られて來ました。そして、その提
灯や燈籠の中には燭燵の灯がはな
やかに明るくともりました。

盆の十五日のおひるすぎ、京太
の家に、兄さんの友達であつた松
治と保吉とが來て、お母さんとい
ろ／＼話して、麥麩などたべてゐ
ましたが、やがて、いつも京太が
坐つてゐるうら庭に、材を打つた

り、横棒をわたしたり竹箒で屋根
を葺いたりして、汗みづくで、簡
單な屋臺を作りました。松治が、
空の四斗檜を運んでその屋臺の上
にのせ、まき雜棒で調子よくたゞ
きました。すると保吉は、伸び上

るやうにして、
「春はア花さアくウ 青山アへん
の……」と音頭とりの真似をしま
した。二人とも笑ひ合ひました。

松治が京太を見て、
「おい、京太ア、こゝへ來て囃子
をせんかア。」と言ひました。

「いや」京太は少し莞爾して頭を
ふりました。

「そんなとこに居ると、もれ（亡
霊）がとりつくだよ、京太ア……」
と保吉が言ひました。

「もれちやア何か？」と京太はた
づねました。

「もれちやお前、沖で難船して死
んだり、海の中へ飛び込んで死ん
だりした人間ちやよ。盆にわが家
へよう歸らずにの、海でうめいと

るのちやげなど、お盆になるとな
海ばたにゐる人間や沖に居る船に
とりついて、遠いところへ引ばつ
て行くのちやげなど。保吉は京太
のをそばに近づいてこはい顔をして
云ひました。

「もれにとりつかれたら阿呆にな
るか、殺されるかするげな。」松治
もあとからつゞいて云ひました。

「今夜は沖にや、美しい灯をつけ
た船が仰山通るげなが、そいつに
逢ふたがさいご、死ぬる目にあは
さるゝげなね……」松治と保吉は、
恐しさに言ひ合ひました。

京太は熱心に二人の話をきいて
のましたか、
「ちやア、お父さんや兄さんたち
も、今夜は沖の方に居るのかな。」

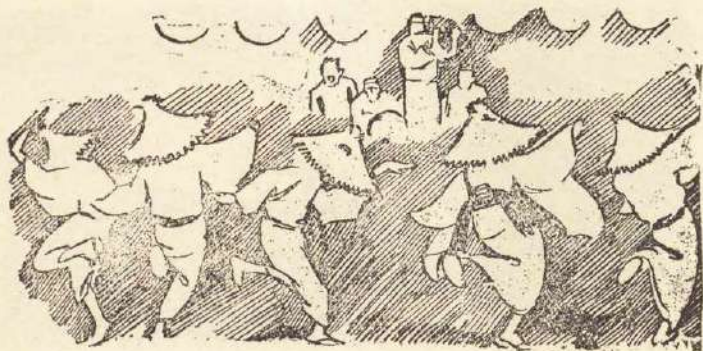


とたづねました。京太の顔つきは二人の若い衆の胸に、ぶしんと突きあたつたやうに思はれたほど、へんに氣味の悪い力で張り切つておりました。

松治と保吉は、顔を見合せて、悪いことを言つたといふ風に、ちよつと黙りましたが、「いや、もれになる人間は、生きたる時に、悪いことをした人間がなるのぢやよ。お前のお父さんや兄さんはよい人だつたから、もれにやならぬよ。」と言ひわけを言ひました。二人は屋臺作りを片づけて歸つて行きました。

五

宵の口から、京太の家には、精



どんより曇つて、空も港も、しめやかでうす暗いのでしたが、京太の家は、灯のいろときれいに着流した男や女の盆踊りとで、大へんな賑はしさをした。

唄ふもの、囃すもの、踊るものそれを見物するもの、その人々の渦をまいてゐる中に京太は一緒になつて、さわいで居たでせうか。家の中の途方もなく、明るい灯に、あか／＼と照らされてゐるのが、京太はいやでした。それで大聲で囃してゐる屋臺の下の子供のなかにゆきました。けれども、ムシヤ／＼とお握飯や團子をたべては大聲を張り上げてゐる仲間になつて、一緒に囃子とりをする氣にはどうしてもなれませ

靈樣拜みの人が澤山出たり入つたりしました。

明るい燈籠や提灯の下で、お母さんとおばあさんは、お客を相手にしてゐました。

間もなく編笠を雀踊のやうにかぶつて、色模様の襦袢をゾロリと着流した踊り子が二十人ばかりドヤドヤと這入つて来て、直ぐ裏の庭に輪を作りました。

松治と保吉が造つた屋臺には、赤い提灯がすらりとならび、音頭とりと樽うちのおちいさんが四五人上りました。皆の顔が眞赤にかがやきました。大せいの子供は、お握飯や團子を配つてもらつて、囃子とりには、屋臺の下に集りました。

んでした。

いつの間にか、大せいの人に離れて石垣のところへ参りました。そして曇つた夜の空氣の中に、眠つてゐるやうな港と向ひ岸の山とをじつと見ました。

すると、海の上か空の中か見さかひのつかぬところに、ポツカリとあかりが點つてゐました。そのあかりは京太の目には一つふえ、二つふえ、だん／＼多くなるかと思ふと、いつの間にか一つへり二つへりして、また一つポツカリとなつてしまひました。

「ギユウ：ギツ、ギユウ……ギツギユウ：ギツ……」と樽のおとが、かすかに京太の耳に響きました。しはらくすると、今度は、さつ



きのボツカリした灯が、だん／＼光りをまして來ました。すると、眞暗の中から、すこし小波の立つてゐる海の面があらはれました。

——と、その照らし出された海の上を、夜鯖釣りにでも行くらしい漁船が、一艘づつ、次から次へ過ぎてゆきます。そして暗い中へまた消えてしまひます。

京太は身體を乗り出して、その一艘々々を見入りました。

今しも、一艘の船が横ざりしました。右舷の櫓を漕ぐのは京太の兄さん、左舷の櫓をしづかに漕ぐのはお父さんでした。

「あッ！……」と京太の叫んだときには、その船はもう暗闇の中にかくれ、それと共にボツカリ

と點つてゐた灯も消えました。

「おッ！ お父さんだ！ 兄さんだ！」

無我無中で飛び上つた京太は、何を考へる暇もなく、石垣の階段を飛ぶやうに降りると、折から盆踊り見物の人達が乗りつけてゐる傳馬の中の一つに飛び乗り、暗闇の中を力一ぱいに、漕ぎ出しました。

お臺場のあたりにさしかゝると太平洋のどす黒い夜の海が擴がつて、はるか沖の方が、うすく黄色をおびてゐました。

「ギユウ；ギツ」といふ櫓の音がたしかにします。

「あすこだ！ あすこだ！ お父さん！ 兄さん！」

京太は命がけの力をこめて、何處までも闇の中を追ひました。

「おい、大はんの鮪ぢやぞう。」京太はそんな聲をきくとがむしやうに櫓をあやつりました。

六

夜がだん／＼更けてゆくので、踊り狂つてゐた編笠の人々も二人へり五人へりしてやがて、居なくなり、一時すぎると、盆踊りもやみました。家の方でもお客がすっかり歸つてしまつたので、お母さんもホツとして裏庭へ來ました。

「家の船が居ないどら、誰が乗つて行つたか知らんかア。」

といふ叫び聲がしました。「京太……京太はどこかい？」お

母さんはあとに少し残つてゐる人のあひだを、あちこちと捜しまわりました。が京太は居る筈がありません。

石垣の下から顔を怒らせた若い衆が上つて來て、

「家の舟が居らんぢや！ 皆のしゆ、誰が乗つて行つたかしらんか？」と大聲できゝました。しかし誰も知りませんでした。

「京太は何處に居るか知らんかな、皆のしゆ？」お母さんはだん／＼心配が強くなり、胸がとどろいて來ました。

すると、「この京太が乗つて行つたんぢやないかな？」舟の持主ははじめて氣づいたやうにかう言ひました。

「まあ！ どうしてや？ どこへ向けてや？」お母さんは思ひがけない事のやうに叫びました。

すると、この時、松治と保吉は何か呟き合つたかと思ふと、急いで、石段を下りて行きました。

× × ×
京太は翌日のあさ方、二人の若者——松治と保吉につれられて歸りました。

身は死人のやうに蒼白なつてゐました。しかし彼はかすかに笑つてゐました。

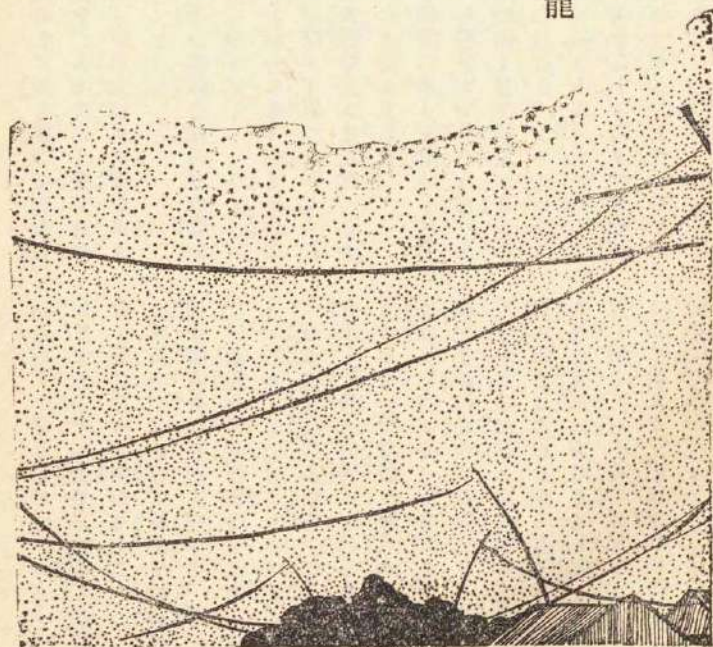
それから、もう毎日のやうに石垣のところにも坐らなくなり、大へん元氣にもなりました。

——たしか十五日の夜、お父さんと兄さんに會ふことが出來たのではないのでせうか。……（をはり）

月とアンテナ

達崎 龍

細いラヂオの
アンテナは
いつも裸で
屋根の上
お辭儀しいしい
アンテナは
何か聞いてる



屋根の上

いつか月夜の

アンテナで

ぶらんこしてゐた

細い月

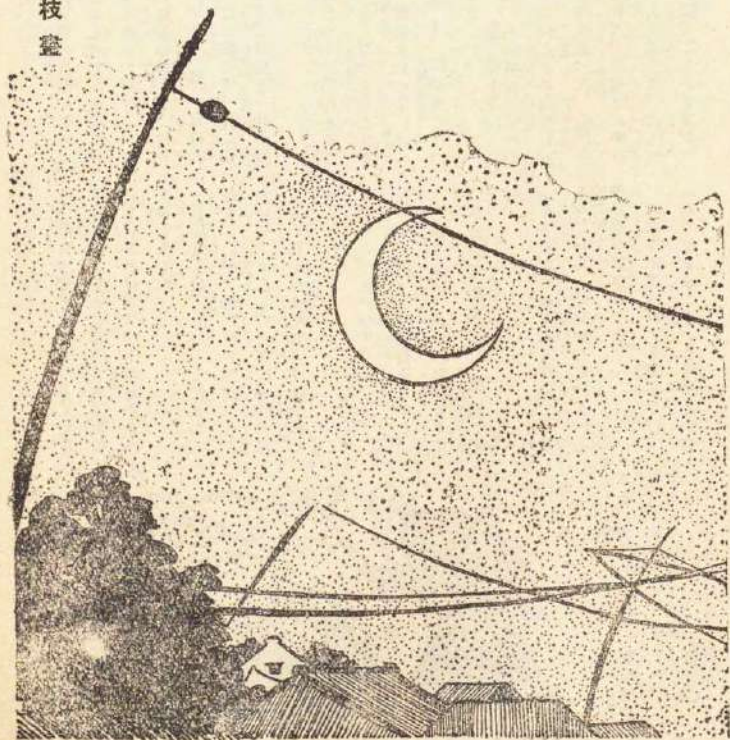
霜夜に細い

身を切られ

ぶらんこしてゐた

細い月

岩岡とも枝畫





六助さんご狐

河野青雨

昔、或村に六助さんといつて、狐の化けるのが見たくてたまらない人が居ました。
或日隣村から歸りがけに、山路へさしか、りました。すると、一匹の狐に出會ひました。六助さんは狐の化けるのが見たくなくて、狐は、
「お前何にでも化けられるかい」と聞きました。
「え、化けられませよ」と言ひました。

六助さんは

「そんなら俺と同じ人間に化けて見ろ」と、言ふと、もうそこに一人の人が立つてゐました。

六助さんは自分の顔をよく知りませんでしたが、狐の化けた人をうちへつれて歸つて、鏡にうつしてみますと、自分と一寸も違ひません。

六助さんはどつちがほんとの自分だかわからなくなつてしまひました。そして御飯もたべずに考へ込んでゐたので、狐が青くなつて、やせてきました。

六助さんは、村の庄屋さんへ行つて、どつちがほんとの自分だかふきいて來ようと思つて、狐の化けた人をつれて、庄屋さんのうちへ出かけて行きました。そして「どちが六助でございますか」

とききました。

庄屋はなぜそんな事をきくかとその御なまきりました。二人は實はかういふわけです、と口をそろへて申しました。

庄屋さんは、しばらくだまつてゐましたが、急にひざをぼんとたたいて、二人を、そばにあつた縁でぶんどりました。すると狐の方

は、「キヤン」といつて、狐の姿になつて、山へにげて行きました。六助さんは、ぶたれた所をさすつてないてゐました。庄屋さん

は、「どちが六助さんもない、六助さんは一人しか居やしないよ」と笑ひ笑ひ言ひました。六助さんはベコベコ頭をさげて「ありがとうございます」といつ

て歸つて行きました。

それから六助さんは、狐が大嫌ひになりました。たまたま狐を見



ると、棒でたかれた事と思ひ出して、身ぶるひをしました。(なほり)



綴方 藤原佐次郎

猫をすてる夕方(賞)

千葉縣山武郡東金校尋四

中島仲江

隣の方で猫が「にやあおん〜」とないてゐた。日暮方になつてもないてゐた。夜になつてもないてゐた。夜が明けて私が顔洗ひに行つても鳴いてゐた。洗はうと思つて金だらひに水をくんだら隣の武雄さんがランプつけて「猫はどこに居んだらうか」と言つた。下男が「おめらが家の縁の下ださ」と

言つた。

武雄さんがランプをつけて家のわきへ入つて行つた。私も一しよに行つた。縁の下を見ただけどもゐない。何だか鳴く様だと上を見たら屋根の間で鳴いてゐた。

武雄さんがランプを自分の家へ置いて來て屋根へ上つた。そしておさへようとして手を出したら食ひつかれさうになつたので、武雄さんは手をひっこました。

大工さんを頼んで來て、屋根を少しこはして、猫を取つてもらつた。猫はやせてゐた。武雄さんのお婆さんが、猫の首を繩でぎゆつとしばつたら「にやあをん」とな

いた。かはいさうにと思つた。お婆さんが花ちゃんに「うちやつて來い」と言つた。花ちゃんは猫をだいた。私は、正ちゃん弘

子ちゃんけいちゃんとい所に

て行つた。うちやる所まで行つて花ちゃんが、繩をといてやつたら、猫は川の中へ入つて行つた。

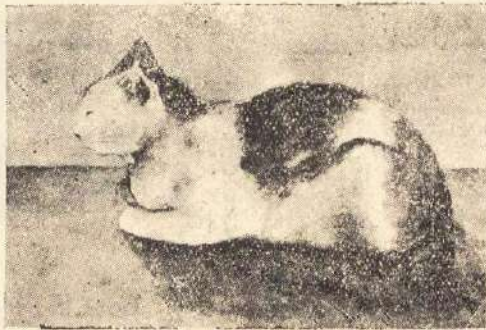
それからあがつて才子ちゃんの家へ行つた。子供等が一ぱいかけて來て見た。才子ちゃんの家のお爺さんと歌ちゃんが來た。歌ちゃんが、持つて來たひしやくで猫を拾つて、線路の向側へ打つちやらうとしたが、猫がひしやくの中

にまるくなつてゐて出て來なかつた。ぎゆつとたゝいたら出て來た。それから猫の頭を二つ三つたたいた。いゝ音であつた。私はかはいさうになつた。歌ちゃんが石を一つ投げた。猫は痛さうに悲しい聲でないた。「まだ生きてるな」と佐久間のよつちちゃんが、土を投げた。猫は土の下になつて死んだ。

「三毛猫」(賞)

東京市深川區明川校高二

和氣 伊勢雄



誰か「みんなの所へはけて来るよ」と言つたら、みんなは大聲で

「わあ」と言ひながら逃げ出した。私も逃げ出した。

歌ちゃん、「猫をかはいさうだと思つた人の所へはけて来るか
んね」と言つたらみんな「あんも
かはいさうでない」と言つた。私
もかはいさうだけど、「かはいさ
うでない」と言つた。

弟の洋服(賞)

新潟縣中蒲原郡輪田校尋六

齋 藤 ミヨ

私の家のきんじよでは、男の子
供はたいいて洋服をきてゐます。
私の家にも五つの子がゐます。或
日弟はお母さんに、「洋服かつて
くれなせや」とねだつてゐた。

「きものが一番よいはの。」
「だがね皆が着てるがね。」

「お父さんが歸つたらきいてみ
せや。」

弟はそれからお父さんのかへり
をまちどほしです。ちよつと外へ
行つたかと思ふと、すぐにかへつ
てきます。きつと家のあたりに遊
んでゐるのでせう。夕方お父さん
がやうやう歸つてこられました。

「お父さん、洋服買つてくれなせ
や。」といふ。あまりいふので、私
も傍から、

「お父さん、ほんとに近所の子ど
もは皆な着てゐるのに、買つてや
りなせや。」

「ではあすのばん、買つてくるわ
や。」

そのこゑを聞くと、弟はにこに
こわらひがほをして喜びました。
私もうれしくてたまりません。弟

は、あすの一日をまぢにまつて
ました。次の日の夕方でした。私
が外で遊んでゐると、弟はうれし
げに、

「お父さんが服買つて来たわの。」
といふ。私はすぐに家へはしりこ
んだ。

「着てみらせや。」「はい。」

弟はにこ／＼わらひがほで着せ
てもらつてゐました。

「もうぬぎなさい。」とお母さんに
いはれてもぬがんでゐました。

今日はおせつくなので、朝から
洋服をきて喜んで遊んでゐます。

馬 (賞)

千葉縣印旛郡本榮校尋五

高 橋 まさ

この間のことであつた。私と妹

と友達が一人と、
三人で遊んでゐる
と、向ふから三匹
の馬が元氣よくや
つて来た。それに
つれて三人の荷馬
車引が「ハイドウ
ノー」と云ひなが
ら、夏の真ひるで
ありながら、少し

もなんとも思はなさに、馬と一
緒に歩いて来た。

ちよつと私の家のまがりかどの
所まで来た時、中の馬が田に入つ
てしまつた。荷馬車引はあはてた。
前の馬車引は何もしらずにどんど
ん馬を引いていつた。田にはいつ
た馬の馬車引は先にいつた馬車引
を呼んだ。

「おうい／＼きてくろよ」。先
にいつた馬車引はなんの事かとふ
りかへつてみた様であつたが、馬
が田にはいつたと知ると、急いで
馬を木につないでとぶ様にしてか
けてきた。そして三人一しよにな
つて、一生けんめいに馬を田から
出さうとした。しかし重い荷をつ
んだ車をひいてゐるので、「ハア
ハアハア」と汗をながして出よう
とするが中々でられない。一人は



「子供」

和歌山縣伊都郡妙寺町大字妙寺高一

土橋 虎雄



手づなをもち、二人は車をもつて力いっぱいひきあげようとして

ゐる。「お、もうひといきだ。」
「それ！」そして三人の顔からは
いっばいに汗がおちる。がとうと
う馬は田からでることができた。
馬はいきぐるしさに、「ブルブル
ル」とふるへた。その時、私達は
葉かげでどうなることかと見てゐ
たが、みんな聲をそろへて「ばん
ざあい」と手をあげた。荷馬車引
たちはいろ／＼と話し合つてゐた
が一人が手づなをとると、他の一
人もとつてやがてつれだつてある
さだした。

私達は馬が落ちた田の所まで出
て行つて、そして馬がいつた方を
みた。三人の馬車引と三匹の馬は
前の通り、げんきよくあるいてゐ
た。馬車引たちはどんなことを
話し合つてゐるだらう。きつと今
の出来事を語り合つてゐるのでは

ないだらうか。それをきいてゐる馬
はどんなにうれしいだらう。と私
は心の中でこう思つた。そして馬
がはるかに遠くゆくまで立つてゐ
た。

夜汽車

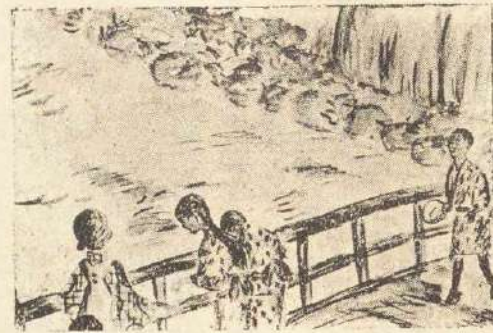
渡邊 多枝子
(十二才)

東京市牛込區早稲田町三四

ふと目をさまして見ると、汽車
はある驛にとまつてゐました。こ
こはどこかしらと思つて外を見る
と、くらくて見えません。

「にはさかにはさか」とかすか
に驛夫の聲がしました。
のる人もなくおりの人もありま
せん。みんなすや／＼ねむつてゐ
ます。電氣の光りだけがあか／＼
とてらしてゐます。おきてゐるの

は私だけだと思ふと、急にさびし
くなりました。バスケットの中か



「夕涼み」

和歌山縣伊都郡妙寺町妙寺校高一

森田 友晴

ら本をだしてよみはじめました。
と、汽車はしづかにうごきだしま
した。驛の時計はちようど二時を
さしてゐました。

先生へ

山口縣山口町大殿校尋四

時岡 隆二

先生お手紙をありがとうござい
ました。先生おたつしやだそうで
うれしく思ひます。私もたつしや
でよく勉強をしたり、いたづらも
してゐます。勉強のすんだ後は、
弟と二人でせみとりに行きます。

先生のところにもせみがいないの
るそうですな。私はせみが一ばん
すきです。せみをとることは上手
です、一どに二十びきぐらゐとりま
すので、うちの人はみんなせみと

りはかせといひます。先生おなか
をいためないやうにして下さいさ
うよなら。

家の書生

本郷區湯島町六ノ十一

島田 八郎

家に書生が居ます。書生は苦學
生です。苦學生とは苦しんで學問
をする人ださうです。それに違ひ
ありません。家の書生は朝から晩
まで働いて、時にはせんたく等を
させられます。

その時はさすがの彼も頭をかい
て弱つて居ます。ですけども僕
とは良く遊んでくれます。その時
は仕事などはかまはず、喜んで
遊んでくれます。だから僕は書生
が好きです。夜になると學校へ行



「チツケス」

洪水

山口縣鹿毛郡鹽田校高一
廣石 トヨ

それは、此の前の大雨が降つた時であつた。

私が學校から歸

へつて、お習をし

て居ると、今朝から降り出した雨が、いつそう、大降りになつた。

あたりは、ほの暗くなつてすさまじい雨は、おそろしい勢で降る。

家の中はしんとして、時々、ねずみが天井を走る音のみで、外にはきこえない。やつと復習もすんだので、表へ行つて見ると、雨はの

きから瀧の如くに流れて居る。さつきまで聞えなかつた、せどの小

川の水の音も、今は、水音高く流れる。あまり音がひどいので、せどへ行つて見ると、もう小溝へのみきれないのであらう。水は家のせどへと、流れてくる。其の水は皆内の床下へ、流れこんで居る。そのものすこさといつたらなかつた。内には誰一人もをらず、たゞ自分一人であるから、どうする事も出来ないの、泣きそうな顔して、庭へ行つて見ると、庭は水一面で、その水は又、前へ流れて出る。庭においてあつた下駄は、浮舟のやうに前へ流れ出る。すべて庭にあつた物は流れ出した。

私はます／＼心ぼそくなつて、來たので、どうしよう／＼と思ひながら、あちらへかけり、こちらへ行つたりしてうろたへて居る中に、水は床から二三寸しか切れて居

きます。それにその、書生は近眼です。或る時は皆んなに笑はれました。それは女中が黒いふろしきを見つけて居ました。書生も一しよにさがしました。『向ふにふるしきがあるぢやないか。』書生は云ひました。

すると女中が『違ふよあれは家の猫だよ。』皆んな是れを見て笑ひました。

なかつたので、いよいよこまつて目に涙をたへて居る所へ、兄さんが、田から歸つてこられた時の私の嬉しかったことは、何にたとへてよいか、たとへようがなかつた。兄さんは、すぐさま、せどの溝を切りあけてから、すぐばけつをもつて、庭へこられた。

來て見ると、庭が一面の水であるから、驚かれた。私が、をるの

にも氣がつかず、水をかい出され始めた。そうかうしてゐる中に、小さい兄さんも歸つて來て、二人が、水をかへたり、内の中をかたづけられた。約三十分間位してから、やつとすんだ。それでもまだまだ雨はやまない。川べりの田は一面の水にかこまれて、ものすこいやうである。まだ／＼雨はやまない。私の心はいつそうおちつかなかつた。

山びこ

千葉縣山武郡東金校郡四
丸山 はる

井 松 克 巳
もやが田んぼに
一ばいあつた。私
は弟と朝の田んぼ

道を歩いてゐた。涼しい風がざあざあと木の葉をゆすぶつて、氣持がよかつた。いなごがふいに、道のまん中へとんで來ました。弟が大きな聲で、『いなごおさへるか』といつたら山の方で誰かが弟のまねして云つた。弟はふしぎさうに『何か云つてみい』と云ふから私も『弟の馬鹿やろ』と言つて知らないふりをしてゐた。弟はおこつてしまつた。そして私をぶんなぐつべと言つた。私は『ほかにだつて弟つて言ふのはあるよ』とちやうしたら、だまてゐた。しばらくして私はうそを言つてゐるいなと思つたから、だしぬけに、『かんにんしない、おめがことうそついちやつたんだよ』と言つたら、『いゝさいゝさ』と言ひながらどん／＼家の方へかけて行つてしまつた。



新年號の特別大附録

新年號の特別大附録として本社の一大苦心になった

野口雨情先生作

童謡いろいろは歌留多

寺内萬治郎書伯書
を添へる事になりました。これは實にめづらしい歌留多で、日本にはじめて
出来たもので、そして、實に面白いものですから皆さんからやんやこいふ喝
采を博すこと請合です。新年雑誌界第一の附録だご信じます。

新年號の内容は本社編輯部が最大の努力をはらつたものでありますから、そ
の偉觀は申すまでもありません。毎號のおなじみ作家の外に諸大家の苦心の

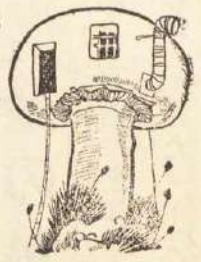
作を集めました。

尙、新年號より左の四大長篇を掲げて、いよく「金の星」の編輯振りを
發揮いたします。

- ◇ 大石圭税 (三) 島霜川
- ◇ 漂流二百三十日 (久) 米舩二
- ◇ 魔女の鳥 (山) 本二郎
- ◇ 白帆の唄 (小) 城庄二

「金の星」誌上童話大會 (豫告)

來る三月號に於てはなばなし「誌上童話大會」を開きます。皆さんに是非
參加していただきなければなりません。くわしくは次號に於て申し上げます。



通信

自由書選評

山本 鼎

△和氣伊勢雄君の『三毛猫』(推賞首席)は...

ある。霧のやうな筆致が少しうるさい。最左端のうしろむきの子供などよくかけて居る。

△鈴木茂君の『マクドナルド』と道り物の見え...

△松井克巳君の『おもと』注意深く描寫して...

童話の選後に

齋藤 佐次郎

△應葉童話の数が毎月ますます、減らして行く...

表しました。殊にかなしい玩具は創作童話としてかなりいい作である事は、皆さんがお読みになっておわかりの事と思ひます。

また『乗合馬車』も一寸としたお話ですが...

○ところで今月集つた中で、佳作中の佳作として...

大人篇では『輕井澤の兎と東京の猫』...

『龍と河童』が光つてゐました。それで...

(小人篇)

龍と河童 (千葉瑞學作) ○次説ではますます皆さんの努力を發揮して下さい。

編輯室より (記者)

○金の星の第八巻もいよいよ第十二巻を出し新しい新年號を迎へようとしてをります...

金の星 誌友募集 『金の星』の誌友を募集いたします。

出版目録を お送りいたします。

苦心に苦心の結果出来上つたもので、これまで、どこにもない、面白いもので、必ず皆さんから大評判を受けるものです。

今月號の綴方

齋藤 佐次郎

○口上はこの位として、皆さん、今から申すのはちと早すぎますが、兎に角雑誌の上ではもう年の暮なのですが、『どうぞいお歳をおとりになりますように』と第八巻の終りのごあいさつを申し上げます。

新らしく出た本

少年少女文 眞田 大助

臺灣童話五十篇 (沼澤青花著、菅井勝利裝幀挿畫) 東洋童話叢書の第三編です。臺灣の童話は實に珍らしいものです。取り分け面白いのは生蕃の童話です。中にも太陽征伐などの話は、世界の何所を求めても、光景がありません。文章も平易で面白く書かれています。それに装幀と挿畫もよく出てあります。四六判箱入二三一頁、定價一圓二十錢、東京市麹町區四番町七、第一出版協會發行。

世界少年少女名 ボムベイ最後の日 (大戸喜一郎著、平賀輝彦譯) 著大系第廿七編 英國のラフ・トーン 船の世界に名高い作です

○童話讀本 笛吹川 (神野岩三郎著、寺内高治郎裝幀挿畫) 日本で始めて出来た童話讀本の第三編です。笛吹川外十篇、どれも著名の創作ばかりで興味深い、教訓になる話が充ちられています。一編の赤い猫、二編の金の釣瓶と共に家庭に、學校に、圖書館に、世間の歡迎を受けることとあります。(四六判箱入一六九頁、定價壹圓、東京市本郷區動坂町三五九金の星社發行)

○世界名作童話 魔法の薔薇 (三井信衛著、松政徳次郎裝幀挿畫) この本は尋常科の小さい子供に讀ませて面白くて、そして爲になるものです。ダウイッドソンと云ふ名高い大家の作で、世界に行渡つて讀まれてあります。美しい繪の表紙で、原色の口繪の外挿畫が數十枚ものつてある箱入の本で定價六十錢とは、他に眞似も出来なものです。(四六判箱入一三〇頁、定價六十錢、東京市本郷區動坂町三五九金の星社發行)

加藤 正夫(長野) 童話掲載外佳作

- 坂井 羊子(東京) 池澤勉三郎(不明)
高木 白海(不明) 加納 九途(群馬)
原田小太郎(神奈川) 川口陽光子(富山)
田賀かず子(東京) 玉川 玉浪(廣島)
宗奈 葉々(東京) 小俣 操花(山梨)
高山 勝(東京) 福井 勝秋(愛知)
長井年三郎(東京) 武田 幸一(福田)
鈴村 眞哉(東京) 吉村 光雄(東京)

童話掲載外佳作

- 千葉 瑞學(宮城) 水谷 菊野(愛知)
宮岡スミ子(岡山) 千代田勝弘(東京)
高橋 七郎(愛知) 石澤 治男(長野)
吉原 光雄(廣島)

自由畫掲載外佳作

- 齋藤邦一(和歌山) 島田 春(千葉)
中島 仲江(千葉) 岡田不美親(和歌山)
山村 カエ熊(本) 岩谷 貞三(秋田)
木下由一(和歌山) 伊藤悦子(神奈川)
加納 狂純(群馬) 多木 利和(兵庫)
神津 清次(東京) 小館善四郎(青森)
尾藤 昌子(愛知) 中坂 當雄(東京)
山崎 俊雄(東京) 中坂 石次郎(東京)
齋藤 好治(和歌山) 中島 正三(埼玉)

綴方掲載外佳作

- 川島 秀雄(東京) 川邊善美子(神奈川)
平山 幸子(千葉) 丸山 はる(千葉)
神津 清次(東京) 中村 速生(大阪)
山崎 サヨ(新潟) 山本 夏彦(東京)
駒田 汀香(京都) 延原 澄子(岡山)
松浦トミ子(山口) 稲垣 秀那(東京)
五十嵐 七人(千葉) 梅本アヤ子(山口)
池田 秀雄(不明) 高橋 博子(東京)
高原 修次(東京) 山本 松子(石川)
福原喜代士(京都) 石澤 治男(長野)
田邊 信晴(朝鮮) 岩崎 勝子(神奈川)
水谷 菊野(愛知) 伊藤武之輔(新潟)
古賀 秀宜(不明) 千代田勝弘(東京)
加藤 正子(山口) 久山マキノ(山口)
末松安一郎(山口) 永峰 治一(山口)
大渡 秀夫(長野) 大浦 文彦(朝鮮)

河野 浩(朝鮮)

- 河野 浩(朝鮮) 岡田 しづ(埼玉)
織原 輝夫(東京) 中島 仲江(千葉)
齋藤邦一(和歌山) 佐藤 正男(秋田)
本多まさ夫(神奈川) 中村 繁(京都)
青木 友晴(和歌山) 中野 ナホ(千葉)
藤田 忠藏(山口) 大川 光春(千葉)
石川 辰之助(埼玉) 中山 二郎(山口)
原 辰之助(埼玉) 山本 夏彦(千葉)
伊藤武之輔(神奈川) 土井 久彌(千葉)
加藤 伊子(千葉) 山村 カエ熊(本)
茅野 正衛(山梨) 駒井 美男(京都)
高木 静榮(神奈川) 鈴木 美江(東京)
緑川 登(千葉) 山本 松子(石川)
上野 健蔵(熊本) 小野澤武次(群馬)
平澤 哲男(青森) 高野 修次(東京)
伊藤野政夫(北海道) 山田 稔(東京)
北里ひろみ(東京) 安 わくり(茨城)
今宮 健治(和歌山) 渡邊喜代治(愛媛)
佐藤 菊代(東京) 吉田 次郎(山口)
吉岡 誠(大阪)

新誌友名簿

- 北原 民雄(長野) 貴田 勝造(千葉)
副井 勝秋(愛知) 添田れい子(東京)
大野 作三(東京) 村山 ミツ(大阪)
青山 修一(福岡) 高岡やま子(京都)
渡邊正太郎(北海道) 井上 康(熊本)



讀者だより

▲御誌十一月號で、私のすきな讀物として第一にあげたいのは『夜の拍手』であります。暖かい純な友情、感動せぬものはありません。誰の音で式場のガラス窓がびりびりと響いたと本文にありました。否がラス窓は人の心の固く...

▲記者様お禮りはありませんか。金の星十一月月號は先月におとらぬ出来栄でした。『孫傳芳』、『フランクス』、『沈没したネーブルス』など、一つの本として出版して下さい。それから保積先生の畫物語を毎號出して下さい。僕は金の星誌の名著大系はお面白くて三冊も買ひました。(芝千代田勝弘)

▲秋もなかなかに頃となり、金の星の諸先生並に給仕さん御丈夫ですか。金の星の十一月號は本日落手致しました。まあ何といふ新しい表紙なんぞでせう。それから口繪は實際がつくり程いいものだと思います。讀物で皆ぞろゝの少年がその中『フランクス』の少年が『愛犬物語』、『夜の拍手』が最も光つてゐました。又遠崎先生の『秋のわかれ』は實にさびしい秋の末のこころを思はせました。金の星はよくなる一方です。次號はうんとすばらしいものにして下さい。(京城TK生)

▲野口先生には満鐵に招かれて、満洲へ創作旅行の爲にお出でになるお断り申し上げます。何とぞよろしくお願ひ申し上げます。(木多鐵磨)

なりました。旅行中には随分面白いお話があります。馬賊にも出遇つたりして申し分ない満蒙の盛で。何れ『金の星』誌上で先生のお話をしていたゞく事にいたします。(記者)

まな時ビクワックにでもいらつしやいませんか(東京、小山けい子) ▲童話の投稿はどれだけ多くさんでもかまいません。選者がびつくりする程御送り下さるやうお待ち下さい。私、時々社務の用事でありますが、大抵は静かな町です。今度行つた時はぜひ御立ち寄りしたいと思つてゐます。(一記者)

▲我部美にかえりました。金の星誌上をお借りしましてご披露までよろしく(大隈東區岡山町三五二藤野友都美) ▲私、今度『金の星』の愛讀者になりました。これから毎月投稿いたします。投稿の仕方はこれに宜しいです。私、私は御誌の誌友になりました。では昔年一人にお入れ下さい。(記者)

あるから諸兄姉の指導を願ふことが出来れば幸甚です。神奈川小栗七郎君麻田園の子にお慰ませよう。投稿の初めに際して一言のべさせていたゞきました。終りに貴社の発展向上と諸兄姉の奮闘とに専して筆を揮く(神奈川縣立橋本農藝学校、いこ社内東英産)



金の星社 十二月號

出版だより

近刊書のお知らせ

十一月中に左の五冊が発行の豫定になつてをります。

○大楠公

(偉人傳大系の八)

○ピーター大帝

(偉人傳大系の九)

○盗まれた王女

(世界名作童話三)

○親指トム

(世界名作童話四)

○竹取物語

(名著大系の廿一)

▼童話讀本の

第四卷

沖野岩三郎先生の童話

讀本第四卷は「海を越えて」といふ名で近く發行になります。今度は事實談ばかりで、左の六篇が入る豫定です。

○要さん辨さん

○指郎さんのイギリス行

○三栖さんのアメリカ行

○世界の英雄

○新聞に書いてあつた話

○海を越えて

この本に就て沖野先生は次のやうな意見を述べられました。

童話讀本の第四卷を事實童話篇といたしました。

掲載した六篇のうち、はじめの三篇は、みな私自身に多少の關係ある人たちのことを、童話化して書いたもので、其他は内外の新聞に掲載された特別記事の中から材料を集めたものです。

だから前の三篇は、興味中心の讀物として、幾分か私の創意が加はつてゐますが、他の篇は出来得るだけ事實を精査して、時日にも人名にも誤りの無いことを期して筆を取りました。

私の少年時代に、紀州沖で、英國汽船が沈没し、トルコ軍艦が沈没した事は、人の噂にもきき、當時の新聞記事によつても知つてゐます。しかし、今になつては、もう私たちの記憶は、極めて稀薄になつてゐます。のみならず、當時救助に従事した人たちですら、多くはその船名も人名も忘れてしまつてゐます。私はいつも、それを遺憾に思つてゐます。

今から何十年後、何百年後の少年たちに、正確に残して置いてあげたい事實を、單純な報告の記事でなく、童心に適した讀物として書き残すことは、童話創作に従事する人の、正にすべき義務ではないかと思ひます。

そんな理由で筆を執つた、この事實童話篇が、行きつまつた日本現在の童話界に、一つのエポックをなしたといふまでの、誇大な自信はもちませんが、私はこの六篇によつて、乾燥無味に陥り易い、ありふれた事實談が、童話としてどの程度まで書きこなされるものかといふ點に於て、多少の功を収め得たと、心ひそかに喜んでゐるのであります。

本篇に對する大人の讀者諸君のために、敢てこのことを申上げて置きます。

大正十五年十月

沖野岩三郎

▼「青い鳥」

茗溪會から推薦される
本社發行の「青い鳥」(大木雄三先生編)は茗溪會の推薦書となり

ました。この茗溪會といふ會では全国の發行圖書の内最もいいものをしらべて推薦する會で、非常に權威のある會です。次に「青い鳥」に就ての審査評をかゝります。

原作は有名なメーテルリンクの書いたもので世界の各國に於て上演されて賞揚を受けたものである。この本はそれを童話に書きなほしたものであつて面白く、讀んでゆくうちに幸福といふもの、眞意義を知らせるところに價值がある。小学校上級生の讀物としてよいと思ふ。

▼推薦書三冊

名古屋児童圖書研究会では本社の發行の次の三冊の本を優秀な書籍として推薦しました。

○ハムレット

○ナイチンゲール

○爲朝一代記

本社發行の本はいよゝ全國から大評判となつてをります。

▼「大楠公」の挿畫

お持ち兼ねの三島彌川先生の、「大楠公」もいよゝ今月は發行になります。非常に、本でありますから、きつと大評判となりま

▼「世界名作童話

大系」の評判

本社の一大計畫である「世界名作童話大系」もいよゝ第一編が發行になりましたが、この本を見た人は實際に驚かれました。各書店でも大變な評判でした。こんなにいい本がどうして、こんなに安い定価で發賣されたらうと、誰も彼も驚かれたやうです。また、内容を讀まれた少年少女諸君からは澤山のお禮の言葉が参りました。

▼竹取物語

日本のお話の中で、これほど面白い、立派なお話はないといはれてゐる「竹取物語」が發行になります。このお話は「古事記」のお話と共に、日本人の誰でもが讀んで置かなければならないもので、實にスバラシイお話です。

くわしいお話の筋をこゝに書いて、知らない方は、まあそんな面白いお話が日本にあるのかと驚かれるでせう。

それほど大したお話なんですから、是非皆さんに讀んでいただきたいと思ひます。

附録として添へてある「鉢かつ

【近刊豫告】

○みなし兒 (名著大系ノ三十)

○海を越えて (童話讀本ノ四)

○平家物語 (名著大童ノ廿一)

○ねむり姫 (世界名作童話五)

○利口な驢馬 (世界名作童話六)

近刊書は以上の五種であります。何れも一粒よりの名著ばかりです。

「みなし兒」は有名な英國の文豪ディケンズの傑作で、フランスのマーローの傑作「家なき子」にも劣

一四七

録目著名行發社星の金

郎三岩野沖
著生先

父戀し

紀州の海岸に起つたあはれな物語である。父は海へ流にされた、行方不明になつて了ふ。後に残された姉妹は母と共に父の行方を尋れ、遂に滿洲の空でめぐり會ふ長篇小説である。

圓一金
錢六金料送

郎三岩野沖
著生先

森の祈り

これ程清く尊い物語が他にあらうか。主人公は愛らしい少年と少女とである。家は破産し住みなれた家は人手に渡り、母は小學教員となる。少年と少女は都へ出て奮闘する。

圓一金
錢六金料送

郎三岩野沖
著生先

労働の少年

鐵山に働く二人の少年の物語である。父親は暴動の爲めに殺されて了ふ。孤兒となつた少年は如何にして暮したか。その運命を書いた興味深い雄大な長篇である。沖野先生の大作である。

圓十二圓一金
錢六金料送

郎三岩野沖
著生先

赤い猫

沖野先生の傑作として何人も推奨してある名篇十五篇。これこそ讀本として少年少女必讀の書である。日本最初の童話讀本にして、又日本の童話讀本として最高のものであるとの評を得てゐる。

圓一金
錢六金料送

郎三岩野沖
著生先

金のつるべ

「赤い猫」と共に全国的に有名になつてゐる名著である。單純な教訓でなく面白おかしく讀んで行く内に、自ら深い教訓を與へられるのが沖野先生獨特の妙味である。

圓一金
錢六金料送

録目著名行發社星の金

情雨口野
著生先

青い眼の人形

野口雨情先生の最も圓熟せる時代の傑作を集めた本書は日本童話界の珍寶ともいふべく研究家の座右になくてならぬ名著であります。飜案と挿畫は豊彦で現代の大家を稱せし一大藝術の殿堂の觀あり。

圓十八圓一金
錢六金料送

子房宅三
譯生先

家なき子

佛國の大家マロの世界的名著である。名家に生れ乍ら不思議な運命に於てあそびに旅役者に賣られて旅から旅をますらふ哀れな孤兒の物語である。フランスの家庭では必ず本書を備へてゐる。

圓十八圓一金
錢六金料送

衛信井三
譯生先

家なき娘

「家なき子」と同様作家マロの作になり世界有数の家庭小説である。旅の間に両親を失つた少女パリンが驢馬を道づれに、まだ見ぬ親父を尋れ行き願離辛苦する大傑作である。

圓十九圓一金
錢六金料送

郎二政島小
譯生先

狼少年

印度の大自然の中で狼に育てられた不思議な少年の物語である。熱帯の森林の中で猛獸と共に暮しつ、様々の冒險を行ふ勇壯無比の大雄傑にして、文豪キツプリングの世界的名作である。

圓十五圓一金
錢六金料送

雄武井武
著生先

ブウ太郎鍛冶屋

日本に武井武雄のある事は日本童話界の一大珍寶であるといはれてゐる理由名である。その武井先生が自作中最も自信のある童話に澤山の美しい挿畫を入れて理想的繪入童話集にしたのが本書である。

圓一金
錢六金料送

K2A-34

齒^ハを丈夫^{チウブ}にするには、
ライオン^{ライオン}ねりはみがきを
使^ツはなければなりません。
夜^ヨと朝^{アサ}とに、
きつこ
使^ツはなければなりません。



大正十一年六月十三日 大正十一年七月九日 大正十一年八月九日 大正十一年九月九日 大正十一年十月九日 大正十一年十一月九日 大正十一年十二月九日